

福井県埋蔵文化財調査報告 第114集

猪谷田畑遺跡
上吉野法善田遺跡
湯谷砂田遺跡

— 松岡吉野地区 県営経営体育成基盤整備事業に伴う調査 —

2010

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第114集

猪谷田畑遺跡
上吉野法善田遺跡
湯谷砂田遺跡

— 松岡吉野地区 県営経営体育成基盤整備事業に伴う調査 —

2010

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

本書は、平成17年度から19年度にかけて、松岡吉野地区県営経営体育成基盤整備事業に伴い、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した、猪谷田畑遺跡・上吉野法善田遺跡・湯谷砂田遺跡発掘調査の各成果をまとめたものです。

平成17年度の猪谷田畑遺跡の調査では、中世の建物跡や井戸などのほか、土坑と溝を組み合わせた特徴的な遺構が検出されました。平成18年度の上吉野法善田遺跡の調査では、奈良・平安時代の墨書土器など、当時の識字層との関連を示す遺物が検出され、特に上吉野地区の伝承との関連性が注目されます。平成19年度の湯谷砂田遺跡の調査は小規模ながら、溝の覆土や過去の圃場整備に伴う客土の中から多量の遺物が検出され、周辺地域に相当規模の集落遺跡の存在が推測されます。

松岡吉野地区は、越前五山の一つに数えられる吉野ヶ岳が谷の南奥に位置し、山岳修行の場として古くから有名な土地ですが、往時の様子を伝える史料は数少なく、詳しいことはほとんど分かっていません。とりわけ、吉野地区の谷の中で遺跡が発掘されたのは、今回の一連の調査が初めてのことだけに、これらの調査成果は吉野地区の歴史を考察する基礎的資料として、今後重要な意味を持つこととなるでしょう。

本書をはじめとする今回の各調査成果が広く公開・活用され、埋蔵文化財に対するご理解と、郷土の歴史に関する探究心をより一層深める端緒としていただければ、誠に幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、地元の方々など多くの皆様からあたたかいご支援とご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

平成22年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 吉 岡 泰 英

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター(以下、埋埋文)が「松岡吉野地区 県営経営体育成基盤整備事業」に伴い、福井県福井農林総合事務所の依頼を受けて、平成17年度に実施した猪谷田畑遺跡(福井県吉田郡永平寺町松岡湯谷所在)、同18年度に実施した上吉野法善田遺跡(同町松岡上吉野所在)、同19年度に実施した湯谷砂田遺跡(同町松岡湯谷所在)の発掘調査報告書である。
- 2 各遺跡の調査は、主査 中森敏晴(平成17~19年度)、嘱託職員 立壁肇(平成17・18年度)、同 水谷圭吾(平成18・19年度)、同 西端博紀(平成19年度)が担当した(役職はいずれも担当時、以下同様)。
- 3 各発掘調査は、猪谷田畑遺跡は平成17年11月8日から平成18年3月27日まで、上吉野法善田遺跡は平成18年4月24日から平成19年3月30日まで、湯谷砂田遺跡は平成19年4月12日から同年6月27日までそれぞれ実施した。各出土遺物整理作業は、猪谷田畑遺跡と上吉野法善田遺跡は平成19年4月1日から、湯谷砂田遺跡は平成20年4月1日から、いずれも平成22年3月31日まで埋埋文にて実施した。
- 4 本書の編集は主任 中森があたり、同 赤澤徳明、主査 白川綾、嘱託職員 水谷と分担して執筆した。執筆の分担は以下のとおりである。
中森 第1・2章、第3~5章第1・2・4節、第6章
赤澤 第3章第3節1、第4章第3節1~3)、第5章第3節1 白川 第4章第3節1~1)・2)
水谷 第3~5章第3節2
- 5 各遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合には、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 猪谷田畑遺跡と上吉野法善田遺跡の遺構全体図は、ともに中央測量設計株式会社に委託して作成したものを一部改変して使用した。上空からの写真は各航空測量時に撮影したものである。湯谷砂田遺跡の遺構全体図は、開拓航空設計株式会社に基本測量を委託し、埋埋文が平板測量で作成した。
- 7 第1・2章の挿図は中森の指示のもと、主査 野路昌嗣が作成した。遺構デジタル図化および挿図作成は、猪谷田畑遺跡を株式会社太陽測地社に、上吉野法善田遺跡および湯谷砂田遺跡を株式会社アーキジオにそれぞれ委託した。遺物挿図は各執筆者が作成した。検出遺構および出土遺物の写真撮影・写真図版作成は中森がおこなった。
- 8 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高(m)を示し、方位は磁北を用いた。また、X・Y座標軸は、国土方眼座標系第VI系に基づく。
- 10 本書中の挿図のうち、第1・3・4図は、国土地理院2万5千分1地形図「永平寺」(平成12年5月1日発行)を一部改変して作成した。
- 11 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して埋埋文に保管してある。
- 12 発掘調査に際しては、以下の個人および機関のご協力を得た(順不同・敬称略)。
清田正行 長谷川弘美 村上丈夫 山本利勝 児守盈智 清水清 橋本敦 秋田利恵子 永平寺町教育委員会 松岡多目的集会所センター ざおう荘(吉野公民館) 永平寺町松岡総合運動公園 'you me'パーク
- 13 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご教示を頂いた(順不同・敬称略)。
浅野良治(永平寺町教育委員会) 木下哲夫(あわら市教育委員会) 富井真(京都大学)
望月精司(小松市教育委員会埋蔵文化財調査室)
- 14 発掘調査には地元の方々の参加・協力を得た。また、遺物整理作業は埋埋文の整理作業員があたった。

目 次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 猪谷田畑遺跡	
第1節 概要	9
第2節 遺構	13
第3節 遺物	21
第4節 まとめ	25
第4章 上吉野法善田遺跡	
第1節 概要	27
第2節 遺構	31
第3節 遺物	38
第4節 まとめ	63
第5章 湯谷砂田遺跡	
第1節 概要	65
第2節 遺構	68
第3節 遺物	70
第4節 まとめ	81
第6章 吉野ヶ岳と山岳信仰	83

写真図版目次

図版第1	猪谷田畑遺跡 遺構	図版第8	上吉野法善田遺跡 遺物
	(1) 調査区遠景(東より)	図版第9	上吉野法善田遺跡 遺物
	(2) 調査区全景(北より)	図版第10	上吉野法善田遺跡 遺物
図版第2	猪谷田畑遺跡 遺構	図版第11	上吉野法善田遺跡 遺物
	(1) 井戸1(南東より)	図版第12	上吉野法善田遺跡 遺物
	(2) 土坑1(北東より)	図版第13	上吉野法善田遺跡 遺物
	(3) 竪穴1(北東より)	図版第14	上吉野法善田遺跡 遺物
図版第3	猪谷田畑遺跡 遺構	図版第15	上吉野法善田遺跡 遺物
	(1) 土坑10・溝8(東より)	図版第16	湯谷砂田遺跡 遺構
	(2) 土坑11・13・溝4・5・7(北より)		(1) 調査区近景(南より)
図版第4	猪谷田畑遺跡 遺物		(2) 調査区近景(東より)
図版第5	猪谷田畑遺跡 遺物	図版第17	湯谷砂田遺跡 遺物
図版第6	上吉野法善田遺跡 遺構		(1) 溝1・3(北西より)
	(1) 調査区近景(南東より)		(2) 溝1・3(南東より)
	(2) 調査区①・②・③全景(南より)	図版第18	湯谷砂田遺跡 遺物
図版第7	上吉野法善田遺跡 遺構	図版第19	湯谷砂田遺跡 遺物
	(1) 溝1・6(北より)	図版第20	湯谷砂田遺跡 遺物
	(2) 土器集中出土状況(北より)		

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	1	第12図	溝・土坑実測図(2)	19
第2図	各遺跡調査区位置図	3	第13図	溝・土坑実測図(3)	20
第3図	吉野地区周辺の地形図	5	第14図	土器実測図(1)	22
第4図	吉野地区の主要遺跡・史跡分布図	7	第15図	土器実測図(2)	23
第5図	猪谷田畑遺跡		第16図	砥石実測図	24
	調査区南北方向土層断面図	10	第17図	上吉野法善田遺跡	
第6図	猪谷田畑遺跡 遺構全体図	11・12		調査区土層断面図	28
第7図	掘立柱建物実測図(1)	14	第18図	上吉野法善田遺跡 遺構全体図	29・30
第8図	掘立柱建物実測図(2)	15	第19図	掘立柱建物実測図	32
第9図	井戸1実測図	16	第20図	掘立柱建物・ピット列実測図	33
第10図	竪穴1実測図	17	第21図	土坑実測図(1)	35
第11図	溝・土坑実測図(1)	18	第22図	土坑実測図(2)	36

第23図	土器集中出土状況実測図	37	第37図	打製石斧実測図	57
第24図	縄文土器実測図(1)	40	第38図	砥石・不明石器実測図	58
第25図	縄文土器実測図(2)	41	第39図	磨石類実測図(1)	60
第26図	縄文土器実測図(3)	42	第40図	磨石類実測図(2)	61
第27図	縄文土器実測図(4)	43	第41図	湯谷砂田遺跡 遺構全体図	66
第28図	縄文土器実測図(5)	44	第42図	湯谷砂田遺跡 調査区土層断面図	67
第29図	縄文土器実測図(6)	45	第43図	遺構断面図	69
第30図	縄文土器実測図(7)	46	第44図	須恵器実測図(1)	70
第31図	須恵器実測図(1)	48	第45図	須恵器実測図(2)	71
第32図	須恵器実測図(2)	49	第46図	須恵器実測図(3)	72
第33図	須恵器実測図(3)	50	第47図	須恵器実測図(4)	73
第34図	土師器実測図	51	第48図	須恵器実測図(5)	74
第35図	バンドコ実測図	52	第49図	土師器実測図(1)	76
第36図	石鎌・石匙・ 石錘・磨製石斧実測図	55	第50図	土師器実測図(2)	77
			第51図	石鎌・砥石実測図	81

表 目 次

第1表	掘立柱建物一覧表	13
第2表	主要溝・土坑一覧表	16
第3表	土器観察表	23
第4表	砥石観察表	24
第5表	掘立柱建物・ビット列一覧表	31
第6表	主要土坑一覧表	34
第7表	古代・中世土器観察表	50
第8表	石器・石製品観察表	62
第9表	主要溝・土坑一覧表	68
第10表	土器観察表	77
第11表	石器・石製品観察表	81

第1章 調査の経緯

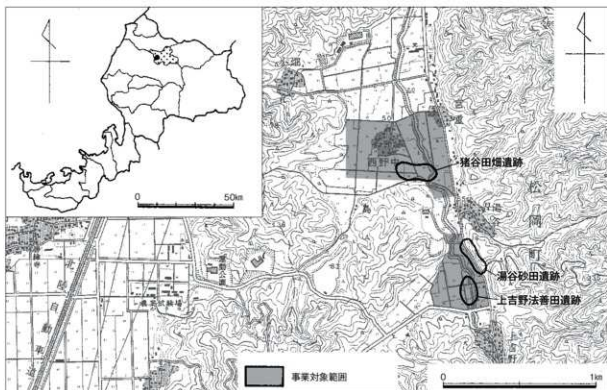
第1節 調査に至る経緯〔第1図〕

平成18年(2006)2月13日、福井県吉田郡の2町1村(松岡町・永平寺町・上志比村)が合併し、新生「永平寺町」が誕生した。その旧松岡町域の南東部に、旧松岡町・旧永平寺町・旧足羽郡美山町(現福井市)境にあたる吉野ヶ岳(標高547m)がある。吉野ヶ岳は別名「蔵王山」とも呼ばれ、その北西麓から南北に細長く伸びる小谷一帯は吉野地区¹⁾と通称されている。

平成15年(2003)に、福井県福井農林総合事務所(以下、福井農林)は吉野地区において、県営経営体育成基盤整備事業を計画、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター(以下、県埋文)に試掘調査を依頼した(第1図)。同年11月、県埋文は試掘調査を実施し、事業予定地内において、猪谷田畑遺跡・上吉野法善田遺跡・湯谷砂田遺跡など4遺跡について本格調査を必要とし、調査必要面積は総計57,660㎡におよぶ旨を回答した。

明けて、平成16年(2004)7月に発生した、いわゆる福井豪雨が激甚災害指定を受け、復旧事業に県内各所が慌しい中、この事業が足羽川流出土の一部を受け入れる役割も担うこととなり、間接的にはあったが、復旧事業同様の迅速な進捗が求められた。同年10月、福井農林は事業計画を変更し、主に盛土による調査面積の縮小を図った。県埋文は変更内容を検討した結果、猪谷田畑遺跡・上吉野法善田遺跡・湯谷砂田遺跡の3遺跡を調査対象とし、その調査必要面積は総計6,700㎡になる旨を回答した。

計画変更後の調査内容が確定すると、福井農林は県教育委員会に本格調査を要請し、協議の結果、平成17年度下期に猪谷田畑遺跡、平成18年度に上吉野法善田遺跡、平成19年度に湯谷砂田遺跡にそれぞれ対応することで合意に達し、本事業に伴う3遺跡の調査計画が決定した。



第1図 遺跡位置図(左上:縮尺1/2,000,000 右:縮尺1/25,000)

第2節 調査の経過〔第2回〕

1 猪谷田畑遺跡

発掘作業は平成17年(2005)11月8日より開始した。全般に天候不順な日が続き、作業に困難が伴う中、12月には降雪にも見舞われ、調査中断を余儀なくされた。

年が明けて、平成18年(2006)2月9日より、調査区とその周辺の除雪作業を実施、同月21日より発掘作業を再開した。幸い、その後は天候も徐々に好転に向かい、3月27日に現地調査を終了した。

以下、調査日誌を抄録する。

平成17年11月8日	発掘作業開始。排水用溝切り。
11月11日	包含層掘削開始。
12月7日	遺構精査・掘削開始。
12月13日	降雪のため、調査中断。以後、冬期休止。
平成18年2月9日	現場事務所周辺除雪開始。
2月14日	調査区除雪開始。
2月21日	発掘作業再開。遺構掘削開始。
2月23日	セクション測図開始。
3月20日	井戸1完掘、写真撮影。
3月22日	土坑14完掘。調査区清掃。
3月24日	空中測量。全景・個別遺構写真撮影。
3月27日	一部、平面図補足。現地調査終了。

2 上吉野法善田遺跡

発掘作業は平成18年(2006)4月24日より開始した。調査区は調査完了順に三分(①～③)される。まず、調査区①(700㎡)は翌年度稼働予定のポンプ場建設地で、工期から逆算した引渡し期限が夏期(7～8月頃)までにと決められていたため、優先的に作業を進め、8月4日に調査を完了させた。

それ以外の調査区については、当初は年度末までの完了予定であったが、ポンプ場建設およびパイプライン埋設工事に際して、当初想定していなかった工事用道路等の作業ヤードが必要となる旨、福井農林から申し入れがあった。急速、県文化課を含め、対応を協議した結果、作業ヤードを含めた調査区②(1,980㎡)を、11月末頃を目途に引き渡すことで合意し、11月22日に調査を完了させた。

残る調査区③(960㎡)については、平成19年(2007)3月27日に調査を完了させ、現地調査のすべてを終了した。

以下、調査日誌を抄録する。

平成18年4月24～27日	作業用具など搬入。
5月15日	発掘作業開始。排水用溝切りの後、包含層掘削開始。
5月25日	調査区①遺構精査・掘削開始。以後、調査区②・③包含層掘削と併行。
5月26日	内壁が被熱・赤化した土坑(土坑1)検出。
6月6日	土坑1写真撮影。
6月7日	土坑1平面図作成。
7月20日	土坑1焼土掘削、完掘。
8月2日	調査区①、清掃。遺物取り上げ。



第2図 各遺跡調査区位置図 (縮尺1/5,000)

平成18年8月3日	調査区①空中測量。全景・個別遺構写真撮影。
8月7日	C・D3区で土器集中出土状況を確認。縄文土器が主体。
10月13日	福井農林よりパイプライン埋設工事とその工事用道路確保の申し入れ。協議の結果、調査区②を設定、11月末までに引き渡すことで合意。空中測量も1回追加。
10月19日	C2区土器集中出土状況2ヶ所、写真撮影。
11月21日	調査区②空中測量。
11月22日	調査区②全景写真撮影。
12月13日	調査区③遺構精査・掘削開始。
12月19日	冬期休止。
平成19年2月20日	発掘作業再開。遺構精査・掘削。
3月14日	調査区③清掃。
3月15日	空中測量。全景写真撮影。
3月26日	事務所・作業用具など清掃。
3月27日	遺物、作業用具などセンターへ運搬。現地調査終了。

3 湯谷砂田遺跡

平成19年（2007）4月12日より発掘作業を開始し、同年6月27日に終了した。

以下、調査日誌を抄録する。

平成19年4月12日	発掘作業開始。排水用溝切り。
4月13日	包含層掘削開始。
6月4日	遺構精査開始。溝1検出、掘削開始。
6月7日	溝2掘削開始。
6月12日	溝3掘削開始。
6月18日	遺構完掘。調査区清掃。
6月19日	全景写真撮影。遺構測量開始。
6月27日	遺構測量完了。現地調査終了。

註

- 1 合併以降は松岡吉野地区と呼ばれる。吉野の谷間一帯と、谷の出口付近に位置する松岡吉野帯集落までを含む。

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

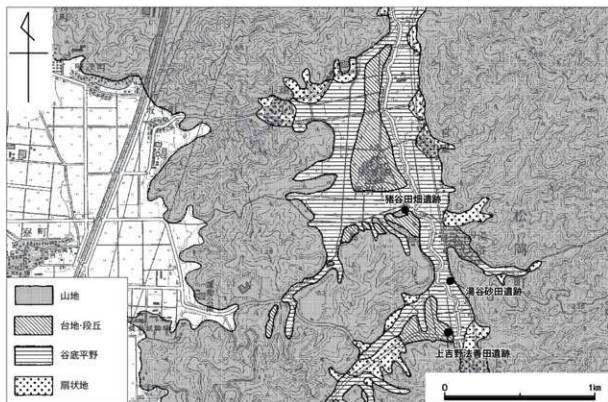
第1節 地理的環境 [第3図]

福井県は、昔の国名で言う越前と若狭の両国から構成され、本州日本海沿岸のほぼ中央近く、本州が西から次第に北東へ折れ曲がるあたりに位置する。現在では敦賀市の東方、木ノ芽山嶺を境に、以北を嶺北、以南を嶺南と呼び、行政的にも大別される。嶺北地方は古代の越前国にはほぼ相当し、嶺南地方は古代の若狭国と現代の敦賀市までを含む。

吉田郡永平寺町は嶺北北部のほぼ中央に位置し、本県最大の河川、九頭竜川の中流域にあたる。町域の大半が山地で、南北に標高500m以上の山々がそびえる間を九頭竜川が西流し、山麓に長大な河岸段丘を敷き連ねつつ、福井平野への開口部で広大な九頭竜川扇状地を形成している。この扇状地周辺の山々は、大小の古墳が数多く分布する県内有数の古墳集中地域となっている。

永平寺町松岡吉野地区は、九頭竜川扇状地に南隣する山中にあり、吉野ヶ岳の北西麓から南北に伸びる小谷から、谷の出口周辺の一帯までを指す。谷の中央を吉野ヶ岳山麓に水源を発する荒川が縦貫し、谷の出口で西に転じて以後、福井平野を大きく蛇行しつつ、足羽川に合流している。

猪谷田畑・上吉野法善田・湯谷砂田の3遺跡は、いずれもこの吉野の谷の南部にある。まず、猪谷田畑遺跡は、谷中に広く開けた谷底平野の中央を塞ぐように、舌状に迫り出した山地北面の小規模な段丘上に立地する。次いで、その山地の外周に沿って川を廻り、谷幅が急に狭まる付近の山が間近に迫った荒川右岸の狭長な段丘上に、湯谷砂田遺跡が立地する。そして、さらに川を廻った平野の南東部、山際から荒川左岸に広がる段丘上に、上吉野法善田遺跡が立地している。



第3図 吉野地区周辺の地形図 (縮尺1/25,000)

第2節 歴史的環境〔第4図〕

前節で記したように、吉野地区周辺の山地には県内屈指の古墳群が複数分布しており、それらの調査例は数多いものの、今回調査された3遺跡のように、谷の中での遺跡調査事例は稀である。本節では吉野地区およびその周辺に分布する、古代～中世期の主要な遺跡・史跡について記述する。

猪谷田畑遺跡（第4図1） 吉田郡永平寺町松岡湯谷に所在する。本書で報告する平成17年度調査に併行して、町道吉野74号建設事業に伴い、永平寺町教育委員会が平成17・18年度にかけて調査を実施、平安時代（9・10世紀）および中世（13～15世紀）の集落遺跡であることを確認した。

吉野堺大明地遺跡（第4図16） 同町松岡吉野堺に所在する。平成15～17・20年度に、中部縦貫自動車道建設事業ならびに国道416号道路改良工事に伴い、県埋文が調査を実施し、律令期を主体とする集落遺跡であることを確認した。中でも10数棟の掘立柱建物により構成される建物群は、すべての建物の長軸が南北方向に向き、規模や相対的配置に一定の規則性が見られるなど、計画性を持った建物群であると判断できる。遺物は須恵器・土師器が主だが、須恵質の円面硯や土師質の土馬、畿内産（畿内系）暗文土師器と見られる坏なども、少数ながら出土した。

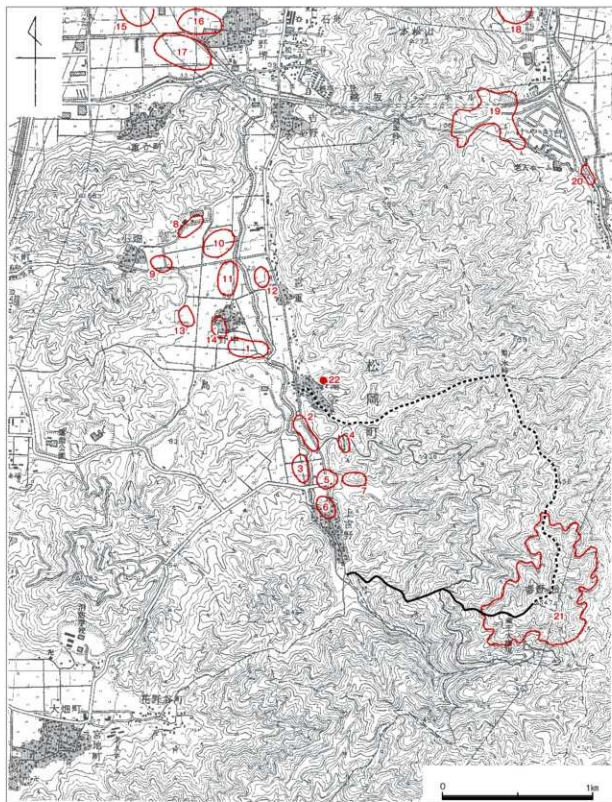
諏訪岡興行寺遺跡（第4図19） 同町諏訪岡に所在する。遺跡名は荒川興行寺（浄土真宗寺院。現同町市荒川所在）の前身寺院が、15世紀初頭に当地に創建されたという伝承にちなむ。平成元～3年度に国道416号改良工事に伴い、平成14～18年度に中部縦貫自動車道建設事業に伴い、いずれも県埋文が調査を実施し、13～16世紀にかけて展開した集落遺跡であることを確認した。複数の遺構面において、掘立柱建物や井戸・溝・欄列などを伴う屋敷地跡を多数検出し、興行寺は無論のこと、当地を含む旧永平寺町域・旧上志比村域一帯に展開したとされる、中世莊園志比庄との関連性も注目される。

京善藤谷口遺跡（第4図20） 同町京善に所在する。国道346号改良工事に伴い、平成12年度に県埋文が調査を実施し、平安時代を主体とする集落遺跡であることを確認した。遺構は柱穴を多く検出したものの、建物の復元には至らず、不明な点は多いが、遺物は当該期の須恵器・土師器を多く得たほか、陶磁器や土師質皿（かわらけ）などの中世遺物も得た。

藏王大権現遺跡（第4図21） 同町吉野ヶ岳山上一帯に所在する。吉野ヶ岳は泰澄²¹⁾の開山と伝えられる越前五山²²⁾の一つで、古くから修験道²³⁾の修行場として知られていた。山頂付近に藏王堂があるところから「藏王山」とも呼ばれ、堂内には藏王権現²⁴⁾立像と十一面観音²⁵⁾立像（いずれも木造）が安置される。分布調査により、藏王堂周辺で9世紀代の須恵器片が採集されていることから、開山は少なくとも平安時代まで遡れるものと推測される。なお、現在の山頂への参道（第4図実線）の入口にあたる上吉野集落は、古くは「印内」と呼ばれていた。「越前国名蹟考」によれば、印内とは「院内」であり、かつては僧坊が七坊あったが、天正三年（1575）八月の一向一揆掃討戦の際にすべて焼失したと記される。

湯谷神明神社（第4図22） 同町松岡湯谷に所在する。中世初期頃の作と推定される薬師如来坐像と不動明王立像（いずれも木造）が社殿に安置される²⁶⁾。なお、現在は廃道となったが、湯谷集落からも吉野ヶ岳山頂への参道（第4図破線）があった。その参道から上って七合目付近にある松岡上吉野78字板室地籍には、修験者が山中で起居したという室堂の跡があり、石塔や石仏の残欠も残る。神明神社の両尊はこの室堂に祀られていたが、天正の戦火を奇跡的に免れ、麓の社殿に移されたこと伝えられる²⁷⁾。

越前五山周辺には山岳信仰に関わる寺社・史跡が今も数多く残るが、湯谷神明神社と仏像、吉野ヶ岳山頂の藏王堂、上吉野の旧名「印内」や遺跡の字名「法善田」なども、吉野ヶ岳信仰に強く影響を受けているものと推測される。



- | | | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|------------|-----------|
| 1 猪谷田畑遺跡 | 2 湯谷砂田遺跡 | 3 上古野法善田遺跡 | 4 藤谷窯跡 | 5 上古野下浮遺跡 | 6 上古野上浮遺跡 |
| 7 上古野窯跡 | 8 小畑地堂遺跡 | 9 小畑遺跡 | 10 中々田遺跡 | 11 杉ノ木遺跡 | 12 宮重遺跡 |
| 13 西野中谷口遺跡 | 14 西野中遺跡 | 15 吉野塚桑下遺跡 | 16 吉野塚大明地遺跡 | 17 吉野塚板見遺跡 | 18 諏訪岡窯跡群 |
| 19 諏訪岡興行寺遺跡 | 20 京善藤谷口遺跡 | 21 藏王大権現遺跡 | 22 湯谷神明神社 | | |

第4図 吉野地区の主要遺跡・史跡分布図 (縮尺1/25,000)

註

- 1 吉野塚桑下遺跡とはほぼ並行して調査が実施されたが、調査報告書中では両者を同一の遺跡と判断、遺跡名を「吉野塚遺跡」とし、それぞれに地区名を付している。
- 2 奈良時代の修験僧（682～767）。山岳を修行の場とし、白山をはじめ、北陸地方一帯の山々を数多く開いたとされる。
- 3 泰澄によって開かれたとされる白山（福井・石川・岐阜県境）、越知山（丹生郡越前町）、文殊山（福井市）、日野山（越前市）、吉野ヶ岳の五山を指す。白山を別として部子山（今立郡池田町）を加える意見もあるが、白山を含む方が一般的である。
- 4 日本古来の山岳信仰に、仏教（特に密教）・道教などの外来宗教の影響が加わり、体系付けられた宗教。山岳修行を積み、超自然的な能力を体得した修験者（山伏）による呪術宗教的活動が特徴。現在では仏教の一派とされる。
- 5 修験道独特の仏尊。修験道の開祖と伝えられる伝説的人物、役小角（634?～706?）が奈良吉野で修行中に感得したとされる。
- 6 泰澄が信仰した仏尊で、白山の主神白山比咩大神と同一視される。なお、これら現存する2体の仏尊は、いずれも「近世の素朴な素人の彫出した像」（野村2002 28頁）であり、後述する天正の戦火で藏王堂とともに焼失した後、再造されたものと推測される。
- 7 「両仏共に地方仏師の作であるが、刀法のさばきと云い、像容の整えと云い、中世初期頃の本格的な像である点が注目される」（野村2002 28頁）。
- 8 空室は1棟でなく、薬師堂と不動堂の2棟であったとも言われる。いずれにせよ、この由来が事実とすれば、両尊とも加持祈禱の修法に関わる重要な仏尊であることから察するに、この空室は修行場と言うよりも、病氣平癒などを祈願する加持祈禱所であった可能性が高い。

参考文献

- 小栗田淳 監修 1981 『福井県の地名』 日本歴史地名体系第18巻 平凡社
- 河原純之・島田正彦・華田嘉彦・松浦義則 責任編集 1989 『角川日本地名大辞典 18 福井県』 角川書店
- 国土地理院 2004 『1:25,000 土地条件図 福井』
- 福井県教育委員会 1993 『福井県遺跡地図』
- 福井県編 1993 『福井県史 通史編1 原始・古代』
- 福井県編 1994 『福井県史 通史編2 中世』
- 永平寺町編 1984 『永平寺町史 通史編』
- 吉田森 1975 『松岡町史 上巻 一風土編一』
- 野村英一 1978 『松岡町史 上巻』
- 浅野良治 2006 『猪谷田畑遺跡』 『第21回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 66～67頁
- 浅野良治 2007 『猪谷田畑遺跡』 『第22回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 10～11頁
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006 『吉野塚遺跡（桑下地区・大明地地区）』 福井県埋蔵文化財調査報告第93集
- 青木隆佳 2006 『吉野塚大明地遺跡（中部縦貫自動車道建設事業）』 『年報20 平成16年度』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 12～13頁
- 中川佳三 2007 『吉野塚大明地遺跡』 『年報21 平成17年度』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 12～13頁
- 青木隆佳 2009 『吉野塚大明地遺跡』 『第23回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 12～13頁
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『諏訪間興行寺遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第20集
- 田中勝之 2004 『諏訪間興行寺遺跡』 『年報18 平成14年度』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 11頁
- 田中勝之 2005 『諏訪間興行寺遺跡』 『年報19 平成15年度』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 14～15頁
- 田中勝之 2006 『諏訪間興行寺遺跡』 『年報20 平成16年度』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 16～17頁
- 田中勝之 2007 『諏訪間興行寺遺跡』 『年報21 平成17年度』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 14～15頁
- 田中勝之 2008 『諏訪間興行寺遺跡』 『年報22 平成18年度』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 18～19頁
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003 『京善藤谷口遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第69集
- 堀大介 2005 『泰澄がみた風景』 『第20回国民文化祭・ふくい2005 シンポジウム（山と地域文化を考える）資料集』 第20回国民文化祭越前町実行委員会 260～277頁
- 修験道修行大系編纂委員会編 1994 『修験道修行大系』 国書刊行会
- 野村英一 2002 『Ⅱ-5. 越前五山の尊像』 『地方作仏教尊像の研究 若狭・越前の秘仏』 25～38頁
- 上杉喜寿 1980 『越前若狭 山々のルーツ』 福井新聞社

第3章 猪谷田畑遺跡

第1節 概要 [図版第1、第5・6図]

1 地形と層序

猪谷田畑遺跡は、吉野谷中央部に位置する台地の北側緩斜面、および外周部にかけて展開する。調査区は過去の圃場整備事業により、緩斜面を段切りにして水田に整備した箇所であり、広範囲に削平を受けている。全体の規模は東西約80m、南北約28m、総面積1,563㎡を測る。

調査区は4区画に分かれるが、各区画間かなりの高低差があるため、それぞれの境界となる畦部は安全面を考慮して撤去しなかった。また、調査区中央を南北に縦断する空白部は、農道と水路であるが、調査区南方の田畑地への出入りに支障をきたすおそれがあったため、これも撤去しなかった。

遺構検出面のうち、削平された平坦面の標高はおおむね60.20m前後で、段差が一段高い東端の小さな区画のみ、標高は62.00m前後である。本来の自然地形である傾斜面を残すのは、主に調査区の北西部で、全体に北西方向に下降しており、最も低い部分の標高は59.00mほどである。

標準層序は以下の3層に大別される(第5図)。土質は3層とも粘性が特に強く、作業員として調査に参加された地元の方々からの聞き取りによれば、これは吉野地区の土に共通する特徴とのことである。

I層：表土および耕作土。水田に段差があるため、堆積の厚さはいずれも一定しない。過去の圃場整備の際に搬入した客土の類と見られる。

II層：黒褐色土で構成される遺物包含層。堆積の厚さは10～40cmほどで、自然地形が傾斜している分、標高が低くなるほど、堆積は厚くなる傾向にある。ただし、調査区のほぼ南半分では地山層まで削平を被っているため、II層は完全に失われている。

III層：黄褐色土で構成される地山層。小礫が若干混入する。

遺構検出にあたっては、II層中に生活面が存在することが予測されたが、前述のとおり、広範囲にわたってIII層まで削平を被っていることに加え、II層中の分層も困難であったため、便宜的にIII層上面を遺構検出面と定めて、遺構調査を実施した。

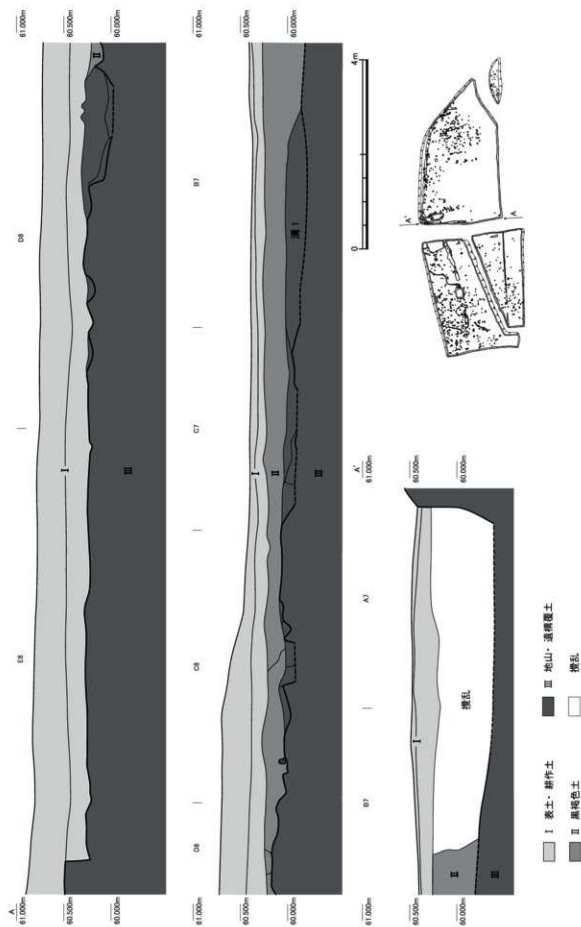
2 遺構検出状況

検出した遺構は、掘立柱建物6棟、井戸1基、竪穴1基、溝8条、土坑・ピットなどである(第6図)。全体にピットが主体で遺構密度もさほど高くない。なお、土坑・ピットは基本的に遺物が得られたものののみ遺構ごとの通し番号を付し、総数で土坑13基、ピット50基を数える。

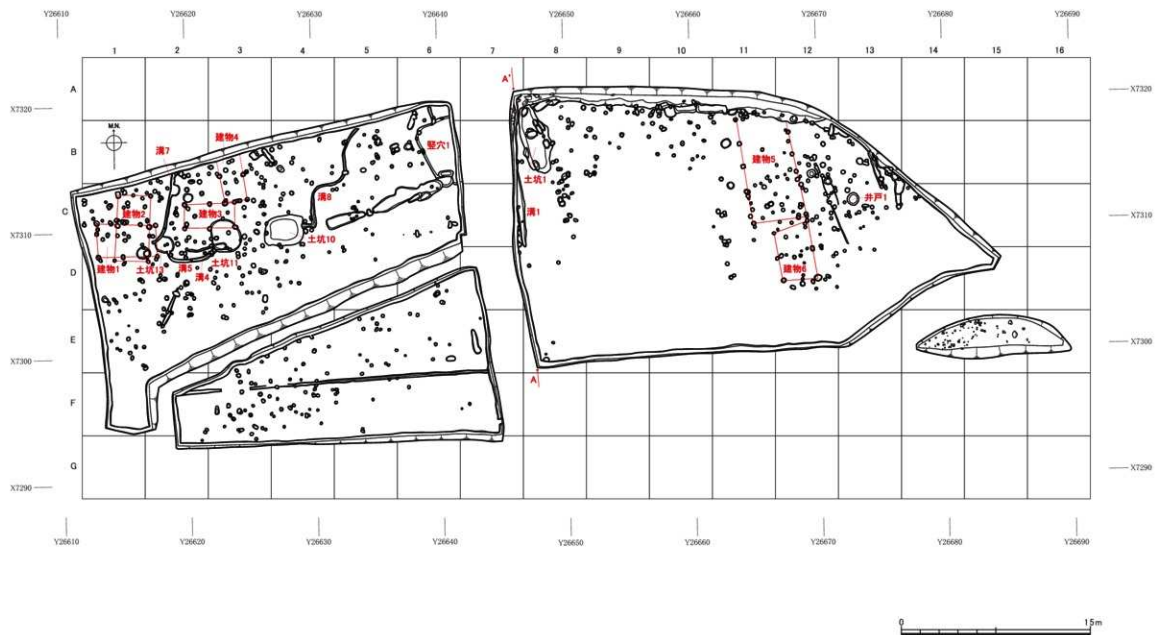
調査区は斜面を段切りに削平しているため、段差の跟込み付近(調査区山寄り)は必然的に遺構が少なくなっている。主要遺構が集中している地区は、遺構密度が特に希薄な9・10列付近を境に、西(B～D1～6・B8区)と東(B～D11～13区)の2地区に大別される。なお、C9・10区以南の遺構の空白部は、南方から突出していた尾根地形を削平したためと推測され、すなわち東・西の2地区は、本来この尾根地形によって隔てられていたものと考えられる。

3 遺物出土状況

出土遺物は大型コンテナで5箱分を得た。調査面積に比して、遺物量はかなり少ない。内訳のほぼすべてが土器で、中世の土師器が主体だが、越前焼などもわずかに含まれる。全体に細片が多く、完形もしくは全体形状が復元できた資料は、土師質皿が数点程度であった。



第5図 猪谷田遺跡跡 調査区南北方向土層断面図 (縮尺1/40)



第6図 猪谷田畑遺跡 遺構全体図 (縮尺1/300)

第2節 遺構 [図版第2・3、第7～13図、第1・2表]

検出した遺構は、掘立柱建物、竪穴、井戸、溝、土坑・ピットなどである。なお、各遺構の規模（長さ・幅・深さなど）や方位（角度）についての数値は、すべて遺構検出面を基準として、測量図上で測定・算出した概測値である。また、掘立柱建物については、現地調査終了後に測量図上で抽出・設定し、検証の結果、建物と判断したものを挙げた。

1 掘立柱建物

総数で6棟を検出した。すべて竪柱建物で、全体を検出し得たものが4棟（建物1～3・6）、部分的検出と見られるものが2棟（建物4・5）である。平面形はおおむね略長方形で、2×1間建物が多いが、柱間はかなり不規則である。柱穴は直径0.3～0.5m、深さ0.3～0.4m前後の不整形を呈するものが主だが、少数ながら方形のものも見られる。

以下に概略を記すが、一部の柱穴に付されるピット番号は、遺跡全体で遺物が得られたピットに付した通し番号であり、各建物内での固有のピット番号ではない。各建物の詳細については一覧表（第1表）を参照されたい。

建物1・2（第7図）ともに2×1間建物で、柱間が桁行・梁行とも2.5～2.7m前後と、構造と規模が酷似する。相互に位置が重複するが、柱穴同士が切り合う箇所はない。なお、建物1は後述する土坑13・溝7とも位置が重複する。

建物3・4（第7図）柱間が桁行・梁行とも2.0m前後で、隣接する建物1・2より、規模が一回り小さい。建物4は1×1間建物にも見えるが、周辺の状況から調査区外（北方）へ伸長する可能性が高いと考えられ、部分的検出と判断した。仮に建物4を建物3同様に2×1間建物と見なすと、その構造と規模は建物3と酷似する。やはり相互に位置が重複するが、柱穴同士が切り合う箇所はない。なお、建物3は後述する土坑11とも位置が重複する。

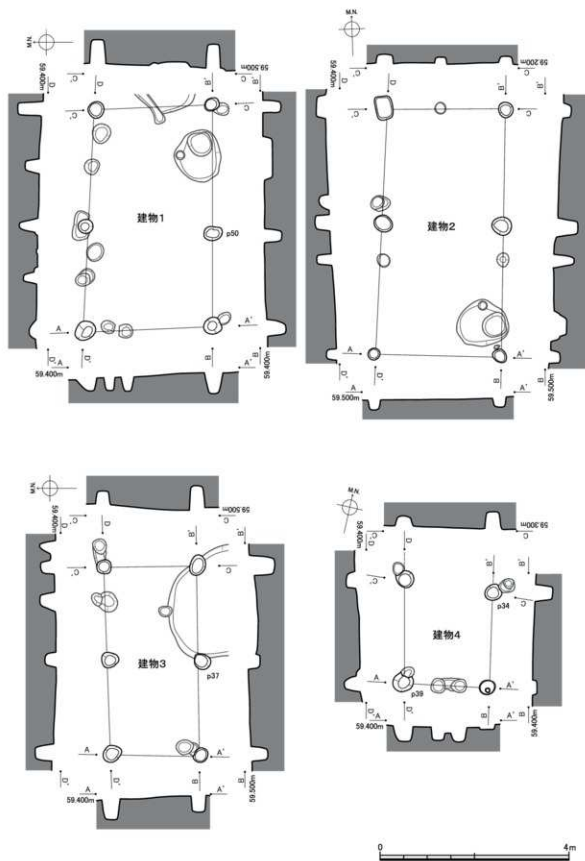
建物5（第8図）本遺跡最大の建物で、ほかの建物に比べて、規模・構造とも突出している。北端の一部で途切れているが、自然地形はこの付近から北方へ急激に下降しており、これ以上の伸展は想定しがたいため、4×1間建物と判断した。桁行の柱間はおおむね2.0m前後だが、南端部のみ2.5～3.0mとやや広い。一方、梁行は4.2mで、桁行のおよそ2倍となっている。

建物6（第8図）2×1間建物だが、桁行の柱間が東桁で2.3m前後、西桁で1.9m前後と、東西で大きく異なるため、平面形状が台形を呈している。梁行の柱間は2.7m前後と、東西の桁行いずれとも異なるなど、粗略な構造が目立つ。建物5と非常に近接するが、柱穴同士が切り合うなど、位置が重複するような状況は見られない。

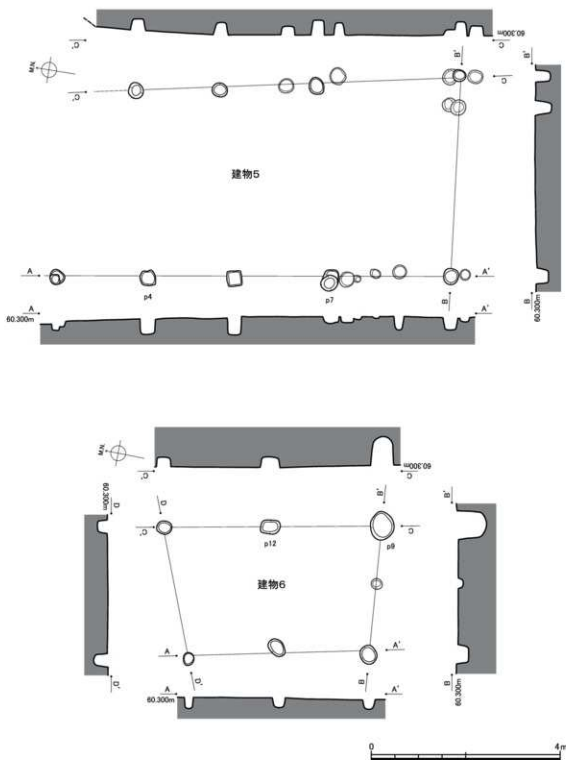
第1表 掘立柱建物一覧表

遺構名	地区	構造	柱穴開方	桁×梁 (間)	桁行×梁行 (m)	方位 (桁行)	出土遺物	備考	挿図No.
建物1	C-D1-2	竪柱	円形ピット	2×1	4.70×2.74	EW		建物2に重複	第7図
建物2	C-D1-2	竪柱	円形・方形ピット	2×1	5.26×2.68	N8° E		建物1に重複	第7図
建物3	C2-3	竪柱	円形・方形ピット	2×1	4.04×2.00	N89° E		建物1に重複	第7図
建物4	B-C3	竪柱	円形ピット	27×1	2.16×1.84	N12.5° W		建物3に重複	第7図
建物5	B-C11-12	竪柱	円形・方形ピット	47×1	8.38×4.20	N9° W		建物6に近接	第8図
建物6	C-D12	竪柱	円形・方形ピット	2×1	4.66×2.66	N10.5° W		建物5に近接	第8図

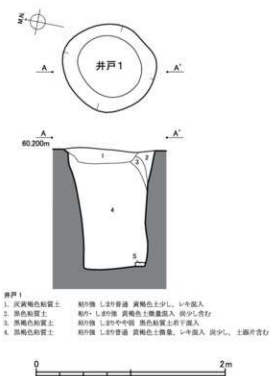
※桁行・梁行の長さ、方位の数値はすべて概算値もしくは推定値。



第7図 掘立柱建物実測図(1) (縮尺1/80)



第8圖 掘立柱建物実測図(2)(縮尺1/80)



第9図 井戸1実測図(縮尺1/40)

溝1(第11図) 方位は自然地形の傾斜方向にほぼ合致する。南端部で途切れているのは削平されたため、本来は斜面のさらに上方から溝が伸長していたものと推測される。

土坑1(第11図) 単独の遺構としては、本遺跡で最大の規模を有する。長軸の方位は溝1と同様、自然地形の傾斜方向にほぼ合致する。

土坑10・溝8(第12図) 標高の高い方から見ると、土坑10東部より、溝8がジグザグに屈曲しつつ、北東方向に伸長する。溝8の屈曲も規則的で、直角を意識しているように見受けられる。

土坑11・13・溝4・5・7(第13図) 標高の高い方から見ると、土坑11から溝4と溝5がほぼ並行しながら西方へ弧を描くように伸びる。溝4は途切れるが、溝5は土坑13につながり、土坑13からは溝7が北向きに伸びる。なお、前述のように、建物1・3と位置が重複している。

以上、2例の溝・土坑の複合状況には、溝と土坑との間に明確な切り合い関係が見出せないことから、同時に存在していたと考えられる。また、溝4が特に浅く途切れているのは、当時の生活面は遺構検出面(地山層上面)よりも上方にあり、すなわち遺物包含層中に生活面があったものと推測される。

第2表 主要溝・土坑一覧表

遺構名	地区	平面形	方位	平面規模(m) 長さ×幅(最大値)	深さ (m)	出土遺物	備考	挿図No.
溝1	B-C7~8	直線形	N6°W	5.76×0.50	0.2	土師質瓦	南端部は削平	第11図
溝4	D2~3	円弧形	N71°E~N82°W	1.72×0.20	0.03		土坑11と連結	第13図
溝5	D2~3	円弧形	N45°E~N87°E~N19°W	4.48×0.30	0.12		土坑11・13と連結	第13図
溝7	B-C2	直線形	N52°E~N11°E	6.08×0.30	0.07		土坑13と重複	第13図
溝8	B-C4~5	ジグザグ形	EW~NS~N37°E	10.56×0.40	0.16		土坑10と連結	第12図
土坑1	A-B7~8	長楕円形	N15°W	5.52×2.28	0.6	土師質瓦		第11図
土坑10	C3~4	隅丸長方形	N87°E	3.04×2.35	0.5		溝8と連結	第12図
土坑11	C-D3	隅丸方形	N1°W	2.58×2.36	0.2		溝4・5と連結	第13図
土坑13	C-D2	垂楕円形	N79°W	1.56×1.32	0.1		溝5・7と連結	第13図

※方位・平面規模・深さはすべて概算値。

2 井戸

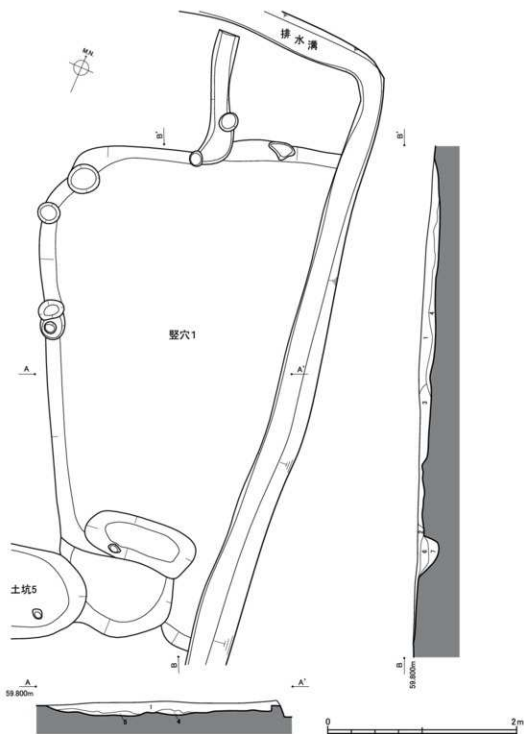
C13区で1基のみ検出した(第9図)。平面形はやや歪んだ楕円形を呈し、長径1.00m、短径0.94m、深さ1.28mをそれぞれ測る。井戸枠およびその部材などは検出されなかった。

3 堅穴

B6区で西半部のみ1基検出した(第10図)。一边5.00m前後、深さ0.05~0.15m前後の隅丸方形を呈すると推定される。仮に西辺を主軸と見ると、方位はN25°Wを向く。堅穴住居跡である可能性が高いと考えられるが、周囲や床面に柱穴などは検出されなかった。一方、南隅には長楕円形のやや深めの土坑や、壁際に溝や小ピットも点在しているが、その性格や堅穴との関連性などは不明である。

4 溝・土坑

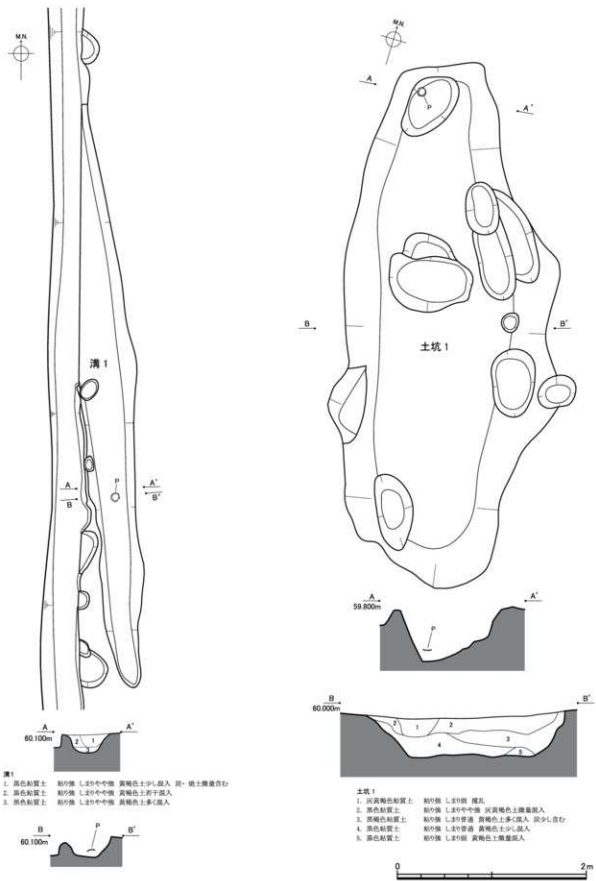
本項では主要な溝や土坑のほか、溝や土坑が複合する状況についても記述する。各遺構の詳細については一覧表(第2表)を参照されたい。



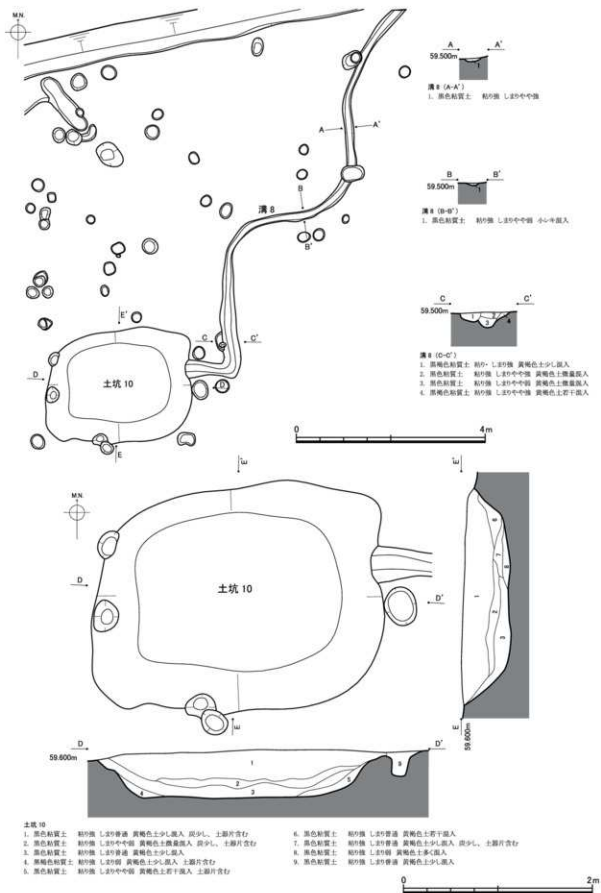
竖穴1

1. 灰褐色粘質土 形中・L200mm 黄褐色土少し、L10mm混入 土層片含む
2. 灰色粘質土 形中・L200mm 黄褐色土少し混入
3. 灰褐色粘質土 形中・L200mm 黄褐色土多量混入
4. 灰褐色粘質土 形中偏 L200mm弱 黄褐色土微量混入
5. 灰褐色粘質土 形中偏 L200mm弱 黄褐色土微量混入
6. 灰褐色粘質土 形中・L200mm 黄褐色土の片混入
7. 黄褐色粘質土 形中偏 L200mm弱 黄褐色土若干混入

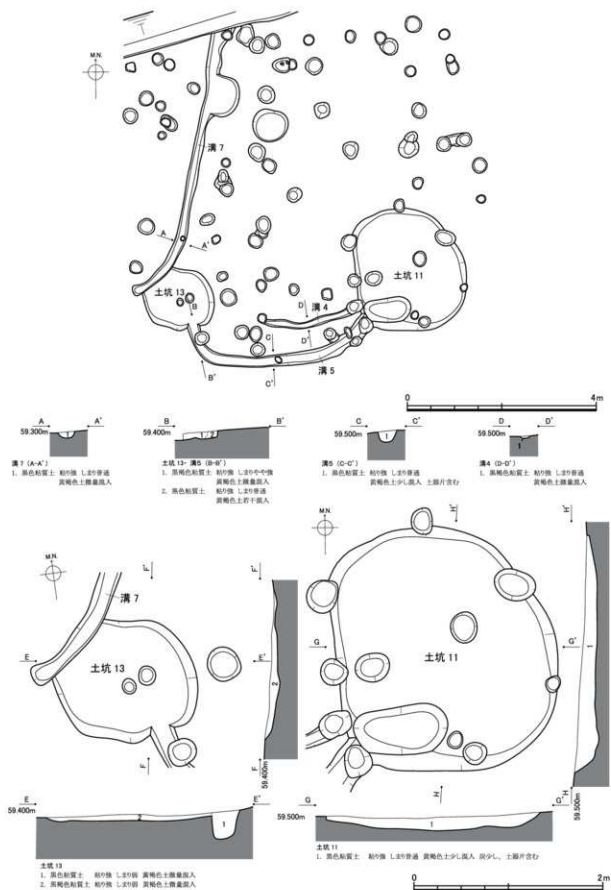
第10圖 竖穴1 実測図 (縮尺1/40)



第11圖 溝・土坑実測図(1)(縮尺1/40)



第12圖 溝・土坑実測図(2)(上:縮尺1/80 下:縮尺1/40)



第13圖 溝・土坑実測図(3)(上:縮尺1/80 下:縮尺1/40)

第3節 遺物 [図版第4・5、第14～16図、第3・4表]

1 土器

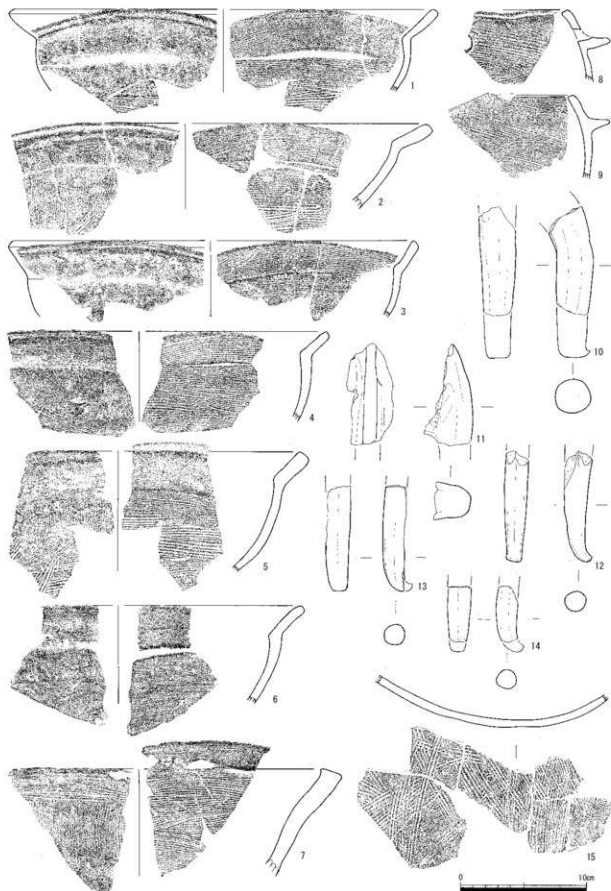
出土した土器で図化し得たのはいずれも中世の土器で、鍋や羽釜とその脚、土師質皿などの27点と中世陶器4点である(第14・15図)。

鍋はやや丸みのある胴部から口縁が屈曲する6点(第14図1～6)である。外面は屈曲部に指押さえを残し、胴部はヨコ、またはタテハケ、内面は口縁・胴部ともにヨコハケとする。口縁部には接合しなかったが、この鍋の底部と考えられるものが1点(第14図15)あり、わずかに小さな平坦面がある。不定方向にハケ調整をする。鍋と同じような調整で、口縁が屈曲しないものが1点(第14図7)あり、先の鍋に類似する色調・胎土のものである。口縁の形状が中世の搦鉢に近い。器壁も鍋と比べると倍近く厚手である。羽釜は丸い胴部から口縁が内弯するもの(第14図8・9)で、端部に面を作る。内外面ともにヨコハケとし、鈎の上に円孔があるもの(第14図8)もある。一般的には羽釜の脚となるもの(第14図10～14)がいくつかある。脚は棒状に伸びて、接地する端部がわずかに外反する。胴部に付いたものがなく、ここでは羽釜に付く可能性が高いものと考えているが、西日本の一部(例えば山口市内の大内氏関連遺跡など)では、最初に述べた鍋に付くものもあり、羽釜だけに付くとは断定できない。北陸では、このような鍋や羽釜などの類例自体が乏しく、不明な点が多い。土師質皿(かわらけ)は復元口径が15cm前後の中型のもの(第15図1～7)と、9cm前後の小型のもの(第15図8～11)の2種類がある。中型・小型の両者とも、底部から口縁の立ち上がりをユビオサエして、口縁部をヨコナデするのを基本とする。しかし、中型のものには成型や調整にあまり個体差はないが、小型のものには底部から口縁への立ち上がりが不明瞭なもの(第15図9)から、立ち上がりが明瞭なもの(第15図8・10)や、平底から短いが明瞭に角を持って立ち上がるもの(第15図11)のように、個体差が大きい。

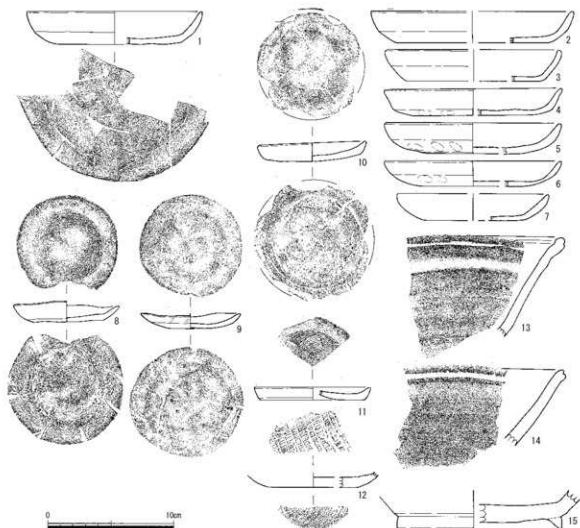
陶器は、越前焼の捏鉢の口縁2点(第15図13・14)と底部1点(第15図15)、さらに灰釉の卸皿(第15図12)がある。捏鉢の口縁には一条の沈線が巡る。その底部と考えられる破片の高台は断面が三角形を呈する。卸皿は小さな底部片であるが、その内面にはヘラによる格子目の卸目があり、底部は糸切りである。

以上、本節に図示したのはいずれも中世の遺物で、土師質皿(かわらけ)や越前焼とともに13世紀前後に属すると考えられる。土師器の鍋は、福井市今市岩畑遺跡SE535や同市福井城跡(4号線地点)の井戸(遺構362)の事例から、ほぼ同時期と見られ、少なくとも図化したものもほぼ13世紀代に収まるものと見なされる。つまり、本遺跡では13世紀代の土器のみが確認されたと言える。ハケ調整の土師器鍋については、本県での出土例が少ない。細片は表採・表土資料などいくつか散見されるが、時期の特定できる遺構からの出土で、器形が分かるものは、先の今市岩畑遺跡と福井城跡、丹生郡越前町小倉石町遺跡などの出土例しかない。現段階では福井県でも出土例は少なく、北陸の他県では見ることの少ない(またはない)ものである。いくつかの遺跡から出土しているこの土師器の鍋は、調製や色調・胎土などがいずれも非常に類似する。

遺構から出土した一括の土器群ではないが、所属時期がほぼ13世紀に限定される状況は、まとまった資料が少ない時期だけに、大きく注目される。同時に、鉄製品がかなりの商品にまで普及したであろう中世前期に、鉄鍋でなく、土師器の鍋が多く出土しているという事実をどのように解釈するのかも、今後の大きな課題であろう。



第14圖 土器実測圖(1)(縮尺1/3)



第15図 土器実測図(2)(縮尺1/3)

第3表 土器観察表

図版No.	地区	遺構	種類	器種	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存高	焼成	色調	胎土	備考	写真図版
第14081	C1	包含層	土師器	鉢	口縁一 断面	1/10	外) 口縁部:ナデ 裏部:指押さよ? 調整:染いハケ 内) 染ハケ	(32前後)		(6.4)	残	良好	褐色	②	注本表の 図版番号	図版第8
第14082	A11	覆瓦	土師器	鉢	口縁一 断面	1/32	外) 口縁部:ナデ 裏部:ナデハケ 内) 染ハケ			(6.7)	残	良好	にじみ 黄褐色	②		図版第8
第14083	B8	包含層	土師器	鉢	口縁一 断面	1/10	外) 口縁部:ナデ 裏部:指押さよ? 調整:染いハケ 内) 染ハケ	(30前後)		(6.0)	残	良好	にじみ 黄褐色	②		図版第8
第14084	C2	包含層	土師器	鉢	口縁一 断面	1/32	外) 口縁部:ナデ 口縁部:染いハケ 調整:ナデ 調整:ハケ 内) 染ハケ			(7.0)	残	良好	灰黄褐色	②		図版第8
第14085	A11	覆瓦	土師器	鉢	口縁一 断面	1/32	外) 口縁部:ナデ 裏部:ナデハケ 調整:染いハケ 内) 染ハケ			(9.5)	残	良好	にじみ 黄褐色	②	外) 保存者	図版第8
第14086	井戸1	土師器	鉢	口縁一 断面	1/32	内外面とも口縁部は指押さよ 調整は ハケ				(7.7)	残	良好	黄褐色	②		図版第8
第14087	p28	土師器	鉢	口縁一 断面	1/32	外) 口縁部:ナデ 口縁部:染ハケ 調整:ナ デハケ 調整:ナデ 内) 染ハケ				(8.4)	残	良好	灰白色	②		図版第8
第14088	B8	包含層	土師器	須臾	口縁	1/32	外) 染ナデ 内) ハケ			(5.7)	残	良好	灰白色	②		図版第8
第14089	D10	包含層	土師器	須臾	口縁	1/32	内外面ともハケ			(6.5)	残	良好	灰白色	②		図版第8
第14090	C1	包含層	土師器	鉢		1/3	焼成のための調整不明			(8.6)	残	やや 不目	灰白色	①		図版第8
第14091	B3	包含層	土師器	鉢		1/4	焼成のための調整不明			(8.0)	残	良好	灰白色	②・③・④	外) 保存者	図版第8
第14092	C6	包含層	土師器	鉢		1/3	外) ナデ 内) ナデ			(8.7)	残	良好	にじみ 黄褐色	②		図版第8
第14093	C3	包含層	土師器	鉢		1/4	外) ナデ 内) ナデ			(4.4)	残	良好	にじみ 黄褐色	②		図版第8
第14094	C3	包含層	土師器	鉢		1/3	焼成のための調整不明			(8.3)	残	やや 不目	褐色	②		図版第8
第14095	A11	包含層	土師器	甕	胴部	1/12	内外面ともハケ 保存者			(18.4)	残	良好	にじみ 褐色	②	保存者	

図録No.	地区	遺構	種類	部材	残存率	調整・技法・文様など	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存高	焼成	色調	胎土	備考	写真図版
第15図1	A11	甕瓦	土師器	瓦	1/2	内外面ともナデ	(13.8)		2.1		良好	にぶい 黄褐色	①		図版第9
第15図2	A11	甕瓦	土師器	瓦	1/4	外) 底面・器踵さえ 他は内外面ともナデ	(17前後)		2.5		良好	にぶい 黄褐色	②		
第15図3	D1	包含層	土師器	瓦	1/4	外) 底面・器踵さえ 他は内外面ともナデ	(13前後)		2.5		良好	にぶい 黄褐色	②		
第15図4	p32	土師器	瓦	5/12	外) 底面・器踵さえ 他は内外面ともナデ	(13.8)		2.1			良好	褐色	②		
第15図5	D3	包含層	土師器	瓦	1/6	外) 底面・器踵さえ 他は内外面ともナデ	(13.8)		2.5		良好	灰青褐色	③		
第15図6	A9	甕瓦	土師器	瓦	1/6	外) 底面・器踵さえ 他は内外面ともナデ	(13.8)		2.0		良好	灰青褐色 赤褐色の 砂粒を含む			
第15図7	C2	包含層	土師器	瓦	1/4	外) 底面・器踵さえ 他は内外面ともナデ	(11前後)		2.6		良好	褐色	②		
第15図8	A7	包含層	土師器	瓦	5/6	内外面ともナデ ケール磨付着	8.4		1.8		良好	浅黄褐色	②	ケール 磨付着	図版第9
第15図9	葬口1	土師器	瓦	1	外) 底面・器踵さえ 口縁部・器踵さえ 他は内外面ともナデ	7.9		1.2			良好	浅黄褐色	①		図版第9
第15図10	C7	溝1	土師器	瓦	5/6	外) 底面・器踵さえ 他は内外面ともナデ	(8.4)		1.6		良好	にぶい 褐色	②		図版第9
第15図11	A11	包含層	土師器	瓦	1/3	外) 唇部・ナデ 底面 ハナ ナデ	9.0		1.0		良好	褐色	①		
第15図12	B13	包含層	瀬戸 須賀	底面	1/3	外) 未切り後ナデ			(1.2)		残	良好 にぶい 黄褐色	③		図版第9
第15図13	A12	甕瓦	越前焼 鉢	土師一 調部	1/12	施釉 内外面ともナデ			(7.9)		残	良好 明褐色	⑤	外) 自然 磨付着	図版第9
第15図14	C13-D4	包含層	越前焼 鉢	土師一 調部	1/12	内外面ともナデ			(6.0)		残	良好 にぶい 褐色	⑤		図版第9
第15図15	C14-A10	包含層・ 甕瓦	越前焼 鉢鉢	底面	11/12	外) 高台・ナデ 底面 ハナケズリ 内) ナデ			(1.2)		残	良好 にぶい 黄褐色	②	内縁部に 自然磨付着	

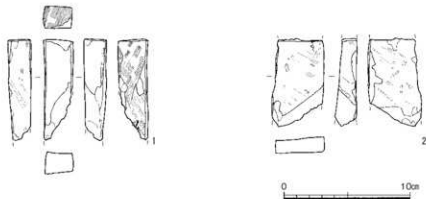
残存率は部位に対する割合とする。口径、底径の還元値を()、器高の残存高を()で記述する。

胎土は①微砂粒(直径1mm以下)、②微砂粒を多量に含む、③砂粒(直径1~2mm)を含む、④小石(直径2mm以上)を含む、で分けられている。

2 石製品

本遺跡で出土した石製品は、総数2点を数える砥石のみである。いずれも遺構外出土で、所属時期の判断は難しいが、切断痕を残す資料は中世以降の所産と見られる。

砥石 (第16図) 1は石質から仕上げ砥と判断される。下端面を折損し、表面・左右側面に滑らかな砥面を有する。表面はやや内湾し、左側面に使用痕と見られる擦痕、裏面と上端面に鋸による切断痕を残す。切断痕から切断工程を復元すると、まず裏面左下隅から右上へ斜めに切り始め、右側面中央付近まで切り進めたところで一旦止め、次に左上から右下へ切り進み、やや進んだところで再度止め、最後に中央右側に残った三角形の部分を折り取る、という工程が想定される。2は石質から仕上げ砥に近い中砥と判断される。扁平な板状を呈し、上下端面を折損する。表裏面と右側面を使用し、表面はやや内湾する。砥面には主に斜め方向の擦痕が残る。



第16図 砥石実測図(縮尺1/3)

第4表 砥石観察表

遺物No.	器種	出土地区	遺存状態	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	備考	挿入図
1	砥石	A9	微乱 破損	(70.5)	40.0	17.5	(42)	鳴滝岩	仕上げ砥	第16図1
2	砥石	C1	包含層 破損	(81.5)	22.5	17.5	(61)	凝灰岩	中砥	第16図2

第4節 まとめ

今回の調査成果から、本遺跡は13世紀代の集落跡と判断される。以下、遺構・遺物の内容を総括し、遺跡の性格を考察する。

1 遺構

主要遺構の集中する東・西各区について、それぞれの内容を検証する。

東地区（B～D11～13区：建物5・6、井戸1など） 範囲が狭いが、掘立柱建物や井戸といった生活遺構が検出されており、一般的な居住域と推測される。特に、建物5は規模が突出して大きく、当地区の中心的建物と考えられる。また、建物5・6の方位がほぼ一致することから、2棟は同時期の築造である可能性も指摘できる。

西地区（B～D1～6・B8区：建物1～4、竪穴1など） 建物1・2および建物3・4はそれぞれ重複するが、構造や規模が酷似しており、同様の建物の改築もしくは移築が想定される。また、建物1・3の方位がほぼ一致することから、2棟が同時期の築造である可能性も指摘できる。以上の状況から、当地区には建物1・3および建物2・4という2つの建物群が存在し、両者は比較的短期間のうちに改築、もしくは移築されたものと推測される。これらはいずれも小規模で、少し離れた場所には竪穴住居と見られる遺構（竪穴1）も存在することから、居住以外の目的で築造された、小屋のような建物であったと考えられる。土坑と溝の複合遺構2例については、いずれも土坑を起点として、標高の低い北方へ溝を延長しており、水を媒介とする何がしかの工程を構築していたものと推測される。また、それぞれ重複せず独立しているため、時期差あるいは同時性を論ずることはできないが、1例（土坑11・13・溝4・5・7）は建物1・3と重複していることから、建物群の変遷と連動している可能性もある。

2 遺物

本遺跡で出土した土器は、いずれも13世紀代に属するものと考えられる。特にハケ調整の土師器鍋については、細片資料が表層・表土資料などに散見される程度で、所属時期の確定したもの、それも器形の分かるものとなると県内でも数例ほどで、北陸の他県でもあまり見ることができない。にもかかわらず、これらは調整や色調・胎土などが酷似しており、その関係が注目される。

今回得られた土器は一括資料ではないが、おおむね13世紀代に所属時期が限定されるという点は、遺物のみならず遺跡自体の特性として注目すべきである。また、13世紀代は本県ではまとまった資料が得られていない時期でもあり、その意味でも資料的価値が高いと言える。

3 遺跡

現在、吉野の谷底平野の大半は水田地帯だが、かつては中央を流れる荒川の氾濫湿地や沼が一带に広がり、土地の人々が長い年月をかけて水田に改良してきたものと言われ、集落の多くが山際の小規模な扇状地や段丘上に立地している。当調査区の遺構の内容は、大筋では集落内の居住域としての性格が見て取れるが、当調査区の立地する山地は平野のほぼ中央部に突出しており、周辺の集落ともほとんど連絡のない孤立した地形¹¹⁾であるため、およそ居住に適しているとは言いがたい。したがって、当調査区については、単なる居住以外の目的も想定すべきと考えられる。

西地区で検出された建物および複合遺構の性格、それらすべてが比較的狭い範囲に集中していることなどを総合すると、西地区の一角に何らかの作業場を設定していた状況が推察される。そして、その点において、土師器鍋や羽釜およびその脚部など、特徴的かつ希少な遺物が多く確認されている事実¹²⁾は重要な意味を持つ。すなわち、人が常時定住するのではなく、前記のような作業区域、具体的には土師

器鍋や羽釜など土師器製品の生産工房が、当調査区を含めたこの山地一帯に展開していた状況が想定される。その場合、今回の調査では検出されなかった窯跡が調査区近辺に存在している可能性も同時に指摘できるが、現状で確認はできていない³⁾。

註

- 1 台地の西側外周沿いに、島^{しま}という小さな集落があった（第1図など参照）が、交通の不便や耕地の少なさなどから、近代以降徐々に戸数が減少し、現在では廃絶している。
- 2 同様の状況は、永平寺町教育委員会による同遺跡発掘調査でも確認された。同町の調査区は当調査区の北側10数mに近接し、当調査区の位置する段丘面の裾部に相当すると推測される。
- 3 当調査区南方の段丘面（高位面）には竹林が広がっており、窯跡などの視認は事実上不可能である。

第4章 上吉野法善田遺跡

第1節 概要 [図版第6、第17・18図]

1 地形と層序

上吉野法善田遺跡は谷底平野の南奥部、山裾から荒川左岸に広がる段丘上に立地する。今回の調査区は過去の圃場整備事業により、段丘の緩斜面を段切りにして水田に整備した箇所、広範囲に削平を受けている。全体の規模は、東西約100m、南北20～60m、総面積3,640㎡を測る。

調査区は東側の水田3面、西側の水田1面の計4面、段差は南北3段にまたがる。調査区中央を南北に縦断する空白部は排水路部分である。遺構検出面のうち、削平された平坦面の標高は段ごとに異なり、低い方から順におよそ85.20m、85.90m、86.30m前後である。

調査の結果、地山層まで掘削が及んでいた部分と、くぼんだ地形に遺物包含層が比較的良好に堆積していた部分が見られたことから、旧地形は起伏の緩やかな尾根や谷が複数入り組んでいたものと推測され、尾根を削り、谷を埋めるなどして、より広大な水田に整備した様子がうかがえる。

標準層序は以下の3層に大別される(第17図)。なお、前章でも記したように、吉野地区の土に共通する性質として、3層とも非常に粘性が強い。

I層：褐色～褐灰色土で構成される客土。ごくわずかに遺物を含む。耕作土直下に平均30～40cm堆積するが、調査区中段途中から削平を受け、下段では谷地形以外の部分で掘削が地山層にまで及び、完全に欠失している。逆に、上段ではさらに地山層混じりの客土が多量に盛られる。

II層：黒褐色～黒色土で構成される遺物包含層。堆積の厚さは平均40cm前後だが、下段の谷地形部分などでは最大60cmほどもある。遺物量は少ない。

III層：黄褐色土で構成される地山層。いわゆる山土と見られ、礫が多く混入する。

II・III層については、猪谷田畑遺跡のそれと同質の土と判断されたため、猪谷田畑遺跡と同様、III層上面を便宜的に遺構検出面と定めて、遺構調査を実施した。なお、吉野地区では少なくとも昭和初年代と昭和30年代末の二度にわたって、大規模な圃場整備事業がおこなわれていることが、地元の方々の聞き取りから判明しており、前述のI層の上に盛られた地山層混じりの客土は昭和30年代末に施された客土、I層は昭和初年代に施された客土とそれぞれ推定される。

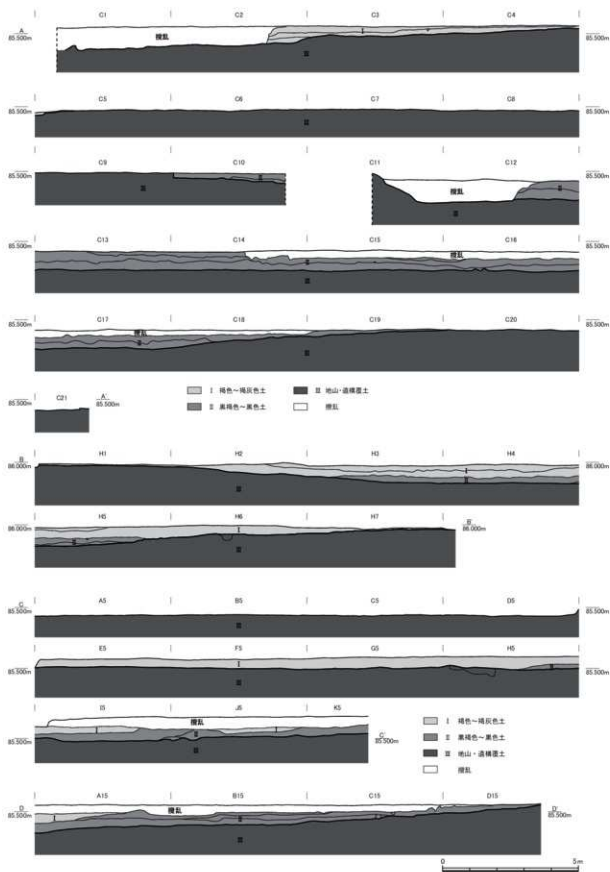
2 遺構検出状況

検出した遺構は、掘立柱建物5棟、ビット列2列、土坑・ビットなどである(第18図)。基本的には遺物が得られた遺構にのみ通し番号を付したが、その総数は土坑46基、ビット150基を数える(掘立柱建物・ビット列の柱穴を含む)。遺構密度はあまり高くなく、小型遺構が主で、大型遺構は少ない。

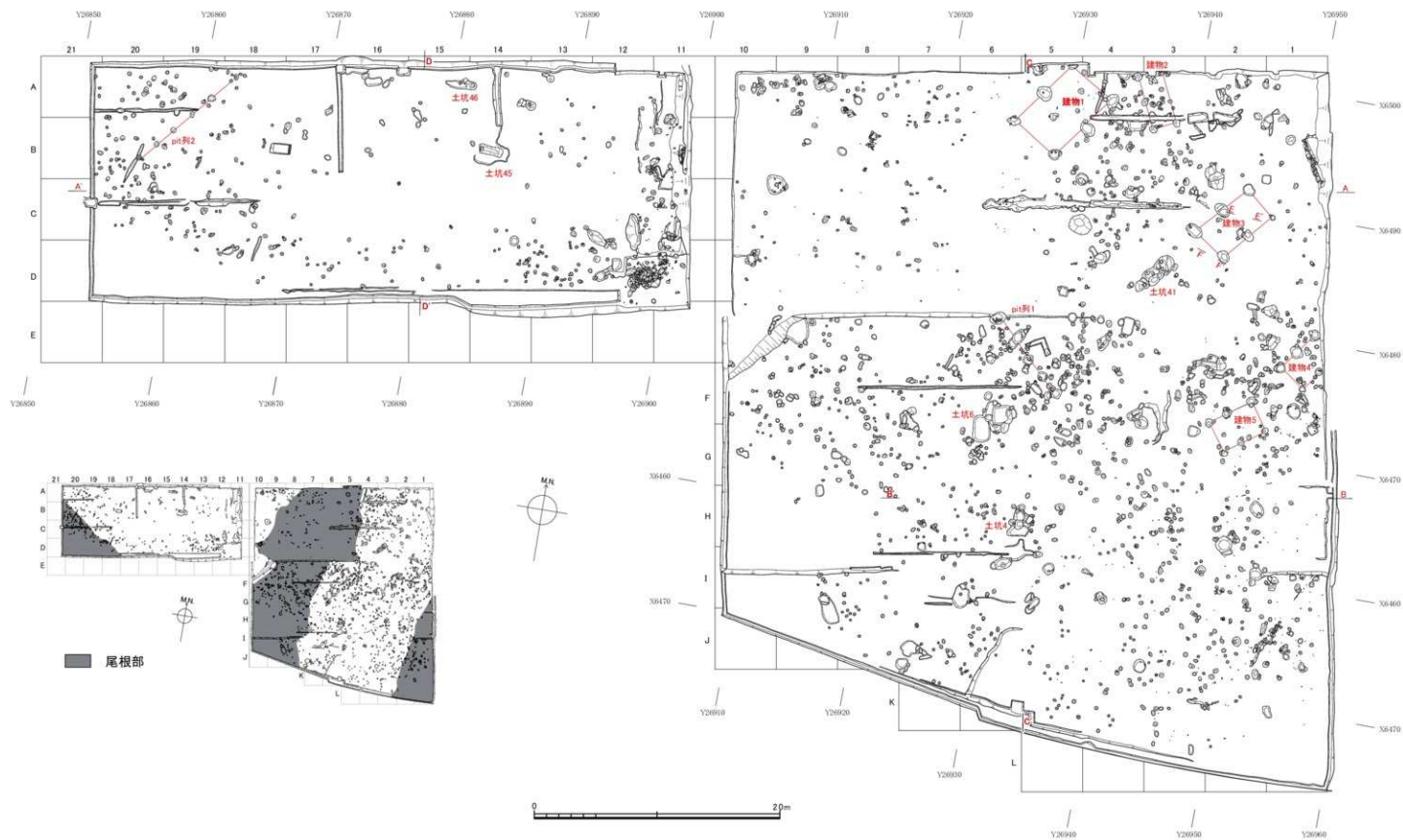
谷部で遺構が比較的良好に遺存する傾向が見られるが、削平を受けた尾根部にも遺構を残す箇所は見られ、旧地形の起伏が緩やかであった様子が推察される(第18図左下)。

3 遺物出土状況

出土遺物は大型コンテナで50箱分を得た。内訳の大半は土器で、古代の土師器・須恵器が主体だが、縄文土器や中世の土器(越前焼)、石器も含む。なお、当地には、傾斜地形による遺物包含層の自然流入や過去の開発行為に伴う客土の搬入などのため、他所の遺物が若干混入しており、縄文土器や大半の石器などはその典型例である。



第17圖 上古野法善田遺跡 調査区土層断面図 (縮尺1/150)



第18図 上古野法善田遺跡 遺構全体図(縮尺1/300)

第2節 遺構 [図版第7、第18～23図、第5・6表]

検出した遺構は、掘立柱建物、ピット列、土坑・ピットなどである。なお、各遺構の規模（長さ・幅・深さなど）や方位（角度）についての数値は、すべて遺構検出面を基準として、測量図上で測定・算出した概測値である。また、掘立柱建物およびピット列については、現地調査終了後に測量図上で抽出・設定し、検証の結果、それと判断したものを挙げた。

1 掘立柱建物

総数で5棟を検出した。全体を検出したものが3棟（建物1・3・5）、部分的に検出したものが2棟（建物2・4）で、すべて2×1間の隅柱建物か、それと推測される。位置の重複する建物はなく、平面形状は長方形が主であるが、柱間は建物ごとに微妙に異なり、統一性はあまり見られない。柱穴の掘り方は歪な方形が主だが、大きさは一辺0.6m前後、または一辺1.0m前後の2種類に大別される。

以下に概略を記すが、挿図に示す建物の柱穴のうち、遺物が得られた遺構のみ、遺構別の通し番号を付している。各建物の詳細は一覧表（第5表）を参照されたい。

建物1（第19図）本遺跡最大の規模を有する遺構で、他の建物と比べてもその規模は特に突出している。両桁行の位置がややずれており、平面形状が平行四辺形を呈する。柱穴が浅いのは、尾根上に位置しているため、大半が削平されたものと考えられる。

建物2（第19図）他の建物と異なり、梁行の柱間が桁行のそれよりも短くなっているため、平面形状がほかの建物よりも細長い。

建物3（第19図）周辺は谷底でも一際低く、包含層も特に厚く堆積していた箇所であるが、柱穴がいずれも浅い。これは包含層掘削時に柱穴の大半を掘削してしまったためと推測され、当時の生活面は遺構確認面（地山層直上）より上、つまり包含層中に存在したものと考えられる。

建物4・5（第20図）この両者については、柱穴の掘り方の傾向が異なる（建物4の柱穴の方が全体に大きめ）ものの、柱間など建物の構造や規模が類似している。

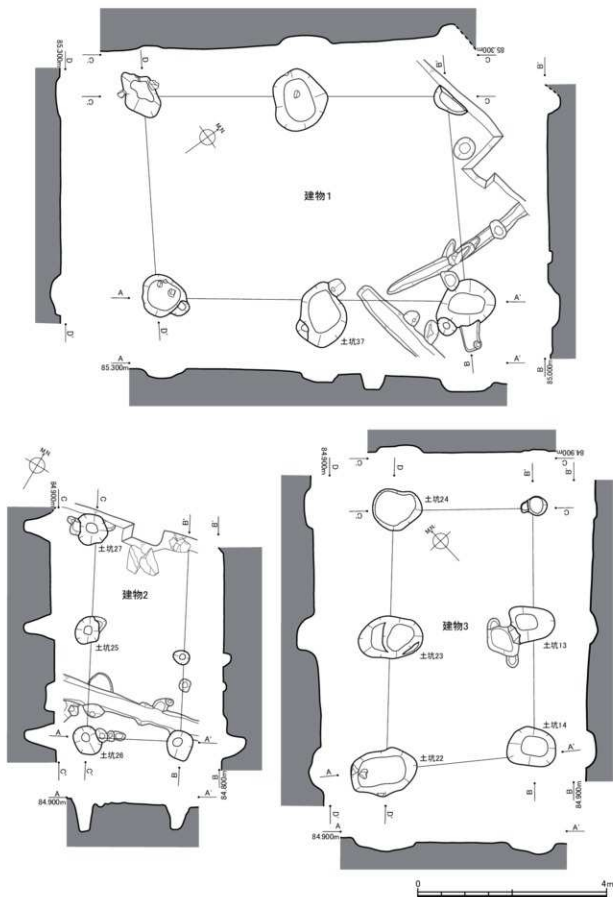
2 ピット列

総数で2列を検出した（第20図）。並列するピット列が見当たらないことから、いわゆる柵列と考えられる。ピット列1の柱穴の形状は、掘立柱建物と同様、いずれも不整形で掘り方も大きい。ピット列2では円形で掘り方も小さく、両者の様相は対照的である。しかし、両者とも削平された旧尾根部にはほぼ直行する形態をとっている点（第18図）で共通している。

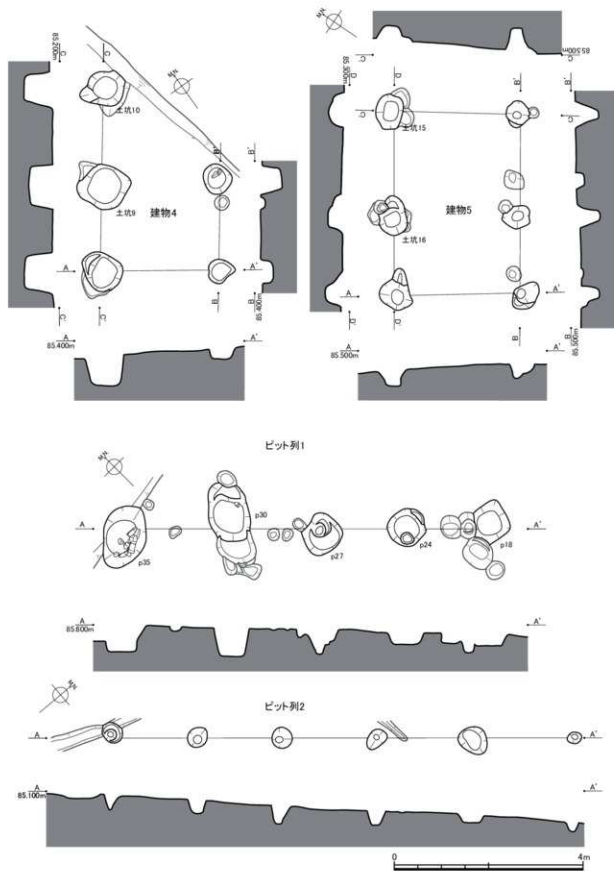
第5表 掘立柱建物・ピット列一覧表

遺構名	地区	構造	柱穴掘り方	桁×梁 (間)	桁行×梁行 (m)	方位 (桁行)	出土遺物	備考	挿図№
建物1	A・B4-6	隅柱	不整形	2×1	6.54×4.34	N36° E			第19図
建物2	A・B3-4	隅柱	不整形	27×1	4.40×1.98	N28° W			第19図
建物3	C・D1-3	隅柱	不整形	2×1	5.46×2.96	N43° E			第19図
建物4	E・F1	隅柱	不整形	27×1	3.86×2.52	N37° E			第20図
建物5	F・G1-2	隅柱	不整形	2×1	3.90×2.68	N55° E			第20図
ピット列1	E・F5-6	—	不整形	—	—	N45° W	柱穴5基（4間分）遺存		第20図
ピット列2	A・B18-20	—	不整形	—	—	N41° E	柱穴6基（5間分）遺存		第20図

※桁行・梁行の長さの数値はすべて概算値もしくは推定値。



第19圖 擬立柱建物実測図 (縮尺1/80)



第20図 掘立柱建物・ピット列実測図(縮尺1/80)

3 土坑

本項では主要な土坑について概略を記すが、掘立柱建物の項で記したように、特に谷部については、包含層中に遺構面（当時の生活面）が存在した可能性が高く、今回確認し得た遺構の規模は、本来よりもいくらか縮小しているものと推測される。各土坑の詳細は一覧表（第6表）を参照されたい。

土坑1・6（第21図）土坑1は周辺の複数の土坑と切り合うが、先後関係は最も新しい。土坑内面の大部分が被熱・赤化し、覆土に焼土や炭が含まれ、頻繁に火を使用していた状況が見て取れる。焼土直上で土師質皿を検出していることから、中世に属する遺構と判断される。土坑6は土坑1に隣接するが、直接切り合っていない。覆土に焼土を若干含む。土坑1同様、中世に属する遺構と推測される。

土坑4（第21図）土坑が複数集合する中の1基である。断面図から判断して、本来の外形はより大きく、浅皿状を呈する土坑と推測される。

土坑45（第21図）外形が若干歪むが、全体としては長方形を意図したものと見られる。内形は舟形を呈し、西端部がくぼむ。土坑墓の可能性が高い。

土坑41（第22図）土坑が複数集合する中の1基である。各土坑がそれぞれ個別に掘削されたとは考えにくく、土層断面図の切り合いが1～9層、10～13層、14～15層に大きく三分されることから、本来は3基の土坑が切り合う状況と見られる。特に土坑41を含む1～9層の土坑は、形が粗雑だが、基本的には長楕円形か長方形を意図して掘削されたと考えられる。その場合、長軸2.70m、短軸1.41m、深さ0.33mをそれぞれ測り、方位はN40°Eを向くと推定される。土坑45と同様、土坑墓の可能性が高い。

土坑46（第22図）外形が安定しないが、全体としては長楕円形を呈し、内形は舟形を呈する。土坑41・45と同様、土坑墓の可能性が高い。

第6表 主要土坑一覧表

遺構名	地区	平面形	方位	平面規模 長軸×短軸 (m)	深さ (m)	出土遺物	備考	挿図No.
土坑1	F6	正方形	N11°W	1.60×1.55	0.30			第21図
土坑4	H5-6	不定多角形	N68°W	1.82×0.90	0.23			第21図
土坑6	F-G6	長方形	N7°W	2.22×1.38	0.18			第21図
土坑41	D3	—	—	0.84×0.56	0.24		全体としては長楕円形か	第22図
土坑45	B14	歪長方形	N83°W	2.00×0.78	0.36			第21図
土坑46	A14-15	不定形	EW	2.55×0.92	0.25			第22図

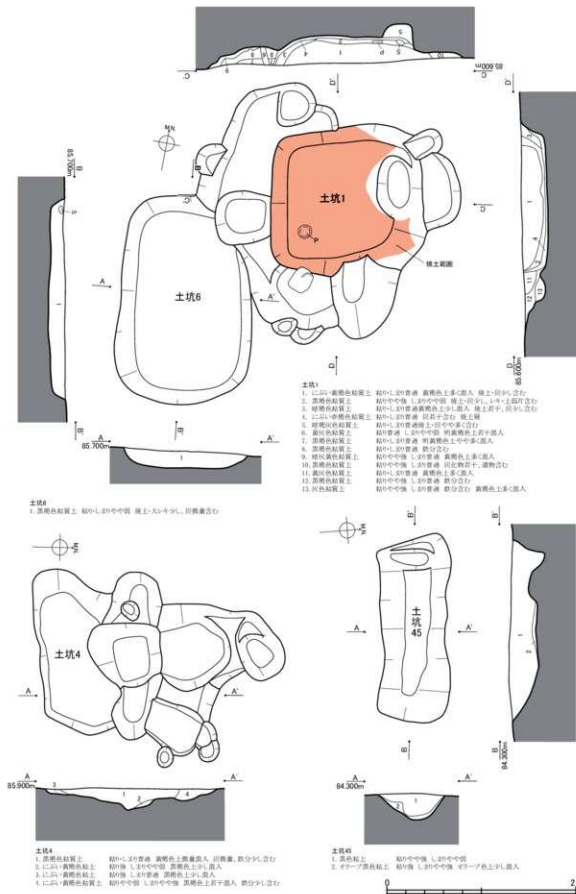
※方位・平面規模・深さはすべて概算値。

4 土器集中出土状況

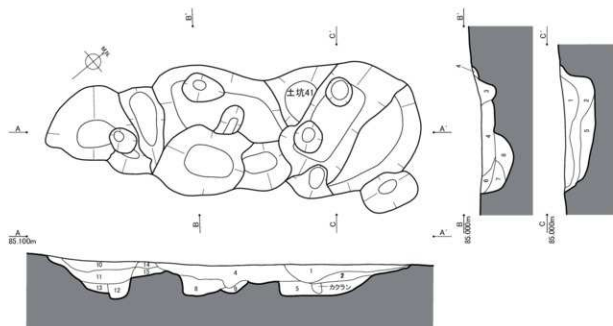
包含層掘削作業中にC・D2～3区で2ヶ所を検出した（第23図）。本遺跡で遺物の集中出土状況が確認できたのはこの2ヶ所のみである。当所は谷底に位置し、包含層の遺存状況も良好であったことから、包含層中に遺構面の存在を想定して出土状況を観察したが、包含層断面にも出土地点直下の地山層上面にも遺構の痕跡を確認し得なかった。

遺物の内容はほぼすべて縄文土器であったが、本遺跡の出土遺物傾向から見て、この状況は非常に異質である。この2ヶ所以外で縄文土器はほとんど出土しておらず、縄文時代に属すると断定できる遺構も確認されていないことから、他所からの混入と判断するのが妥当と考えられる。

混入の原因は、前節でも指摘した遺物包含層の自然流入によるものと見られ、調査区より標高の高い近隣一帯、具体的には南方の山地およびその周辺に、縄文時代遺跡が存在する可能性は非常に高いと推測される。

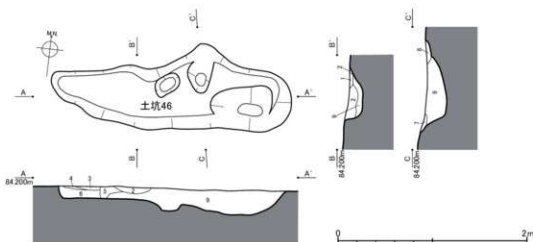


第21圖 土坑測測圖(1)(縮尺1/40)



土坑41

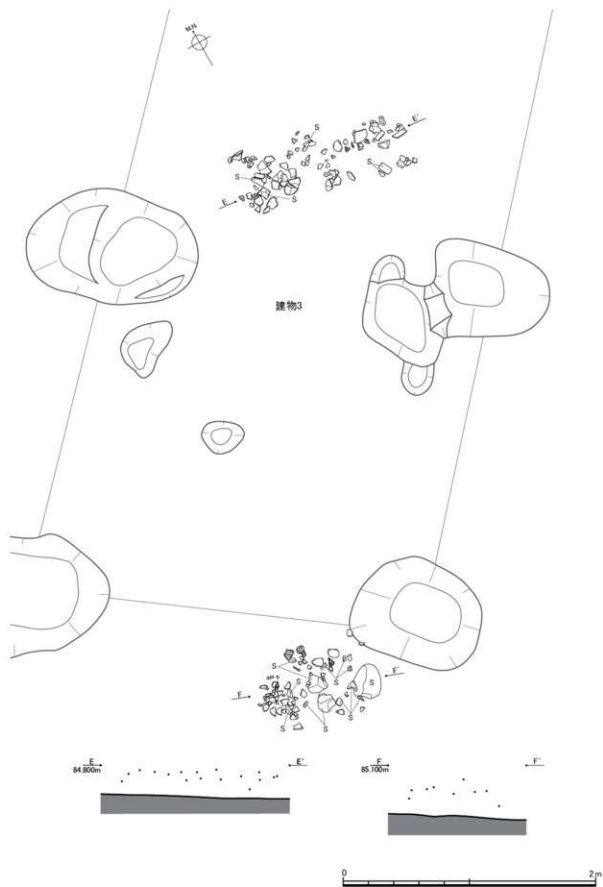
- | | |
|--|---|
| <p>1. 黒褐色粘質土 粘りやや強 土砂り普通 灰砂中、鉄分少し含む</p> <p>2. 黒褐色粘質土 粘りやや強 土砂り普通 上に、黒褐色土やや多量混入 灰鉄質少し含む</p> <p>3. 黒褐色粘質土 粘りや、粘り強 灰白土少し混入</p> <p>4. 黒褐色粘質土 粘りや、粘り強 灰白土若干混入 灰鉄質、鉄分少し含む</p> <p>5. 灰白色粘土 粘り強 土砂りやや強 褐色土やや多量混入 灰鉄質含む 堆山の埋め戻し土</p> <p>6. 黒褐色粘質土 粘りややや強 灰鉄質少し含む</p> <p>7. 黒褐色粘質土 粘りややや強 灰白土若干混入 鉄分少し含む</p> <p>8. 黒褐色粘質土 粘りやや普通 灰鉄質少し含む</p> | <p>9. オリーブ褐色粘質土 粘りや、粘りやや強 鉄分やや多量含む</p> <p>10. 黒褐色粘質土 粘りやや強 土砂りやや強 灰鉄質若干含む</p> <p>11. オリーブ褐色粘質土 粘りやや強 土砂り普通 少量多量混入、灰鉄質、鉄分若干含む</p> <p>12. 灰褐色粘質土 粘りや、粘りやや強 灰鉄質含む 堆山の埋め戻し土</p> <p>13. 灰褐色粘質土 粘り強 土砂りやや強 灰鉄質含む 堆山の埋め戻し土</p> <p>14. 灰褐色粘質土 粘りやや強 土砂りやや強 灰鉄質、鉄分少し含む</p> <p>15. 灰白色粘質土 粘りやや強 土砂り普通 灰鉄質、鉄分やや多量含む 堆山の埋め戻し土</p> |
|--|---|



土坑46

- | | |
|---|---|
| <p>1. 黒褐色粘土 粘り普通 土砂りやや強 鉄分少し含む</p> <p>2. 黒色粘土 粘り強 土砂り普通 黄褐色土少し混入</p> <p>3. 黄褐色粘土 粘りやや強 土砂り普通 鉄分少し含む</p> <p>4. オリーブ褐色粘土 粘りや、粘りやや強 褐色土少し混入</p> <p>5. 灰褐色粘土 粘りやや強 土砂り普通 鉄分少し含む</p> | <p>6. オリーブ粘土 粘りや、粘りやや強 褐色土多量混入 鉄分少し含む</p> <p>7. 黄褐色粘土 粘り普通 土砂りやや強 オリーブ土若干混入</p> <p>8. 黒色粘土 粘り普通 土砂りやや強</p> <p>9. 黒色粘土 粘り強 土砂り普通</p> |
|---|---|

第22図 土坑実測図(2) (縮尺1/40)



第23圖 土器集中出土状況実測図 (縮尺1/30)

第3節 遺物 [図版第8～15、第24～40図、第7・8表]

1 土器

1) 縄文土器

本項では、前節で示した土器集中出土状況より検出した縄文土器について記述する。これらは遺構に直接伴わない、他所からの混入遺物と考えられる。以下、分類し、説明をおこなう。

第1群土器 (第25図1～6)

頸部の屈曲の強いキャリパー器形で、幅広の爪形を連続して押し引き、文様を構成する土器。

1・2は、円形刺突を有するもの。6は、特徴的な節の細長い縄文を有するもの。

第2群土器 (第24図、第25図7～36、第26図1～27)

キャリパー器形で、口縁部に横位区画帯を有し、区画内に連続従位半隆起線文ないし斜格子文を有す土器。

1類 (第24図1、第25図9～12) 口縁部に連続爪形文を有し、口縁部区画帯内に斜格子文を配するもの。

2類 (第25図13・14) 口縁部に連続爪形文を有し、口縁部区画帯内に格子文を配するもの。

3類 (第25図15・16) 口縁部に連続爪形文を有し、口縁部区画帯内に連続縦位半隆起線文を配するもの。

4類 (第25図7・8・21～31) 口縁部に連続爪形文を有さず、口縁部区画帯内に斜格子文を配するもの。

7・8は、口唇内面を肥厚させる。

5類 (第25図32～34) 口縁部に連続爪形文を有さず、口縁部区画帯内に格子文を配するもの。

6類 (第25図35・36) 口縁部に連続爪形文を有さず、口縁部区画帯内に連続縦位半隆起線文を配するもの。

7類 (第26図1～9) 4単位の突起ないし隆帯による加飾を有す土器。

頸部破片 (第26図10～27)

第3群土器 (第26図28～38)

円筒器形で、主に横位の半隆起線文により文様を構成し、基軸に爪形の連続押し引きを有す土器。

第2・3群土器の胴部破片 (第27図)

第2群土器および第3群土器に分離が困難なため一括して提示した。半隆起線文のもの (1～14)、沈線と木目状燃糸文を併用するもの (15)、木目状燃糸文のもの (16～30) がある。

第4群土器 (第28図)

緩いキャリパー器形で、半裁竹管状工具で簡易なモチーフを描出する土器。

1・2は、同一個体と考えられる。緩やかに立ち上がる器形を有す。地文は燃糸。半裁竹管状工具による半隆起線文を口縁部および頸部に回周させる。頸部から垂下する縦位の半隆起線文間には、いわゆるコンパス文を配す。

第5群土器 (第29図1～5)

口縁部が内弯し、頸部で括れる器形で、口縁部に斜位の沈線や刺突 (列点) を配す土器。

第6群土器 (第29図6～14)

キャリパー器形で、細い隆帯を貼付することにより文様区画を構成する土器。

第7群土器（第29図15～18）

キャリバー器形で、太い隆帯により文様区画を構成する土器。

第8群土器（第29図19～21）

キャリバー器形で、沈線による渦巻文や弧線文で主文様を構成する土器。

第9群土器（第29図22～24）

キャリバー器形で、刻みを有する貼付隆帯で主文様を構成する土器。

22は、口縁部に横位の狭い区画帯を配し、区画帯内に縦位の刺突を並列して施す土器。24は、本群土器に時間的に併行する浅鉢形土器である。

第10群土器（第29図25～45）

底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形で、口縁部を折り返し状に肥厚させる土器。

1類（25～30）櫛描沈線文を施すもの。

2類（31～34）無文のもの。

3類（35）木目状燃糸文を施すもの。

4類（36～45）縄文を施すもの。

36は、口縁部を折り返さないが、本群に含めた。42は、縄文を縦位に施文するもの。

第11群土器（第30図1～8）

底部。

第12群土器（第30図9）

脚部。

第13群土器（第30図10）

浅鉢形土器。

位置づけ

本遺跡出土縄文土器は、中期前葉から中期中葉までの時間幅を有する。以下、各群に分類した土器の時期比定をおこなう。

第1群土器は、船元Ⅰ～Ⅱ式土器に比定される。

第2・3群土器は、新保式土器に比定される。

第4群土器は、新保式土器に時間的に併行する。

第5群土器は、船元Ⅲ式E類と呼称される土器群に類似する。

第6群土器は、加曾利E1式土器に時間的に併行する。

第7群土器は、加曾利E2式土器に時間的に併行する。

第8群土器は、咲畑式系土器に比定される。

第9群土器は、越前地方において、古府式系土器と呼称されるもの。

第10～13群土器は、新保式土器に時間的に併行するものと考えられる。

以上のように、主体となるのは中期初頭の新保式土器である。本遺跡における新保式土器の深鉢形土器は、キャリバー器形・円筒器形で構成され、それぞれ口縁部文様帯に、斜格子目文・格子目文・縦位半隆起線文を配置する。胴部文様は、半隆起線文のものと木目状燃糸文のものがある。大半が破片資料のため、文様要素と器形の対応関係は不明な点が多いが、北陸地方中央域の新保式とほぼ同様の様相を

示すようである。なお、新保式には、素文系土器の比率が少ないことが指摘されており、本遺跡でも同様の様相を示す（加藤2008）。底部は、中央部が内側に凹む（上げ底の）ものが認められるものの、接合例がないため、時期は特定できない。

最後に、周辺の遺跡出土土器と対比をおこなっておく。福井県で新保式の良好な資料を出土した坂井市坂井兵庫遺跡群出土土器群には、頸部に斜格子文を有するものが少ない（山本2005）。一方、本遺跡出土土器群には、坂井兵庫遺跡群出土土器群で多く確認される口縁部の鋸歯状文が認められない。このように、モチーフの点で見ると、両遺跡土器群に顕著な差異が認められる。土器に認められるそれぞれの要素差が時間的要因に依るのか空間的要因に依るのかは、常に問題となる。分布や組成などを複合的に考慮しなければならず、検討は今後の資料増加を待たなければならない。

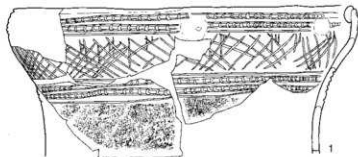
参考文献

- 加藤三千雄 2008 「新保・新崎式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション 450～457頁
 山本孝一 2005 「第2章第1節 縄文時代中期前葉土器群の検討」『坂井兵庫地区遺跡群Ⅱ』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 261～272頁

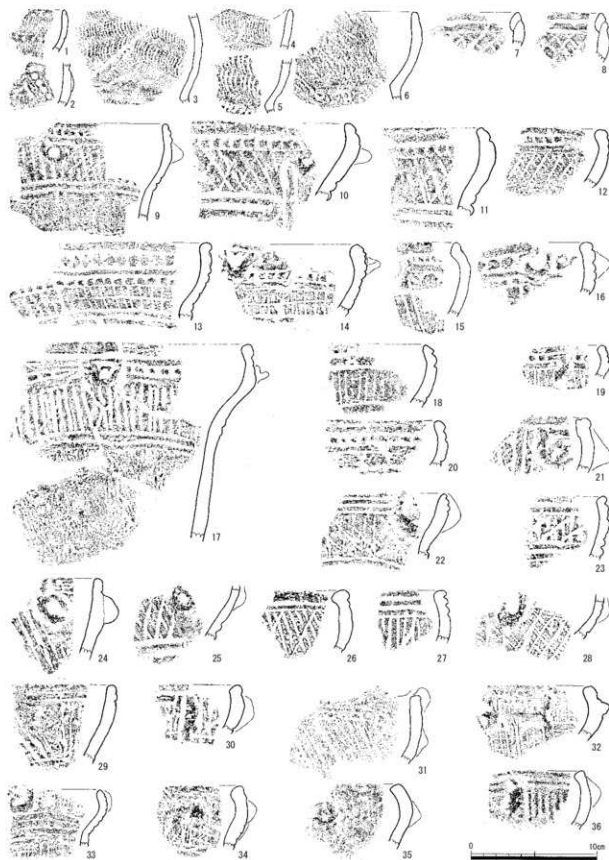
2) 土製品

土製円盤（第30図11）

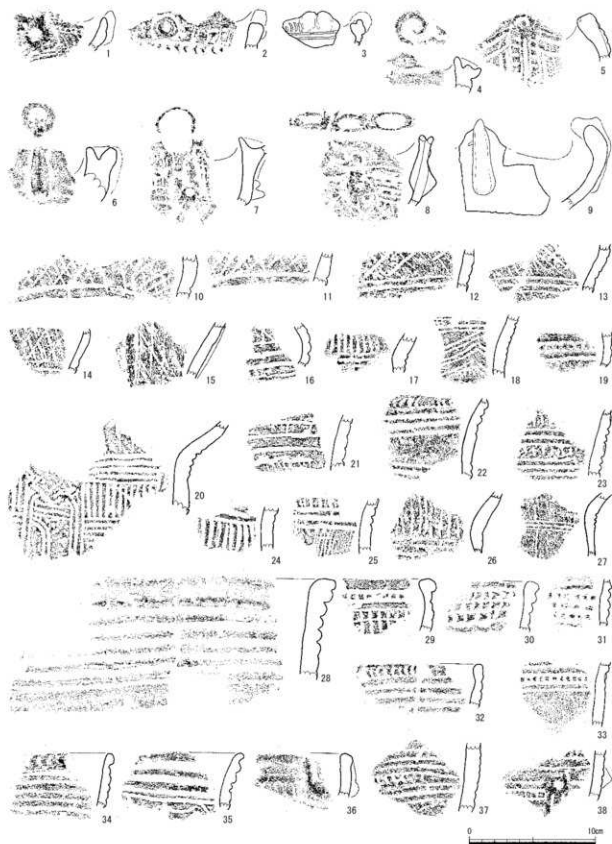
素文土器を転用したもの。



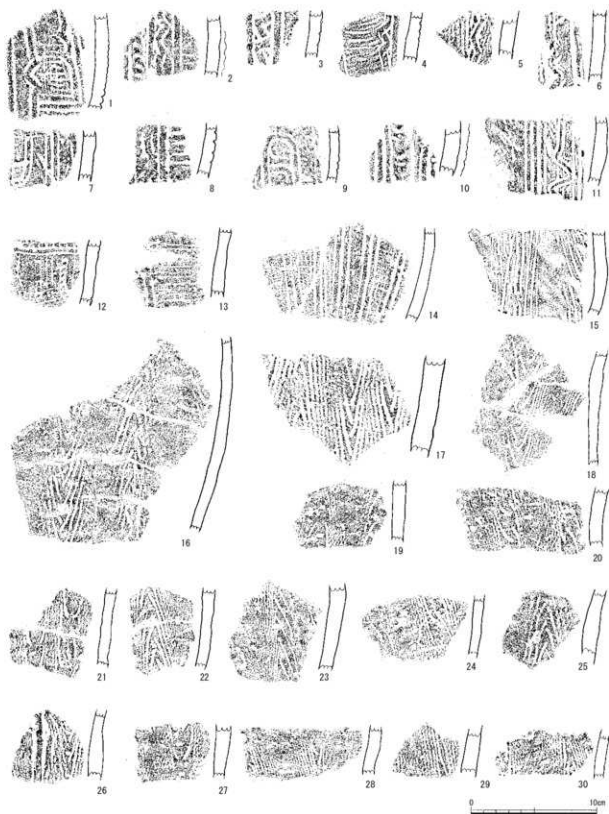
第24図 縄文土器実測図（1）（縮尺1/4）



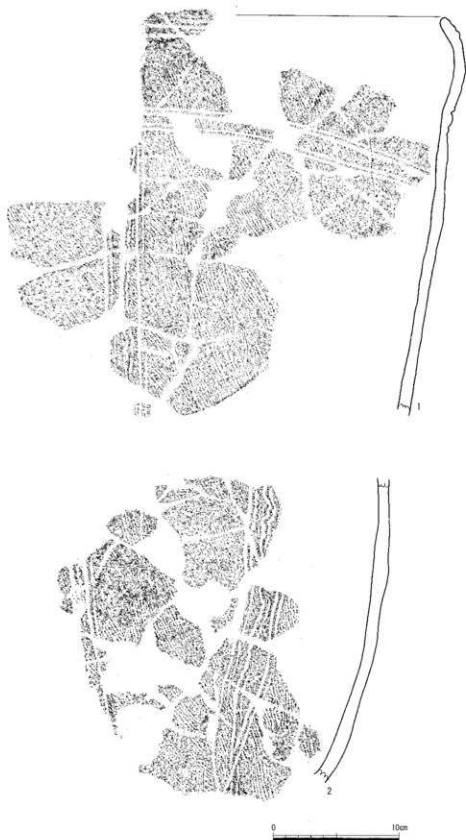
第25圖 縄文土器実測図(2)(縮尺1/3)



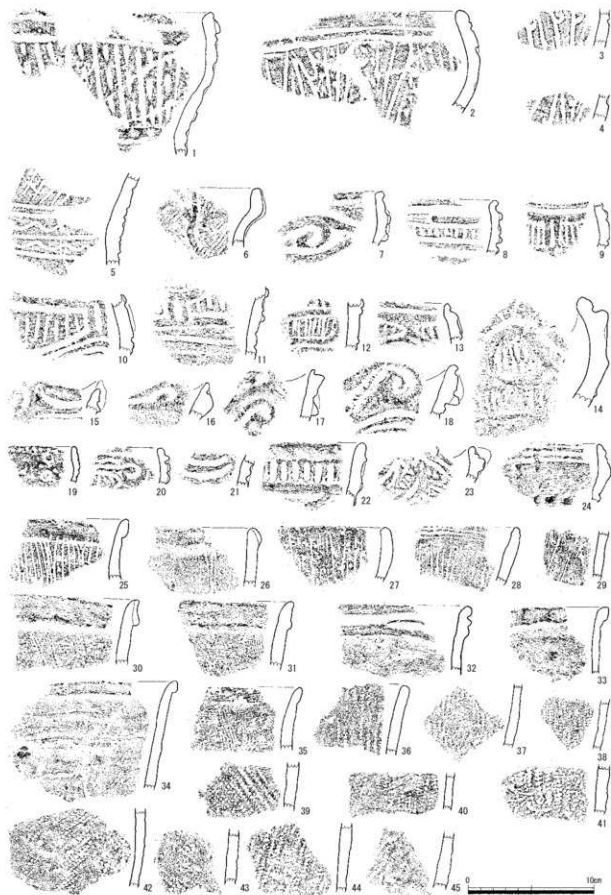
第26圖 縄文土器実測図(3)(縮尺1/3)



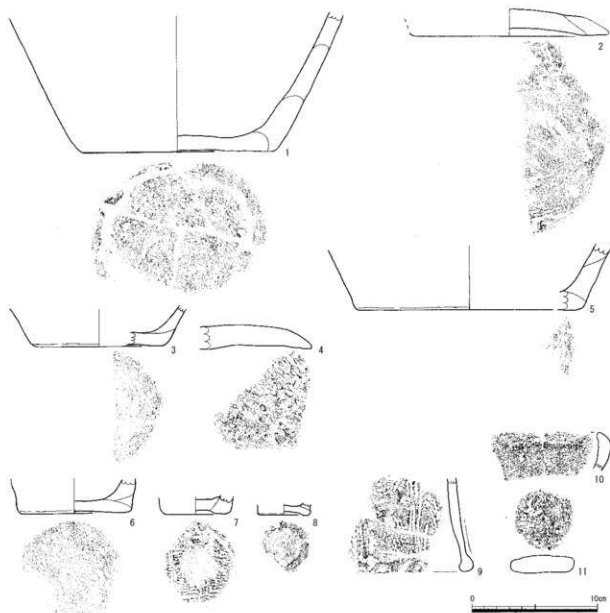
第27圖 縄文土器実測図(4)(縮尺1/3)



第28圖 縄文土器実測図(5)(縮尺1/3)



第29圖 縄文土器実測図(6)(縮尺1/3)



第30圖 縄文土器実測図(7)(縮尺1/3)

3) 古代・中世の土器

出土した古代・中世の土器で図化し得たのは、須恵器74点、土師器23点、そして土師質皿（かわらけ）が2点の、合計99点である（第31～34図）。須恵器については、数量の多い供膳具（坏・皿など）を中心に、硯に転用された痕跡がある坏・皿などの破片（転用硯）や墨書土器を、古代の土師器については、特殊なものも多く見られるため、それらを中心に図化した。

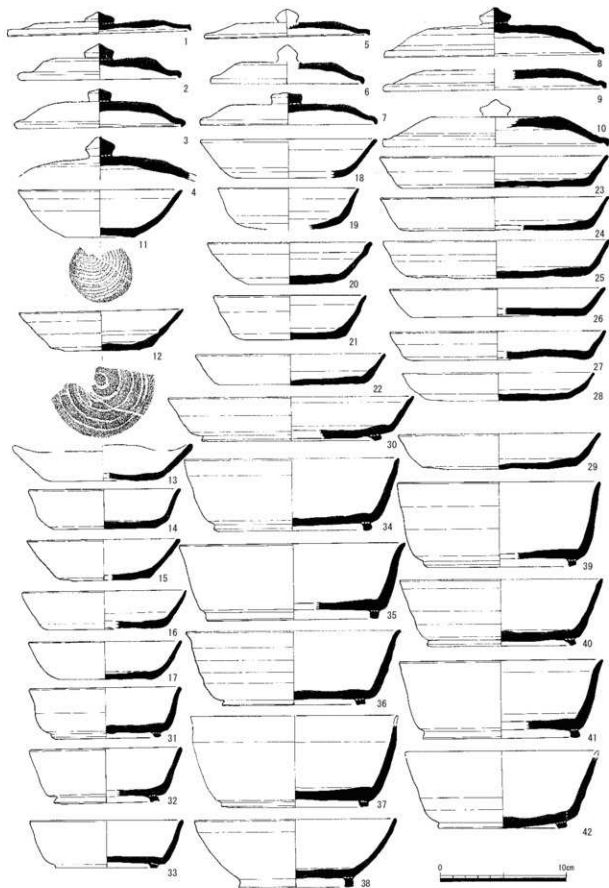
須恵器 坏蓋、坏A・B、皿A、盤A・Bなどの供膳具と横瓶、転用硯、墨書土器がある。坏蓋は摘みがあり、口縁端部を折り返すものが10点（第31図1～10）ある。坏Aは底部へら切りを基本とするが（第31図12～21）、糸切りの底部が1点（第31図11）ある。坏Bは口縁がほぼ直立気味のもの（第31図31～37・39～42、第32図1～8）が20点と多く、胴部に丸みがある壙に近いものが1点（第31図38）ある。皿と盤の違いは微妙である。皿Aに分類したものは口径15cm以下の2点（第31図22・28）で、口径15cm以上の1点（第31図30）を盤Bとし、そのほかの6点（第31図23～27・29）を無台の盤Aとした。横瓶（第32図9）は頸部から胴部にかけての復元実測で、口縁部の形状は不明である。このほか、壙や鉢などの器種に図化できるものはなかった。

転用硯はいずれも坏の底部付近の細片で、全形をうかがえるようなものはない。図示したものをあえて細分するならば、坏Aが3点（第33図17～19）、坏Bが4点（第33図1～4）、盤Aが6点（第33図5～10）、皿Aが6点（第33図11～16）となる。なお、可能性のある破片はまだ多くあり、いずれの刷り面も底部内面である。墨書土器は4点（第33図20～23）あるが、いずれも小片で、文字そのものも不明瞭なため、墨書の内容全体が判読できるものはない。墨書はいずれも坏底部外面にあり、「□寺」（第33図20）と「□□万呂」（第33図22）と判読されるものがある。

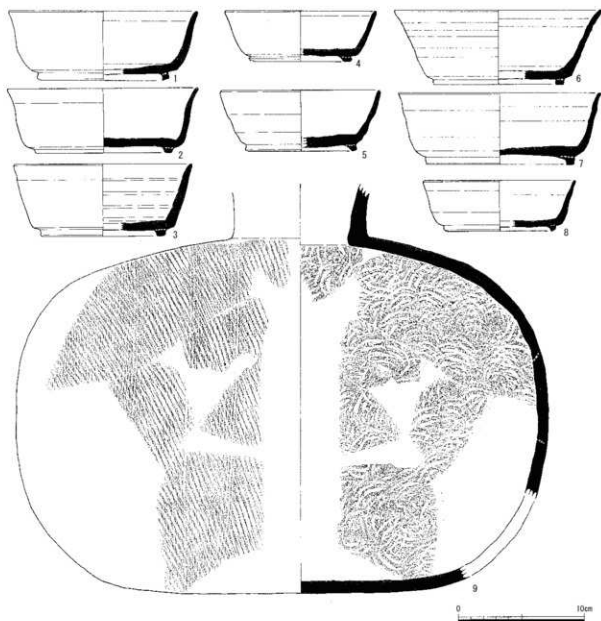
土師器 基本的な器種は甕と鍋であるが、本遺跡ではそれ以外の特殊なものも多く見られ、類例を確認できず、用途が不明なものも多くある。古代の土師器の一般的な器種としては長胴甕があるが、ここではハケ調整の非ロクロ成型のもの（第34図5）とカキ目調整のロクロ成型のもの（第34図4・6）がある。前者は口縁をヨコナデで外反させ、後者は口縁端部を摘み上げて面を作る。底部片のみであるが、内外面ともにカキ目を残すものは、後者のタイプの底部となると考えられるもの（第34図9）であろう。甕には小型で口縁を小さく外反させるもの（第34図1・7）があり、鉢に近い。鉢には口縁部を欠くが、丸底の底部を削るもの（第34図2）と、口径が5cm前後の非常に小型なミニチュア（第34図11）がある。坏・壙類は比較的残りの良いものを図化した。坏Aは底部へら切り（第34図13）、壙Aは底部糸切り（第34図12・15～17）となっている。このほかに遺存状況が悪いが、赤彩と考えられる皿（第34図14）もあり、口縁端部がわずかに外反する。土師器では壺や瓶そのものが非常に特異なものであるが、瓶類の胴部と考えられるもの（第34図8）がある。頸部より上はないが、肩部が屈曲して張り、高台がつくことからそうに判断した。同じ器形の高台のある底部のみのもの（第34図25）もある。上下とも大きく口が開く瓶（第34図20）は筒状の器形となる。同じように瓶と考えられるものには、先のように円筒埴輪の形状に近いもの（第34図21）、底部を屈曲させたり（第34図22）、平坦面をつくったりするもの（第34図23）もある。また、低い凸帯が口縁直下にあるもの（第34図24）も瓶の口縁になると考えられる。

中世の土器 出土量が少なく、そのうち3点を図化した。土師質皿は口径が14cmほどの中型（第34図19）と8cm弱の小型（第34図18）の2点である。もう1点は土師器の鍋の口縁（第34図10）で、外面タテハケ、内面ヨコハケ調整の、中世前半に特徴的なものである。

以上、古代・中世の土器について述べてきたが、大半が古代の土器であり、2点ある中世の土器も中

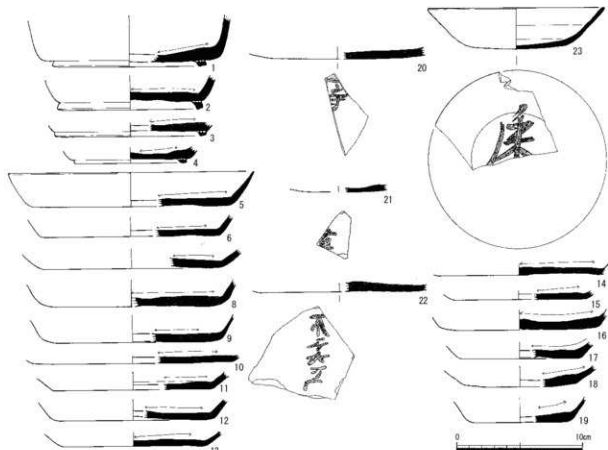


第31圖 須恵器実測圖(1)(縮尺1/3)



第32図 須恵器実測図(2) (縮尺1/3)

世前半のものである可能性が高い。その所属時期は8世紀後半代から9世紀代までの時期幅を有するが、中心となる時期は、無紐の坏蓋がないことや、坏A・Bなどの特徴から、9世紀代を中心とするものと考えられる。また、図化した須恵器のほとんどが坏などの供膳具で、貯蔵具である甕などの破片はあるものの、数量は少ない。さらに、少ないながらも墨書土器や転用硯の存在と合わせて、土師器は煮沸具である甕・鍋などは見られるものの、瓶や甎など特殊なものも目立つ。煮沸具や貯蔵具が一定量ある一般の集落の土器の様相とは大きく異なり、この二者の比率が極端に低いように考えられる。本遺跡の土器の様相は、単に祭祀的と漠然とするよりも、墨書土器にある「寺」の意義を大きく考慮し、白山信仰に関係する越前五山の一つに挙げられる吉野ヶ岳の西側山麓に位置し、山岳信仰に関連する遺跡の一部であったと、より積極的に評価すべき土器の内容と言えるかも知れない。

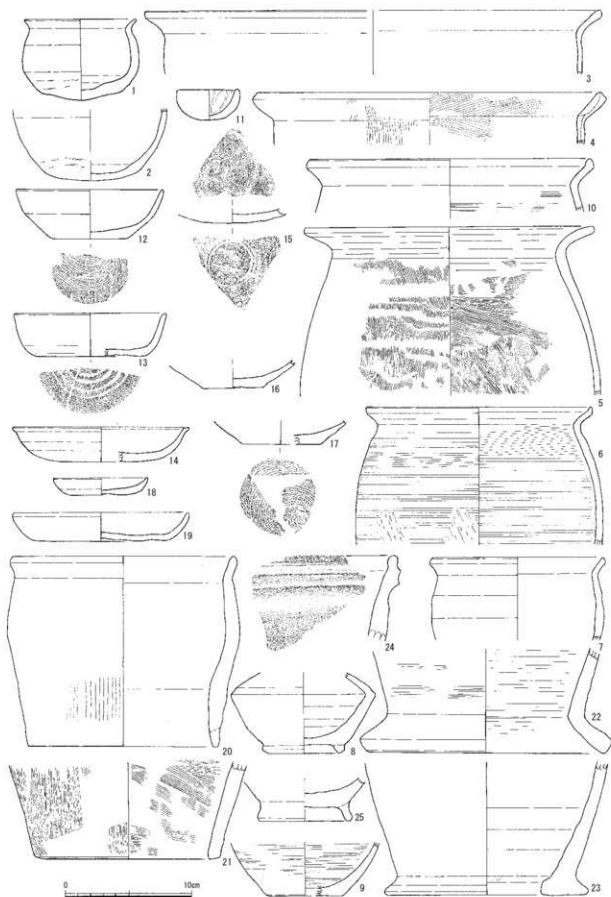


第33図 須恵器実測図(3) (縮尺1/3)

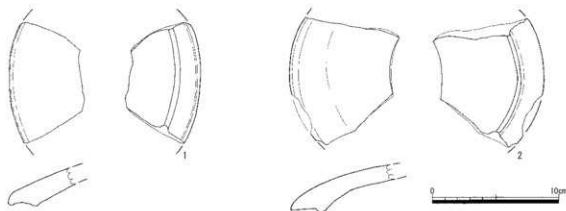
最後に、盛土からの出土で石製バンドコ蓋(第35図2)と、同様の形状の土製バンドコ蓋(第35図1)と判断したものがあ。本来のバンドコは石製のものばかりで、土製のものはその類例を知らない。

第7表 古代・中世土器観察表

図番No.	地味	器種	種類	器種	部位	残存率	調査・技法・文様など	口縁 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	備考	写真掲載
第31図1	K4	包含層	須恵器	坏蓋		1/12	内: 同形へら切痕ナデ 内: ナデ	(14.5)		1.7	黄灰	①①		
第31図2	A12	包含層	須恵器	坏蓋		4/3	外: 同形へら切 ナデ 内: ナデ	(12.8)		2.8	灰白	①①	口縁部のみ白陶質 付着	図版第13
第31図3	H4	包含層	須恵器	坏蓋		1/2	外: 同形へら切痕ナデ 内: ナデ	(13.1)		3.8	灰	①①		図版第13
第31図4	C14	包含層	須恵器	坏蓋	天井部	2/5	外: 同形へら切痕ナデ 内: ナデ	(13.2)		(3.6)	黄灰	①①		
第31図5	I4	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部	1/6	外: 同形へら切痕ナデ 内: ナデ	(12.9)		(1.1)	灰	①①		
第31図6	F4	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部	1/4	外: 同形へら切痕ナデ 内: ナデ	(12.1)		(1.7)	灰	①①		
第31図7	K4	盛土	須恵器	坏蓋		1/2	外: 同形へら切痕ナデ 内: ナデ	(13.9)		2.5	灰	①①		図版第12
第31図8	J3	包含層	須恵器	坏蓋		1/3	外: 同形へら切痕ナデ 内: ナデ	(17.2)		3.8	黄灰	①①		図版第13
第31図9	H14	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部	1/4	外: 同形へら切 ナデ 内: ナデ	(17.6)		(1.6)	黄灰	①①		
第31図10	J6	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部	1/3	外: 同形へら切 ナデ 内: ナデ	(17.8)		(2.3)	黄灰	②		
第31図11	G4	包含層	須恵器	坏蓋		5/12	内: 未定 ナデ 内: ナデ	(13.0)	(3.4)	3.75	黄灰	①①		図版第13
第31図12	E4-6	包含層	須恵器	坏蓋		1/2	外: 同形へら切痕ナデ 内: ナデ	(12.8)	(3.8)	3.1	灰白	①①	焼成不良	図版第13
第31図13	M4	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部	1/3	外: 同形へら切痕ナデ 内: ナデ	(14.0)	(7.3)	2.8	灰	①①		
第31図14	A9	包含層	須恵器	坏蓋		1/2	外: 同形へら切痕ナデ 内: ナデ	(11.9)	(7.8)	3.1	黄灰	①①		図版第13
第31図15	A14	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部	1/3	外: 同形へら切痕ナデ 内: ナデ	(11.8)	(7.2)	3.2	灰黄	①①		
第31図16	A12-13	包含層(盛土)	須恵器	坏蓋		2/3	外: 同形へら切痕ナデ 内: ナデ	(13.0)	(9.0)	2.95	外: 灰 内: 灰白	①①		
第31図17	E6	包含層	須恵器	坏蓋		1/3	外: 同形へら切痕ナデ 内: ナデ	(11.9)	(7.1)	3.0	灰	②		図版第13
第31図18	A14	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部	5/12	外: 同形へら切痕ナデ 内: ナデ	(13.9)	(8.6)	3.05	灰白	①①		図版第13
第31図19	H14	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部	1/3	外: 同形へら切痕ナデ 内: ナデ	(11.0)	(7.6)	(3.3)	灰白	②	底縁外側に墨痕か	図版第13



第34圖 土師器実測図(1)(縮尺1/3)



第35図 バンドコ実測図(縮尺1/3)

図版No.	地号	遺物	種類	器種	部位	残存率	調査・目録・文種など	口径 (cm)	直径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	土質	出土	備考	写真掲載
第311020	T6	包含物	須恵器	杯A		1/4	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	12.85	16.2	3.3	凡	①②			図版13
第311021	A12	包含物	須恵器	杯A		8/12	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	11.9	18.2	3.5	外: 灰青 内: 浅黄	①②			図版13
第311022	G4	包含物	須恵器	杯A		1/4	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	13.9	17.3	2.5	凡	①②			
第311023	F3	包含物	須恵器	杯A		1/3	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	17.8	14.8	2.45	灰白	①②			
第311024	F-G4-10	包含物	須恵器	杯A	口縁部	1/8	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	17.9	14.9	2.6	凡	①②	内外面灰ナメ灰		図版13
第311025	F2	包含物	須恵器	杯A		3/4	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	18.1	14.4	3.0	灰白	①②			図版13
第311026	A13	包含物	須恵器	杯A		1/3	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	16.85	13.8	3.2	凡	①②			図版13
第311027	H3	包含物	須恵器	杯A	口縁部	5/12	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	16.8	13.3	3.3	外: 灰白 内: 凡	①②			図版13
第311028	H-13	包含物・ 盛土	須恵器	杯A		1/2	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	15.0	11.4	2.2	黄灰	①②			
第311029	F3	包含物	須恵器	杯A		1/4	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	15.9	12.3	3.0	凡	①②			
第311030	F3	包含物	須恵器	杯B	口縁部	1/3	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	19.4	14.3	3.45	凡	①②			図版13
第311031	A12	包含物	須恵器	杯B		1/2	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	11.9	17.5	4.0	黄灰	①②			図版13
第311032	H10	土塊40	須恵器	杯B	口縁部	1/4	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	11.8	16.7	4.3	凡	①②			
第311033	K3	盛土	須恵器	杯B		1/3	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	11.9	7.9	3.75	黄灰	①②			
第311034	A1-K3	包含物・ 盛土	須恵器	杯B		1/2	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	17.0	12.5	5.7	灰白	①②			
第311035	F-G2- H4-13	包含物	須恵器	杯B	口縁部	5/12	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	17.8	13.6	5.6	黄灰	①②			
第311036	A12	包含物	須恵器	杯B		5/12	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	16.8	11.2	5.85	凡	①②			図版13
第311037	J9	包含物	須恵器	杯B		1/3	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	11.1	16.3	6.0	黄灰	①②			
第311038	J-K3	包含物・ 盛土	須恵器	杯B		1/2	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	15.9	9.0	5.4	灰白	①②			図版13
第311039	H4- 15・ C15	包含物・ 盛土	須恵器	杯B	口縁部	1/3	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	15.8	12.0	6.7	凡	①②			
第311040	G3-4	包含物	須恵器	杯B		7/12	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	16.0	11.85	5.3	黄灰	①②	外: 自然釉付着		
第311041	G4	包含物	須恵器	杯B		1/4	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	15.9	12.3	6.1	黄灰	①②	外: 自然釉付着		
第311042	K-G3	包含物	須恵器	杯B		1/3	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	13.1	15.6	6.0	黄灰	①②			
第3201	F2	包含物	須恵器	杯B	口縁部	1/4	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	14.9	10.4	5.5	黄灰	①②			図版13
第3202	A12-13	包含物	須恵器	杯B		5/12	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	14.9	10.6	5.1	凡	①②			
第3203	F7-26	包含物	須恵器	杯B	口縁部	1/6	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	13.9	10.0	5.7	黄灰	①			
第3204	F5	包含物	須恵器	杯B	口縁部	5/12	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	11.0	16.7	4.0	外: 黒 内: 灰白	①②	外: 自然釉付着		図版13
第3205	F3	包含物	須恵器	杯B	口縁部	1/4	外: ナデ 内: ナデ	12.4	8.8	4.8	黄灰	②			
第3206	H16	包含物	須恵器	杯B	口縁部	5/12	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	16.4	10.3	5.9	黄+リアブ灰	①			図版13
第3207	J3	包含物・ 盛土	須恵器	杯B		1/2	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	16.0	11.6	5.7	凡	①②			図版13
第3208	A16	盛土	須恵器	杯B		1/3	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ	11.9	17.7	4.8	灰白	①②			
第3209	F2-3-G H2	包含物	須恵器	碗状		2/5	外: 黒+ナデ 縁部: ナデ+黒+ナデ 内: 黒+ナデ 縁部: ナデ+黒	21.0	22.5		黄灰	①②			図版13
第3301	K-C12	包含物	須恵器	杯B	底面	1/6	外: ナデ 内: ナデ 底面は磨面	11.2	13.75		黄灰	②	内: 釉面		図版14
第3302	J7	包含物	須恵器	杯B	底面	1/6	外: ナデ 内: ナデ 底面は磨面	11.5	12.25		凡	②	内: 釉面		図版14
第3303	Z15	包含物	須恵器	杯B	底面	1/6	外: ナデ 内: ナデ 底面は磨面	10.0	11.0		黄灰	②	内: 釉面		図版14
第3304	E4	包含物	須恵器	杯B	底面	1/32	外: 同形へう殻残ナデ 内: ナデ 底面は磨面	12.0	10.9		黄灰	②	内: 釉面		

第3節 遺物

品名No.	地区	遺種	種類	器種	部位	残存率	調査・注目・説明など	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色澤	胎土	備考	写真掲載
003005	A13	包含物	陶器類	瓶	口縁部	1/12	外) ナブ 内) ナブ 底部は磨面		13.4	2.7	黄灰	①	内) 転写済	
003006	C15	盛土	陶器類	瓶	底部	1/12	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ 底部は磨面		14.0	1.6	灰白	②	内) 転写済	
003007	H7	包含物	陶器類	瓶	底部	1/12	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ 底部は磨面		14.0	1.5	灰	①	内) 転写済	
003008	A15	包含物	陶器類	瓶	底部	1/6	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ 底部は磨面		13.0	2.25	黄灰	①	底部外側に墨付痕	003014
003009	I3	包含物	陶器類	瓶	底部	1/12	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ 底部は磨面		12.0	2.25	灰	①	内) 転写済	003014
003010	F6	包含物	陶器類	瓶	底部	1/12	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ 底部は磨面		13.0	0.6	灰	①	内) 転写済	
003011	H5	包含物	陶器類	瓶	底部	1/12	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ 底部は磨面		13.0	1.42	灰白	①	内) 転写済	
003012	H4	包含物	陶器類	瓶	底部	1/12	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ 底部は磨面		12.0	1.05	灰白	①	内) 転写済	
003013	I5	包含物	陶器類	瓶	底部	1/6	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ 底部は磨面		12.0	1.2	灰	①	内) 転写済	
003014	C7	包含物	陶器類	瓶	底部	1/12	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ 底部は磨面			0.9	灰白	①	内) 転写済	
003015	K5	包含物	陶器類	瓶	底部	1/12	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ 底部は磨面		11.0	0.75	灰	②	内) 転写済	
003016	Z5	包含物	陶器類	瓶	底部	1/12	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ 底部は磨面		13.0	1.05	灰白	①	底部内側に墨付痕	
003017	H5	包含物	陶器類	瓶	底部	1/12	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) 底部は磨面		13.0	1.2	灰白	①	底部外側に墨付痕	
003018	H3	包含物	陶器類	瓶	口縁部	1/12	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ 底部は磨面		10.0	1.6	灰白	①	内) 転写済	
003019	C17	包含物	陶器類	瓶	底部	1/12	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ 底部は磨面		0.8	1.7	黄灰	①	内) 転写済	003014
003020	G2	包含物	陶器類	瓶	底部	1/12	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ		0.95		灰白	①	外) 墨跡	003014
003021	K6	盛土	陶器類	瓶	底部	1/12	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ		0.6		黄灰	①	外) 墨跡	003014
003022	I5	包含物	陶器類	瓶	底部	1/6	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ		0.8		灰	①	外) 墨跡	003014
003023	K6	盛土	陶器類	瓶	底部	1/6	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ	14.0	7.2	2.3	①	外) 墨跡	003014	
003024	H4	包含物	土師器	甕		7/10	外) ナブ ヘラズリ 内) ナブ	0.8		0.2	黄緑	①	口縁部から頸部にかけて墨付痕	003014
003025	H10	包含物	土師器	甕	底部	2/5	外) ヘラズリ ナブ 内) ナブ		17.0	5.5	黄緑	①		003014
003026	K4	包含物	土師器	甕	口縁部	1/8	磨滅のための調整不明		16.0	5.6	黄	①		003014
003027	H3	包含物	土師器	甕	口縁部	1/6	外) ナブ 内) ナブ		12.2	14.7	黄緑	①		
003028	K5	包含物	土師器	甕	口縁部 捺痕	1/6	外) ハテ ナブ 内) ハテ ナブ	23.0		13.3	こいい黄	①②		003014
003029		灰土	土師器	甕	口縁部	1/10	外) オキメ後ヘラズリ ナブ 内) オキメ ナブ	17.0		10.9	黄緑	①	捺痕者 胎土に墨付痕	003014
003030		灰土	土師器	甕	口縁部	1/2	磨滅のための調整不明	13.0		0.5	黄	①		003014
003031	H5	包含物	土師器	甕	底部	2/5	外) 磨滅のための調整不明 内) ナブ		5.5	0.3	黄青	①②		003014
003032	F6	包含物	土師器	甕	底面	1/2	外) ナブ後オキメ 内) オキメ		0.0	4.3	こいい黄	①		
003033	A13・I5・C12	包含物	土師器	甕	底面	1/4	外) ハテ 内) ハテ	22.1		14.1	灰	①	外側に墨付痕	003014
003034	A15	包含物	土師器	ヒコ チュウ		11/12	外) 磨滅のための調整不明 内) ナブ	4.7	1.8	2.4	灰白	①		003014
003035	A5	包含物	土師器	瓶	底面	1/6	外) 赤知 内) ナブ	11.4	15.0	2.9	黄青	①		003015
003036	A13	包含物	土師器	瓶	口縁部	1/2	外) ヘラ切痕ナブ 内) ナブ	11.0	10.0	3.4	こいい黄	①		003015
003037	I4	包含物	土師器	瓶	口縁部	1/2	外) 塗いナブ ナブ 内) ナブ	11.0	10.0	2.75	こいい黄	①	赤粉か	003015
003038	G6	包含物	土師器	瓶	底面	1/12	外) 頸部へラ切痕ナブ 内) ナブ		4.3	1.1	黄青	①	内側にヒコ塗粉か	003015
003039	K3	包含物	土師器	瓶	底面	1/2	外) 赤知 ナブ 内) ナブ		5.0	1.2	灰白	①	内) 赤粉か	003015
003040	A4	包含物	土師器	瓶	底面	1/2	外) 赤知 ナブ 内) 磨滅のための調整不明		0.2	1.0	灰白	①		
003041	H15	包含物	土師器	瓶	底面	1/2	外) ナブ 磨り上 内) 磨り上	7.2	15.0	1.35	黄	①		
003042	A18	包含物	土師器	瓶	口縁部	1/2	外) ナブ 磨り上 内) ナブ	11.0	10.4	3.3	こいい黄	①		
003043	Z3	包含物	土師器	瓶	底面	1/4	外) ハテ 内) 磨滅のための調整不明	17.4	15.0	15.05	黄青	①		
003044	F6	包含物	土師器	瓶	底面	1/3	外) ハテ ナブ 内) ハテ		14.0	17.0	①			003015
003045	I5	包含物	土師器	瓶	口縁部	1/6	外) ナブ後ハテ ナブ 内) オキメ	18.0		0.3	こいい黄	①		003015
003046	F6	包含物	土師器	瓶	底面	1/6	外) 磨滅のための調整不明 内) ナブ		15.8	10.0	こいい黄	①		003015
003047	I4	盛土	土師器	瓶	口縁部	1/12	外) ナブ 内) ナブ			0.8	こいい黄	①		003015
003048	N4	包含物	土師器	甕	底面	1/2	外) ナブ 内) ナブ		17.0	15.4	黄青	①		

残存率は原形に対する割合とする

① 口径、底径の測定値を()、器高の測定値を()で記述する

胎土は①土師砂粒(口径1mm以下)を少量含む ②土師砂粒を多量に含む ③砂粒(口径1～2mm)を含む ④石(口径2mm以上)を含む で分けたい。

2 石器・石製品

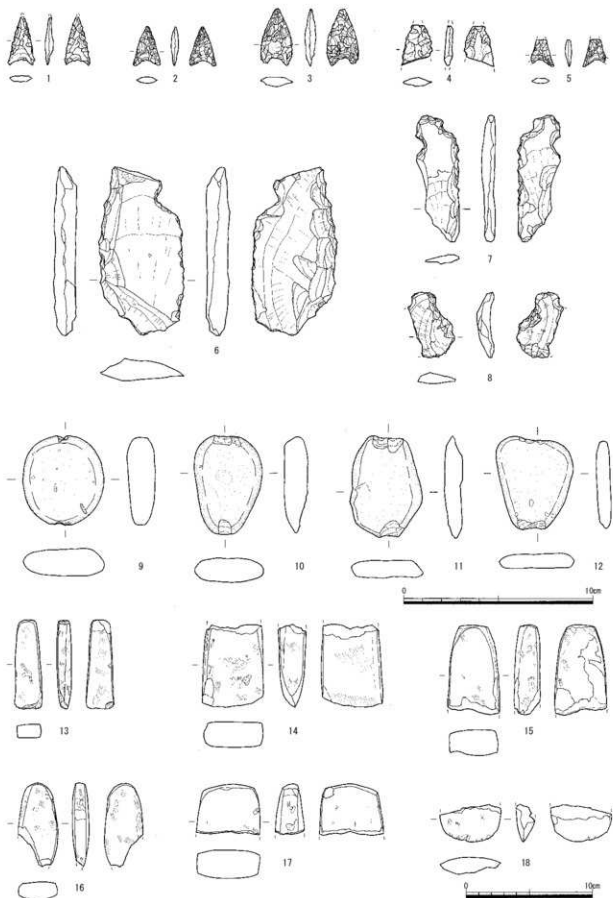
出土した石器・石製品は、総数で63点を数える。ほとんどが包含層から出土しているため、所属時期を明らかにすることはできないが、一部の砥石を除き、おおむね本遺跡出土の縄文土器に準拠するものと推測される。

石鏃（第36図1～5） 総数で5点を数える。1～3・5は凹基無茎鏃である。1は先端を欠き、整った二等辺三角形を呈する。表面は風化し、灰色を帯びる。綿密な調整剥離が施され、縁辺は鋭い。2は1よりやや短い二等辺三角形を呈する。3は縁辺が丸みを帯びる。4は先端・基部を共に欠き、基部形態は不明だが、三角鏃と判断される。3と同程度の大きさであると推測され、調整はやや粗い。5は先端・かえしの一部を欠き、縁辺が内湾する。1・4は表面の風化状況から、製作よりかなり後に欠損していると見られ、使用による欠損ではないと判断される。

石匙（第36図6～8） 総数で3点を数える。6・7は縦型石匙、8は横型石匙である。6は最大長約9cmを測る大型品である。直刃を呈し、刃部に調整剥離が施されるが、第一次剥離の切れ口が鋭角であるためか、刃部は縁辺のみを調整するにとどめている。背部は刃部に比べ、粗い剥離が重ねられるが、比較的鋭い縁辺が作出されている。基部はがっしりとしており、抉りは刃部側で明瞭に、背部側では控えめに施される。つまみは刃部に対して傾く。7は直刃を呈し、刃部は入念に調整される。背部は先端付近、抉り、基部周辺が調整される。基部は刃部側・背部側とも明瞭に抉られ、つまみは6と同様に刃部に対して傾く。刃部先端付近に刃部に沿うような剥落があり、使用の痕跡と見られる。8は半分を欠くが、扇形を呈すると推測される。表裏とも同方向から同じ程度の手で打撃・剥離されている。縦断面は湾曲し、刃部は湾曲面の内側のみ、粗い調整剥離が施される。

石錘（第36図9～12） 総数で4点を数える。すべて礫石錘である。扁平な川原石を原石とし、最大長5cm程度、最大幅4cm程度で大きさが揃う。打欠はすべて長軸端部2ヶ所に施される。10～12は両面より2～3回の打撃で打欠かれるが、9は礫の端部に垂直に敲打し、敲き潰すように浅い溝が作出される。縄擦れ痕等の明確な使用痕は確認できない。

磨製石斧（第36図13～18） 総数で6点を数える。13は柱状を呈する。14～17は側面が明確な稜線で画される、いわゆる定角式磨製石斧である。18は刃部のみで、全容は不明だが、定角式である可能性が高い。刃部が残存する13・14・18はすべて両刃であり、13は直刃、14はやや偏って緩やかに外弯、18は左右対称に外弯する。どれも丹念に研磨され、自然面や成形時の敲打面を残さない。研磨方向は一定しないが、斜め方向が主である。13・14は側面に擦切分割の痕跡と推測される段を有する。13は石の節理に沿って作出され、刃部が剥落する。折損部の観察から、他のものも同様に石の節理を意識して製作されたことがうかがえる。14・15・17・18は刃部と平行に折損し、使用時と見られる破損の割合が高い。また、18は刃こぼれが見られ、刃部に鋭さがなく、使用感がある。このように折損品が半数以上を占め、使用痕が肉眼で確認できるものもあることから、これらの磨製石斧は当地で使用され、廃棄されたものと判断される。なお、14は刃部の使用痕が肉眼で確認できないため、刃部の研ぎ直しなどの手入れがおこなわれていた可能性がある。刃部が傾くのは刃の研ぎ出しの結果か。



第36圖 石鏃・石匙・石錘・磨製石斧実測圖 (1~12:縮尺1/2, 13~18:縮尺1/3)

打製石斧 (第37図) 総数で11点を数える。以下、側辺と刃部の形態について、各々の特徴を抽出、それらの組み合わせによる分類を試みた。

① 側辺の形態

- A 側辺が基部から刃部まで直線的で、基部と刃部の幅の差が小さいもの
- A' 側辺が基部から刃部に向けて彎曲してやや開き、基部と刃部の幅の差が小さいもの
- B 側辺が基部から刃部に向けて直線的に開き、基部幅と刃部幅の差が大きいもの
- B' 側辺が基部から刃部に向けて彎曲して開き、基部幅と刃部幅の差が大きいもの

② 刃部の形態

- I 直線的な刃部を持つもの
- II 外弯する刃部を持つもの

以上の特徴による分類の内訳は、AⅠ類1点(1)、AⅡ類1点(2)、A'Ⅱ類2点(3・4)、BⅠ類1点(5)、BⅡ類1点(6)、B'Ⅱ類3点(7～9)となった。A'Ⅰ・B'Ⅰ類は出土しておらず、10・11は破損品で、残存部からは全体の形状を把握できないため、分類から省いた。以下、全体の傾向を概括する。

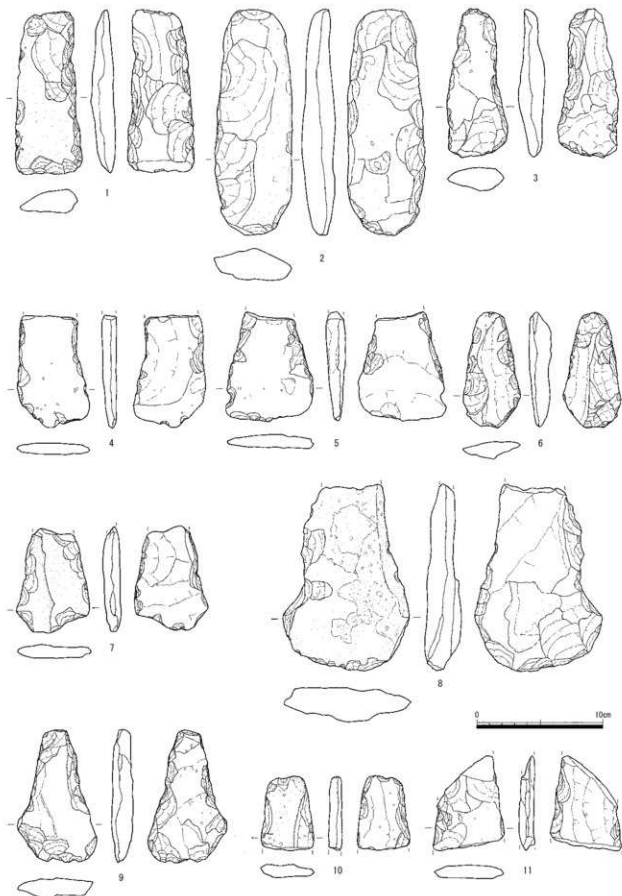
本遺跡出土の打製石斧は、刃部の摩滅が著しいものも多く見られ、磨製石斧と同様に半数以上が刃部と平行に折損している。遺構出土品が皆無であることから、使用後に廃棄されたものが多く含まれていると推測される。

刃部の形態を見ると、Ⅰ類が2点のみと少ない。そのうち、5は直刃を呈するが、第一次剥離面を多く残し、調整剥離は少ない。よって、調整剥離で意図的に直刃を作出するのはⅠのみとなるが、Ⅰの刃部は鈍い光沢を帯びるほどに摩滅しており、製作時の形状を留めていないか、刃部を新たに作出した可能性が指摘できる。つまり、これらの刃部は完成品の具体的なイメージの元に作出されるというより、第一次剥離で得られた鋭い縁刃を、極力そのまま刃部に使用しているものと考えられる。Ⅰ類が少ないのは、第一次剥離で得られる縁刃に直線的なものが少ないためであろう。

全体の形状を見ると、2や6のように比較的整った形状を呈するものもあれば、3・4・7のように歪なものもある。B'Ⅱ類が若干多いものの、法量を考慮しても、明確な傾向を読み取るのは難しい。7や10のように器厚が薄く脆弱なものや、8のような重厚なものまで、全体の形状はバラエティに富む。

砥石 (第38図1～3) 総数で5点を数え、うち3点を図示する。1は一面、2は表面と両側面、3は表・裏・両側面の四面を砥面として使用する。石質から1は仕上砥に近い中砥、2は中砥、3は荒砥とそれぞれ判断される。砥面は1・2が平坦で、3はやや内弯する。1・2は金属を研いだものと見られ、時期が大幅に下る可能性がある。

不明石器 (第38図4～7) 総数で4点を数える。4は側面が弓状、断面が三角形を呈する石器である。所々に溝や凹みが見られ、背面には広い平坦部が作出される。敲打痕などの使用痕は認められない。5は翡翠原石の加工品である。長軸に幅5mmほどの溝を半周させており、右側面は平坦面を作るように研磨している。一部被熱しており、加工の際に熱を加えた可能性がある。何らかの製品を意図して加工を施すも、途中で中断し、敲石に転用したと推測される。敲石転用後に強い打撃が加えられたと見られ、亀裂や大きな剥落が見られる。6は薄い剥片を作り、鋭い一辺に若干調整剥離を施して刃部とした剥片石器である。自然側面には横走する擦痕が見られる。7は剥片の一辺に表裏から調整剥離を施し、刃部を作出した剥片石器である。両端を折損する。



第37圖 打製石斧実測図(縮尺1/3)



第38圖 砥石・不明石器実測圖（縮尺1/3）

磨石類 (第39・40図) 総数で25点を数える。いわゆる狭義の磨石・凹石・敲石の特徴をあわせ持つものが含まれるため、それらを総称して磨石類とする。以下、凹み・敲打痕の有無と、表裏・側面の観察により、各々の特徴を抽出、それらの組み合わせによる分類を試みた。

① 凹み・敲打痕の有無

- A 凹み・敲打痕を持たないもの B 凹みを持つもの C 敲打痕を持つもの
D 凹み・敲打痕をあわせ持つもの

② 表裏・側面の形態

- I 磨面を有し、平坦面を持たず丸みを帯びるもの
IIa 表裏両面、または片面に平坦面を持つもの IIb 側面に面取りしたような平坦面を持つもの
III 磨面を持たないもの

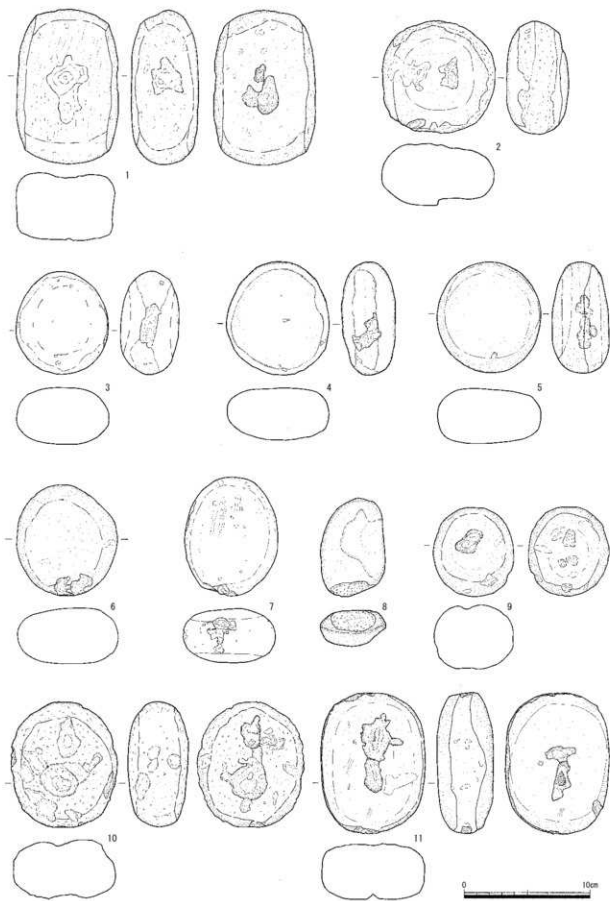
以上の特徴による分類の内訳は、A I類4点(第39図1～4)、A IIa類3点(第39図5～7)、A IIb類2点(第39図8・9)、B I類1点(第39図10)、B IIa類2点(第39図11・12)、B IIb類3点(第39図13・14、第40図1)、C IIa類6点(第40図2～7)、C III類1点(第40図8)、D I類2点(第40図9・10)、D IIb類1点(第40図11)である。なお、本分類での凹みとは、意図的に凹みが作出されているものを指し、敲打の結果として凹み状になったものは敲打痕に含める。敲打痕はある程度面的に広がるもののみ取り上げた。II類の平坦面はほとんどが磨りの結果によるものだが、素材礫の形状に因るものも若干含まれる。また、IIb類で表裏に平坦面を持たないものは存在せず、IIb類はIIa類の特徴をあわせ持っている。以下、全体の傾向を概括する。

分類ごとの数量を見ると、凹み・敲打痕の有無については、A～C類で数量に大きな偏りはないが、D類は他に比べて少ない。表裏・側面の形態については、III類が1点のみで、磨る機能をほぼすべてのものが持つ。C類は主に側面や上下端面に敲打痕を残し、IIb類はなく、敲打面は平坦にならない。B類はIIa・IIb類が大半を占め、凹みを作る面は平坦部が好まれる。特に第39図11において、このような傾向が単一の遺物内で見られ、側面を丁寧に面取りし、平滑な表裏面に凹み、上下端面に敲打痕を残している。これらのことから、凹みを面積の広い平坦面に、敲打痕を面積の狭い側面、または上下端面に残す傾向を指摘できる。さらに磨面のほかには、凹みまたは敲打痕のどちらかのみを持つものが大半を占め、磨面・凹み・敲打痕をすべて持つD類は少ない。つまり、本遺跡の磨石類は磨るという機能を基本としながら、一つの道具内で使う部位と使用法を限定しており、明確な目的意識を持って、道具と部位を使い分けているものと推測できる。ここでD類を見ると、第40図9・10は全体を不規則に使用している。機能性を求め、決まった部位を使用するには、単一の道具内では使用法を絞った方がより効果的であると推測されるため、あえて多機能的に使った結果、このように不規則な使用になったのかも知れない。第40図11は例外的に整った敲打痕・凹みをあわせ持つが、大型の礫を使用し、形状を丹念に整えることで、多機能に対応しようという意図が読み取れる。

また、A I類のように本来の礫の形を残すものがある反面、IIb類のように表裏面が必ず平坦になり、本来の礫の形状から大幅に変化しているものもある。これは素材となる礫の形状をそのまま利用するものと、全体の形状を意識して整えるものに分かれる傾向を示している。上に述べたように、道具の使い分けを考えた場合、全体の形状の違いも機能性の追及を反映した結果と推測されるが、本遺跡には検討に足る資料がないため、ここではその差違を指摘するにとどめる。粉砕具や加工具のセットとされる、石皿や台石の形態をあわせて検討によって、より具体的な様相が明らかになるであろう。



第39圖 磨石類実測図(1) (縮尺1/3)



第40圖 磨石類実測圖(2) (縮尺1/3)

第8表 石器・石製品観察表

遺物ID	部類	出土地区	出土遺構	遺存状態	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石種	備考	図録No.
1	石鏃	K5	包含層	先端欠	(25.2)	13.8	(4.5)	(1.09)	石英安山岩	無彫痕三角形	図録01
2	石鏃	K5	包含層	先端欠	39.8	14.1	3.8	0.76	チャート	無彫痕三角形	図録02
3	石鏃	K2	盛土	完整	30.0	16.8	5.2	2.56	チャート	無彫痕三角形	図録03
4	石鏃	K6	包含層	先端・基部欠	(21.2)	(15.2)	(4.2)	(1.50)	石英安山岩	三角形	図録04
5	石鏃	K3	包含層	先端・基部欠	(14.3)	(12.2)	3.6	0.46	不明	無彫痕三角形	図録05
6	石鏃	F3	包含層	完整	89.0	43.6	12.0	52.75	頁岩	短型	図録06
7	石鏃	K5	包含層	完整	67.0	22.5	6.5	10.80	頁岩	短型	図録07
8	石鏃	J4	包含層	欠	35.0	(20.5)	6.0	(5.50)	頁岩	短型	図録08
9	磨石鏃	H3	包含層	完整	47.0	43.0	14.5	48	安山岩	長軸端部向軸を打欠く	図録09
10	磨石鏃	J4	盛土	完整	32.1	35.9	12.5	32	安山岩	長軸端部向軸を打欠く	図録10
11	磨石鏃	R4	盛土	完整	33.0	38.8	9.0	31	砂岩	長軸端部向軸を打欠く	図録11
12	磨石鏃	A9	包含層	完整	49.5	40.5	7.8	27	砂岩	長軸端部向軸を打欠く	図録12
13	磨石鏃	F6	包含層	刃部欠	(70.2)	22.1	11.5	(26)	板状頁岩	片状	図録13
14	磨石鏃	D2	包含層	基部欠	(64.5)	48.0	(22.1)	(129)	板状頁岩	定角式	図録14
15	磨石鏃	A4	包含層	刃部欠	(71.0)	(40.9)	(29.5)	(129)	板状頁岩	定角式	図録15
16	磨石鏃	C3	包含層	刃部欠	(66.2)	31.7	13.5	(46)	板状頁岩	定角式	図録16
17	磨石鏃	H4	包含層	刃部欠	(57.8)	(56.6)	(23.0)	(68)	花崗岩	定角式	図録17
18	磨石鏃	H3	包含層	基部欠	(28.2)	(49.2)	(14.2)	(28)	板状頁岩	定角式下	図録18
19	打製石鏃	B10	包含層	完整	118.0	53.2	18.5	140	不明	A1 刃部は使用によって先鋭を帯びる	図録19
20	打製石鏃	B14	包含層	完整	178.0	61.8	26.1	340	不明	A2 かなり磨減する	図録20
21	打製石鏃	—	表採	完整	116.1	65.8	19.8	160	不明	A2' かなり磨減する	図録21
22	打製石鏃	H4	包含層	基部欠	(84.5)	57.0	11.0	(65)	不明	A2' 磨減する 刃部の調整回数が少ない	図録22
23	打製石鏃	H6	包含層	基部欠	(82.0)	47.5	15.0	(31)	不明	B1 磨減する 刃部の調整回数が少ない	図録23
24	打製石鏃	E6	包含層	完整	99.1	45.5	17.9	62	不明	B2 磨減する	図録24
25	打製石鏃	G5	包含層	基部欠	(82.5)	58.0	13.0	(61)	不明	B2' 刃部の調整回数が少ない	図録25
26	打製石鏃	A20	包含層	基部欠	(145.5)	109.0	27.0	(328)	頁岩	短型	図録26
27	打製石鏃	E1	包含層	完整	102.2	58.1	16.0	105	不明	B2' かなり磨減する	図録27
28	打製石鏃	D3	包含層	刃部欠	(58.5)	(41.5)	1.05	(31)	不明	短型不明 磨減する	図録28
29	打製石鏃	H3	包含層	刃部・基部欠	(69.5)	(55.0)	15.5	(45)	不明	短型不明	図録29
30	礫石	B15	包含層	欠	(55.2)	(77.2)	25.0	(198)	凝灰岩	中級	図録30
31	礫石	H7	包含層	欠	(51.8)	48.8	14.8	(29)	凝灰岩	中級	図録31
32	礫石	B10	包含層	両端欠	(133.0)	49.8	30.5	(371)	砂岩	中級	図録32
33	礫石	C15	盛土	破片	(40)	(24.5)	(14.5)	(18)	凝灰岩	中級	—
34	礫石	K5	盛土	破片	(24.5)	(23.5)	10.0	(8)	凝灰岩	中級	—
35	不明石鏃	B3	包含層	完整	224.5	59.0	48.2	840	不明	—	図録33
36	不明石鏃	A3	破瓦	一基欠	57.8	40.5	40.0	(179)	頁岩	研削による溝が不明な 磨石に転用	図録34
37	不明石鏃	F2	包含層	両端欠	69.0	(87.0)	6.5	(59)	石英安山岩	不定形鏃	図録35
38	不明石鏃	H3	包含層	両端欠	30.0	(31.5)	3.8	(11.9)	石英安山岩	短型小	図録36
39	磨石鏃	A9	p775	完整	97.0	91.0	63.0	819	不明	A1型 表裏の磨石	図録37
40	磨石鏃	J3	包含層	完整	92.8	73.0	46.0	369	不明	A1型 表裏の磨石	図録38
41	磨石鏃	—	表採	完整	95.0	76.0	52.0	479	不明	A1型 表裏の磨石	図録39
42	磨石鏃	C12	包含層	完整	79.5	72.0	50.5	403	不明	A1型 表裏の磨石	図録40
43	磨石鏃	A3	破瓦	完整	121.0	102.0	48.0	491	安山岩	A2型 表裏の磨石	図録41
44	磨石鏃	A10	包含層	完整	103.0	94.0	44.0	469	不明	A2型 表裏の磨石	図録42
45	磨石鏃	A2	縄文土層地中区	完整	110.0	89.0	58.0	489	不明	A2型 表裏の磨石	図録43
46	磨石鏃	C3	破瓦	完整	104.0	88.0	41.5	371	不明	A2型 表裏の磨石	図録44
47	磨石鏃	Z20	盛土	完整	93.5	78.0	35.0	410	不明	A2型 表裏の磨石	図録45
48	磨石鏃	H6	包含層	完整	87.5	76.0	40.0	320	不明	A2型 表裏の磨石	図録46
49	磨石鏃	H3	包含層	完整	84.0	68.0	46.0	410	アゲイテ	B2型	図録47
50	磨石鏃	F2	包含層	完整	100.5	90.5	38.0	522	アゲイテ	B2型	図録48
51	磨石鏃	A9	破瓦	欠	(61)	70.0	31.0	(199)	不明	B2型	図録49
52	磨石鏃	C2	包含層	欠	(135.0)	(70.5)	(18.5)	(209)	不明	B2型	図録50
53	磨石鏃	—	表採	完整	120.0	81.0	53.0	418	不明	B2型	図録51
54	磨石鏃	A10	包含層	完整	99.0	89.0	49.0	580	不明	C2型	図録52
55	磨石鏃	G4	p107	完整	81.5	73.0	45.0	319	不明	C2型	図録53
56	磨石鏃	C12	包含層	完整	89.0	81.0	41.0	419	不明	C2型	図録54
57	磨石鏃	A2	包含層	完整	88.0	82.0	45.0	450	不明	C2型	図録55
58	磨石鏃	A12	包含層	完整	88.0	80.0	45.0	471	アゲイテ	C2型	図録56
59	磨石鏃	A10	包含層	完整	95.5	73.0	42.0	434	不明	C2型	図録57
60	磨石鏃	D3	縄文土層地中区	完整	76.0	52.0	27.0	116	不明	C2型 表裏の磨石	図録58
61	磨石鏃	F2	包含層	完整	70.5	63.5	50.5	305	不明	D1型	図録59
62	磨石鏃	C3	盛土	完整	99.0	84.5	47.5	400	不明	D1型	図録60
63	磨石鏃	—	表採	完整	111.0	83.0	44.5	641	不明	D2型	図録61

第4節 まとめ

今回の調査成果から、本遺跡は基本的に9世紀代を主体時期とした集落跡と判断される。以下、遺構・遺物の内容を検証し、遺跡の性格を考察する。

1 遺構

調査区の広範囲に削平が及んでいるため、遺構から当時の状況を想定するのは困難である。掘立柱建物はいずれも小規模で、群を形成するような状況は見取れない。旧地形が緩やかな尾根と谷が幾重にも入り組んだ起伏地形であったことから、当調査区は集落の縁辺部であり、集落の中心部はやはり現在の上吉野集落に相当するものと推測される。当初は狭小な平坦地を選んで、点々と建物を設置していたが、やがて耕作地の拡大に伴い、尾根を削り、谷を埋めて、平坦面を造り、徐々に水田へと整備していったと考えられる。

2 遺物

遺物については、多くが古代の土器であり、その所属時期は9世紀代が中心となるものと考えられる。その内容は煮沸具や貯蔵具の比率が低い一方、供膳具や特殊な遺物が目立ち、一般の集落とは異なる様相を見せている。特に墨書土器（第33図20）の「寺」の字や転用硯の存在は、当時の識字層である僧侶の関与を示唆し、当地に寺院およびその関連施設が成立していた可能性をうかがわせるものである。この点については、上吉野集落の旧名「印内」や当地の字名「法善田」などから、すでに言及はしているが、遺物という具体的物証が得られたのは大きな成果である。さらに、上吉野集落を麓に控える吉野ヶ岳山頂の藏王堂周辺で、当遺跡の主体時期と同じ9世紀代の須恵器片が採集されている事実¹⁾も考慮すれば、9世紀代に吉野ヶ岳およびその山麓が宗教施設として一体に機能していた状況も想定され、その意味でも今回出土した土器の資料的価値は重要と言える。

一方、他所からの流入遺物と見られる縄文土器や石器類については、古代集落との直接の関連性は無論見出せないが、縄文時代中期前葉を主体時期とする集落が近隣に存在していたことを雄弁に物語っている。具体的には、やはり南隣する上吉野集落の位置する小谷部に存在していた可能性が非常に高いと考えられる。吉野の谷の中は、山地に囲まれた狭隘な地を川が谷を刻みながら流れており、山と川が非常に近接した地形である。自然の様々な資源を採集・活用していた縄文時代の人々にとっては、小規模ながら非常に居住に適した生活環境であったのではなかろうか。

3 遺跡

当調査区は寺院を中心に展開する集落の縁辺部か、もしくはその影響下にあった周辺集落の遺跡と考えられる。第2章でも触れたように、旧上吉野集落、すなわち印内集落にかつて僧坊七坊があったとされることについては、これまでは伝承や文献といった文字史料でしか知り得なかったが、今回得られた出土遺物から、吉野ヶ岳も包括した宗教施設、おそらく山岳寺院とも呼べる施設の存在が間接的ながら推察され、その初源が少なくとも9世紀代まで遡れることも判明した。

吉野ヶ岳を含め、かつての「院内」が白山信仰の影響下にあったことは、地勢的に見ても必然と言える。白山は越前のみならず日本屈指の霊峰であり、越前五山の中でもあらゆる意味において別格の存在である。そのため、白山以外の四山は白山の代替地として機能していたとも言われる²⁾。そこに見出せるのは、やはり白山に対する深い崇敬と憧憬であろう。その意味で、吉野ヶ岳と白山信仰は当地の歴史を構成する重要な要素であり、当地の歴史を理解する上での貴重な手掛かりでもある。

『白山縁起』によれば、白山は養老三年(719)七月、泰澄によって開かれ、天長九年(832)には、登山道として三方馬場(越前禪定道、加賀禪定道、美濃禪定道)が開かれたとあるが、文献史料などから、この9世紀代ごろに白山へ登山する者はごく少数の苦行僧のみであったと推測される⁽³⁾。一方、考古学的史料については、白山山頂で9世紀末から10世紀の土器が初源的に見つかっており⁽⁴⁾、文献史料による推測とおおむね符合している。いずれにせよ、9世紀代においては、大多数の一般民衆にとって白山は未だ遥か彼方に崇めるほかない聖地であったという事実には変わりはないだろうが、同時にその信仰が中央の仏教勢力にも徐々に浸透し始め、ごく一部ではあったが山頂を目指す苦行僧も現われてきた、というのもまた事実であろう。つまり、9世紀代とはやがて来る白山信仰の普遍化・大衆化⁽⁵⁾への胎動が始まる時期とも言えよう。そして、まさにその時期に吉野ヶ岳と山籠寺院を中核とした宗教活動の痕跡が見られるというのは、非常に興味深い象徴的な符合に思える。

註

- 1 第2章第2節参照。
- 2 「雲にそびえる白山は、泰澄の開いた修験道の、練行の道場とされているが、道なき原生自然の山奥に深く分け入って、この尾山に登拝することは、古代・中世の頃は容易なことではなかった。五山はこれのお山に代わる平常の練行の道場としての、一面も買っていた山であると云われている」(野村2002 26頁)。ただし、越前五山の中でも、越知山は泰澄が修行を開始し、晩年に入寂した地ということで、白山とは別の意味で神聖視されている。
- 3 『日本三大実録』巻45の元慶8年3月26日の宗叡の卒伝によると、宗叡(809～884)は、師の円珍に随い園城寺で南部大法を受けたが、そのとき比叡山の神が苦行を擁護すると約束した。その後、越前国白山に登ったとき、告げられたように双鳥が先後に飛び舞い、夜中は火が自然に路を照らしたという。(中略)また、天台座主尊意の幼年の師であった僧賢一は極尾寺の苦行僧であったが、元慶2年(878)越州白山に入るの、いつ再会できるかわからないと、薬師像を置いて出かけたという(『尊意僧正伝』群書213)(楢山2003 89頁)。
- 4 國學院大學考古学資料館の調査による(楢山2003 90頁)。
- 5 「寛弘2年(1005)、上道氏吉が国司守宣により、はじめて白山本宮檢校職に補任された(『神官上道家系譜』)。また寛仁元年(1017)10月2日、『左経記』に見える大藏の記事に、延喜式の名神祭に加えられなかった加賀白山が奉幣の対象に加わっている。こうして白山の地位の上昇している状況から見ると、苦行僧に案内された民衆の登拝もこの頃には盛んとなり、室堂の設備もできてきたものと思われる」(楢山2003 90頁)。

参考文献

- 野村英一 2002 「Ⅱ-5. 越前五山の尊像」『地方作仏教尊像の研究 若狭・越前の秘仏』25～38頁
 楢山林蔵 2003 「白山山頂出土遺物と白山信仰」『山岳信仰と考古学』山の考古学研究会 同成社 87～110頁

第5章 湯谷砂田遺跡

第1節 概要 [図版第16、第41・42図]

1 地形と層序

湯谷砂田遺跡は吉野の谷幅が狭まる荒川右岸の狭長な谷底平野および小段丘上に立地する。今回の調査区は南北の2区画に分かれ、北調査区が農道部分、南調査区が水田部分に相当し、中間の空白部は排水路である(第41図)。昭和初期に調査区西側の県道を開削した際、調査区周辺に張り出していた尾根を切り落としたため、北調査区全域と南調査区北東部(溝1・3より北側、トレンチより東側)に、地山層の露出した平坦面が見られる。全体の規模は東西27m、南北29m、総面積512㎡を測る。

遺構検出面は地山層の露出した平坦面と遺物包含層を残す緩斜面に分かれ、平坦面は削平された旧尾根部に、緩斜面は旧尾根裾部にそれぞれ相当すると推測される。平坦面の標高は75.60~75.70m、緩斜面部分の標高は74.60~75.20mで、全体として北西方向へ緩やかに下降している。

標準層序は以下の3層に大別される(第42図)が、猪谷田畑・上吉野法善田の2遺跡とは異なり、粘性のやや弱い砂質土が主体である。

- I層：褐灰色シルトで構成される遺物包含層(包含層1)。しまりは強く、遺物は少ない。
- II層：褐灰色土で構成される遺物包含層(包含層2)。しまりはやや弱く、遺物が多い。
- III層：暗灰褐色~黄茶褐色土で構成される地山層。いわゆる山土であり、砂や砂利・大小の礫が多く混入する。山側では特に鉄分を多く含み、赤っぽい。ただし、尾根裾部では粘性の強い灰色系の土が主体である。

当初はI・II層を遺物包含層と定めて掘削作業を進めたが、出土する土器の大半が表面の摩滅した細片で、山土を主体とした盛土や多量の礫、ごく最近の木杭などのごみも混入していた。その後、遺構調査に着手すると、遺構(特に溝の)覆土はI・II層の土質とは全く異なり、遺物の状態もI・II層のそれよりも総じて良好であることも判明した。

以上の状況から、I・II層はいわゆる自然堆積による遺物包含層ではなく、過去の圃場整備の際に、近隣の遺跡を削平して搬入した客土と判断される。なお、本来の遺物包含層の堆積が乏しいことについては、当地が緩やかな傾斜地形で川に近接していることや、当地の土が粘性の弱い砂質土主体であることを考慮すると、例えば降雨や川の氾濫などの自然作用に容易に影響され、土壌が堆積・定着しにくかったものと推定される。

2 遺構検出状況

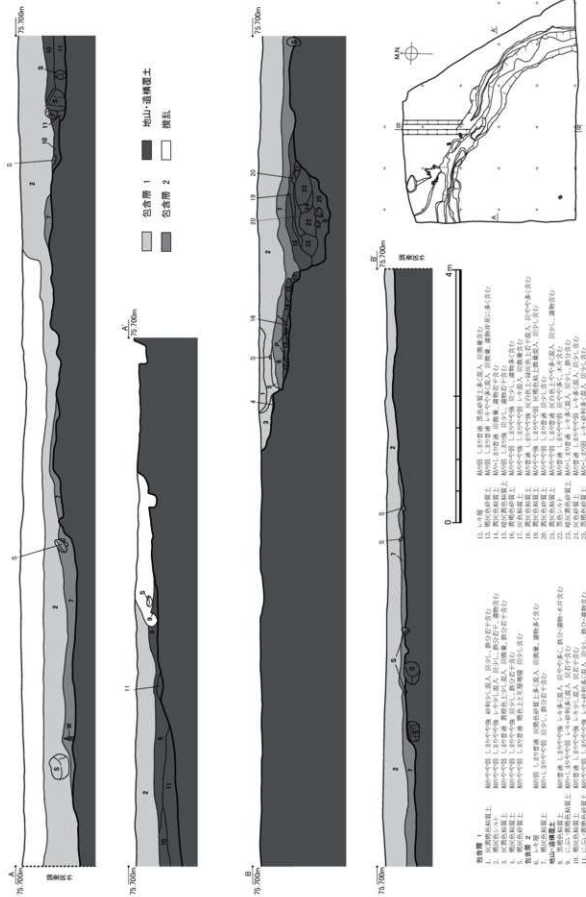
検出した遺構は、溝、土坑・ピットである(第41図)。基本的に遺物の得られた遺構のみ、遺構ごとの通し番号を付したが、その総数は溝3条、土坑1基をそれぞれ数える。遺構密度は低く、特に通常は多く検出される土坑・ピットなどは非常に少ない。実質、遺構は溝のみと言って良い状況である。

3 遺物出土状況

出土遺物は大型コンテナで60箱分を得た。調査面積に比して、遺物量は非常に多い。内訳のほぼすべてが古代の土師器・須恵器で、越前焼などの中世土器が若干と、石器がわずかに含まれる。前記のように土器には細片が多く、特にほとんどの土師器は表面が摩滅しており、ある程度の形状まで復元し得た資料は、遺物量に比して非常に少ない。



第41圖 湯谷砂田遺跡 遺構全体図 (縮尺1/200)



第42圖 海谷砂田遺跡 調査区土層断面図 (縮尺1/60)

- 包卷層 1
1. 灰吹土層遺跡
 2. 灰吹土層遺跡
 3. 灰吹土層遺跡
 4. 灰吹土層遺跡
 5. 灰吹土層遺跡
 6. 灰吹土層遺跡
 7. 灰吹土層遺跡
 8. 灰吹土層遺跡
 9. 灰吹土層遺跡
 10. 灰吹土層遺跡
 11. 灰吹土層遺跡
- 包卷層 2
12. 灰吹土層遺跡
 13. 灰吹土層遺跡
 14. 灰吹土層遺跡
 15. 灰吹土層遺跡
 16. 灰吹土層遺跡
 17. 灰吹土層遺跡
 18. 灰吹土層遺跡
 19. 灰吹土層遺跡
 20. 灰吹土層遺跡
 21. 灰吹土層遺跡
 22. 灰吹土層遺跡
 23. 灰吹土層遺跡
 24. 灰吹土層遺跡
 25. 灰吹土層遺跡

- 地山-遺積層土
1. 灰吹土層遺跡
 2. 灰吹土層遺跡
 3. 灰吹土層遺跡
 4. 灰吹土層遺跡
 5. 灰吹土層遺跡
 6. 灰吹土層遺跡
 7. 灰吹土層遺跡
 8. 灰吹土層遺跡
 9. 灰吹土層遺跡
 10. 灰吹土層遺跡
 11. 灰吹土層遺跡
 12. 灰吹土層遺跡
 13. 灰吹土層遺跡
 14. 灰吹土層遺跡
 15. 灰吹土層遺跡
 16. 灰吹土層遺跡
 17. 灰吹土層遺跡
 18. 灰吹土層遺跡
 19. 灰吹土層遺跡
 20. 灰吹土層遺跡
 21. 灰吹土層遺跡
 22. 灰吹土層遺跡
 23. 灰吹土層遺跡
 24. 灰吹土層遺跡
 25. 灰吹土層遺跡
- 擾乱
1. 灰吹土層遺跡
 2. 灰吹土層遺跡
 3. 灰吹土層遺跡
 4. 灰吹土層遺跡
 5. 灰吹土層遺跡
 6. 灰吹土層遺跡
 7. 灰吹土層遺跡
 8. 灰吹土層遺跡
 9. 灰吹土層遺跡
 10. 灰吹土層遺跡
 11. 灰吹土層遺跡
 12. 灰吹土層遺跡
 13. 灰吹土層遺跡
 14. 灰吹土層遺跡
 15. 灰吹土層遺跡
 16. 灰吹土層遺跡
 17. 灰吹土層遺跡
 18. 灰吹土層遺跡
 19. 灰吹土層遺跡
 20. 灰吹土層遺跡
 21. 灰吹土層遺跡
 22. 灰吹土層遺跡
 23. 灰吹土層遺跡
 24. 灰吹土層遺跡
 25. 灰吹土層遺跡

第2節 遺構 [図版第17、第41・43図、第9表]

本節では、特に主要な遺構を中心に記述する。なお、各遺構の規模（長さ・幅・深さなど）や方位（角度）についての数値は、すべて遺構検出面を基準として、測量図上で測定・算出した概算値である。

溝1（第41・43図） A4・5区からD0区にかけて検出した。総延長30.20m、幅1.50～2.50m、深さ0.18～0.40m、底面の標高74.20～75.20mをそれぞれ測る。溝の方向は多少曲折するが、全体としては南（N13°W）から徐々に北西（N40°～53°W）へ円弧を描くように伸長し、西端でほぼ西（荒川の方向）を向く。溝底は自然地形とほぼ同様に北西方向へ緩やかに下降するが、C・D2区以西では中央が葉研状に掘り込まれ、勾配も若干きつくなっている。

溝の軌跡が旧尾根の外縁に沿いつつ荒川へ向かっているところから、尾根裾を流れる小川のような自然流路に手を加えて、水路として活用したものと推測される。また、前節でも若干触れたが、覆土には小礫や砂利・砂が多く混じり、遺物量も格段に多いが、土器片の表面はあまり摩滅していない。このことから、溝の上流で廃棄された遺物が当地まで流入・堆積した状況、すなわち標高の高い南方にこれらの遺物を使用・廃棄した集落が存在する可能性を指摘できよう。

溝2（第41・43図） D・E0～1区で検出した。総延長6.50m、幅0.70～3.20m、深さ0.18m、底面の標高74.70～74.80mをそれぞれ測り、方位はN50°Wを向く。土坑1と切り合い、土坑1に先行する。

外形が歪で、浅皿状の土坑が2基連結しているように見えるが、底面に明瞭な高低差や切り合いも確認し得なかったため、調査時は暫定的に溝とした。遺物がほとんど得られていないことから、おそらく自然地形の緩斜面に形成された水溜まりの痕跡と推測される。

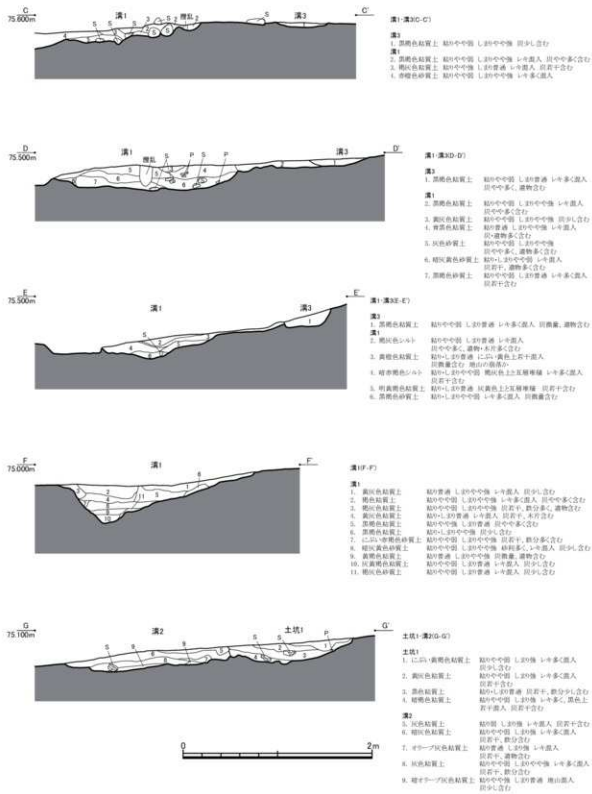
溝3（第41・43図） A5区からC3区にかけて検出した。総延長19.30m、幅0.50～1.10m、深さ0.06～0.14m、溝底の標高75.30～75.40mをそれぞれ測る。溝1の右岸に併行しつつ、ほぼ同様の軌跡（N8°～29°～68°W）を辿るが、削平のためか途中で途切れている。覆土の切り合いで溝1→溝3の先後関係が成り立つことから、溝1が埋没した後に形成された小規模な流路の可能性が想定できるが、自然か人工かは判断できない。

土坑1（第41・43図） E1区で検出した。長径2.10m、短径1.30m、深さ0.18mをそれぞれ測り、方位はN85°Wを向く。前述のとおり、溝2が埋没した後に形成されているが、やはり遺物がほとんど得られていないところから、これも自然に形成された水溜まりの痕跡と推測される。

第9表 主要溝・土坑一覧表

遺構名	地区	平面形	方位	平面規模 (m) 長さ×幅 (最大値)	深さ (m)	出土遺物	備考	挿図No.
溝1	A4・5～D0	円弧形	N13°W～N40°W ～N53°W～EW	30.20×2.50	0.40	土師器等	下流部葉研状	第40・42図
溝2	D・E0～1	不定形	N50°W	6.50×3.20	0.18		水溜まりの跡か	第40・42図
溝3	A5～C3	円弧形	N8°W～N29°W ～N68°W	19.30×1.10	0.14	土師器等	途切れる	第40・42図
土坑1	E1	長楕円形	N85°W	2.10×1.30	0.18		溝2と切り合う	第40・42図

※平面規模・深さはすべて概算値

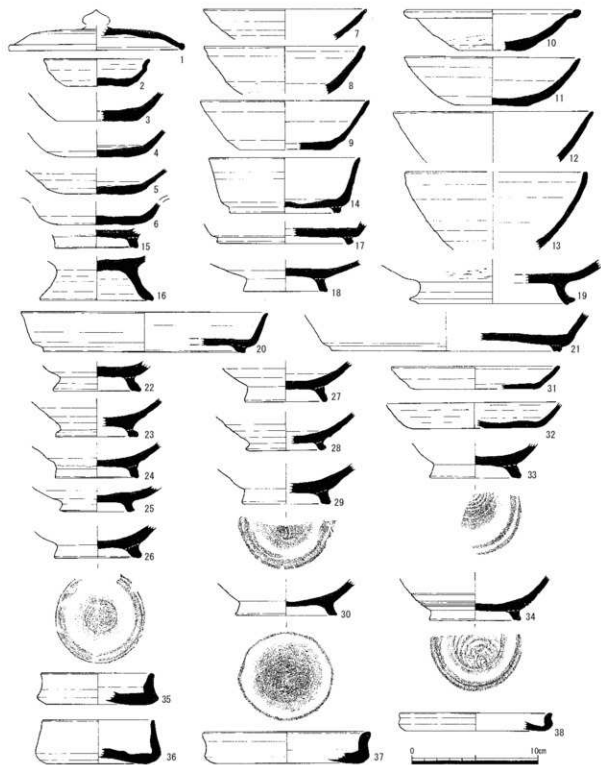


第43図 遺構断面図(縮尺1/40)

第3節 遺物 [図版第18～20、第44～51図、第10・11表]

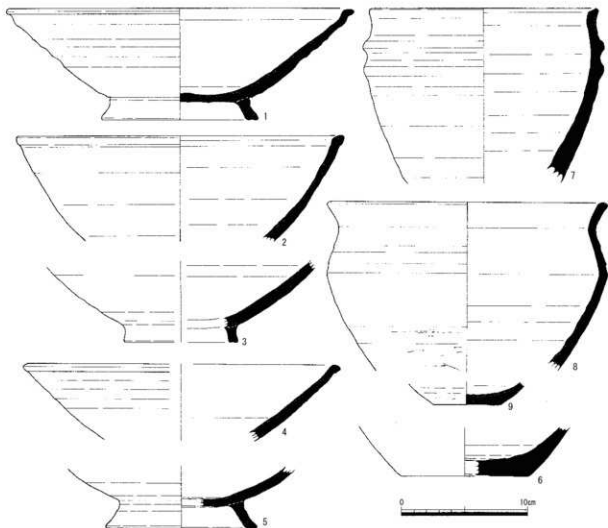
1 土器

本遺跡では須恵器と土師器が多数出土し、所属時期は9世紀後半代から10世紀前半代の時期幅を有する。いずれも近隣からの客土の混入と見られ、全体がわかるものはほとんどない。本節で図示したものは須恵器92点、土師器60点である(第44～50図)。以下、全体の概要と特異な土器を中心に述べる。

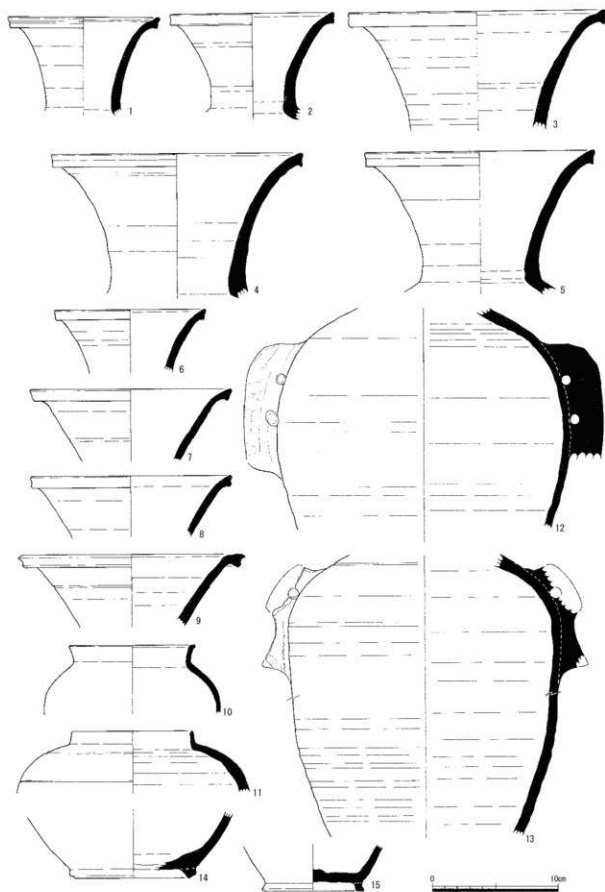


第44図 須恵器実測図(1) (縮尺1/3)

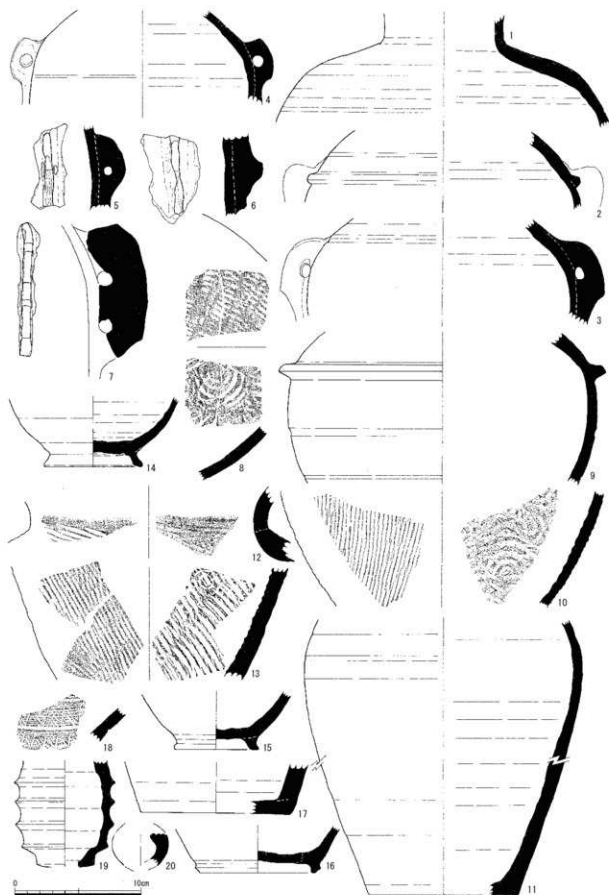
須恵器 坏蓋は摘みが付くもの(第44図1)の1点のみである。坏Aとなるものではなく、坏Bも2点(第44図14・17)あるのみである。埴Aは10点(第44図2~11)あるが、小型のもの(第44図2)や、口縁端部を摘み出して外反させるもの(第44図6・10)は仏具的なものであろう。埴Bは15点(第44図12・13・15・16・22~30・33・34)あり、底部を糸切りののちに、高台の張付けを明瞭に残すのが4点(第44図26・29・30・33・34)ある。盤Aはなく、盤Bは3点(第44図19~21)あるが、1点(第44図19)は高台端部が外反するなど、他の2点とは異なることから、盤ではなく異なる器種となるかもしれない。コースター型の焼台4点(第44図35~38)と、還元焼成された土師器の長胴甕(第48図8)は、本遺跡の性格を直接に物語るものである。鉢で口径が20cmを超えるもの5点(第45図1~5)は太平鉢と呼ばれるもので、高台が付く。直立する口縁直下に2段の凸帯が巡るもの(第45図7)や、頸部が屈曲してゆるく外反するもの(第45図8)、「く」の字になるもの(第48図6)などもある。壺・瓶類には長頸壺、もしくは双耳瓶(第46図1~9・12・13、第47図1~7・9)と短頸壺(第46図10・11)がある。双耳瓶の耳には1孔のもの(第47図4)と2孔のもの(第46図12・13)の2種類があるようである。中には肩部に突帯を巡らせるものもあり、四耳壺(第47図2・9)と考えられる。壺・瓶類の底部には高台が付くもの(第47図14・15、第48図14~16)と、高台が付かない平底(第48図11・17)がある。横瓶は小片であるが、2点(第47図8、第48図7)ある。甕は口径が30cmを超える大型のもの(第48図1



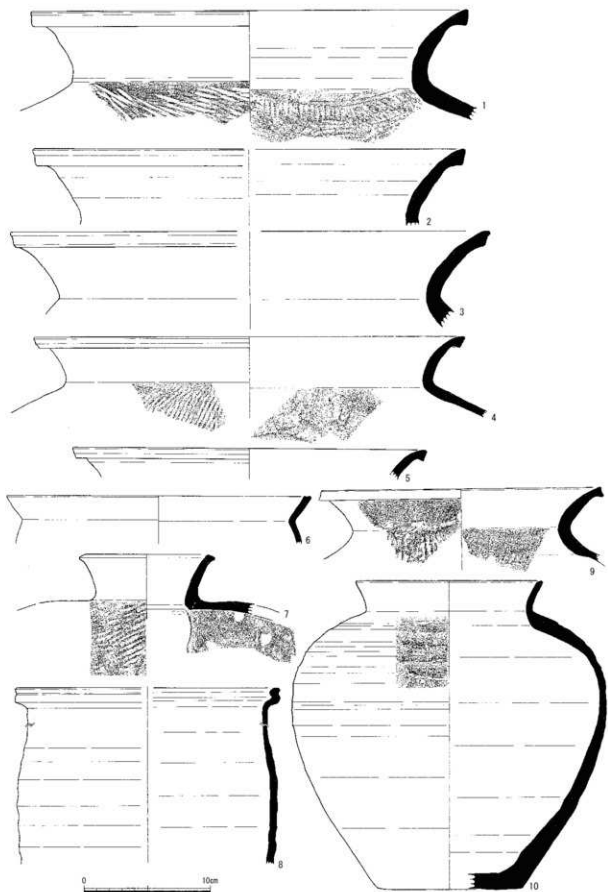
第45図 須恵器実測図(2)(縮尺1/3)



第46圖 須恵器実測図(3)(縮尺1/3)



第47圖 須惠器実測圖(4)(縮尺1/3)



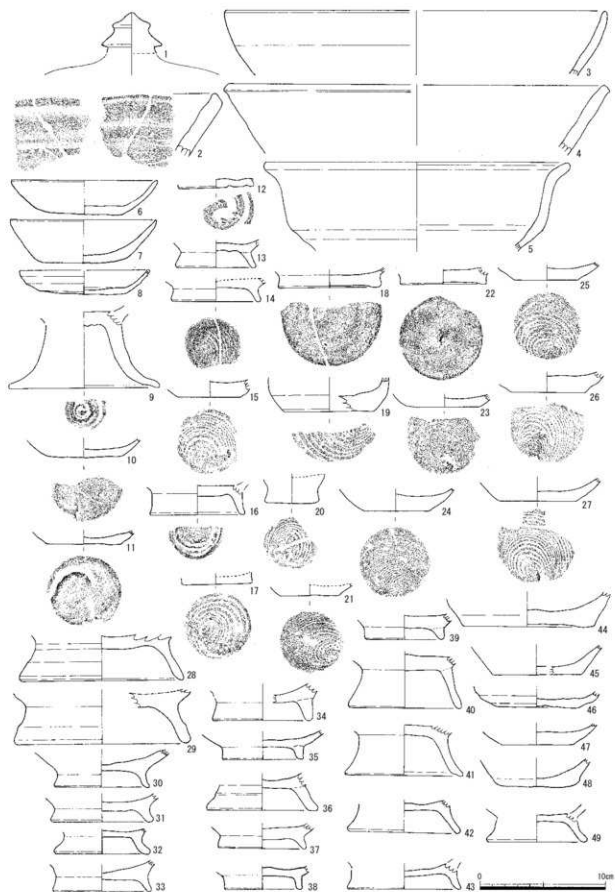
第48図 須恵器実測図(5)(縮尺1/3)

～4)と、それより一回り小さい25cm前後のもの(第48図5・9)の2種類がある。また、口縁が小さく外反するもの(第48図10)も甕であろう。肩部にヘラ描きがある。甕の胴部は内外面にタタキのある破片のみで、その形状は不明である(第47図10・12・13・18)。器壁の厚さから、これらの甕の胴部と考えられるものには、卵型のように縦長となるもの(第47図10・13)が目立つ。さらに須恵器の土鈴(第47図20)や、おそらく瓦塔相輪部分と考えられるもの(第47図19)など、通常の集落では出土しないようなものがある。

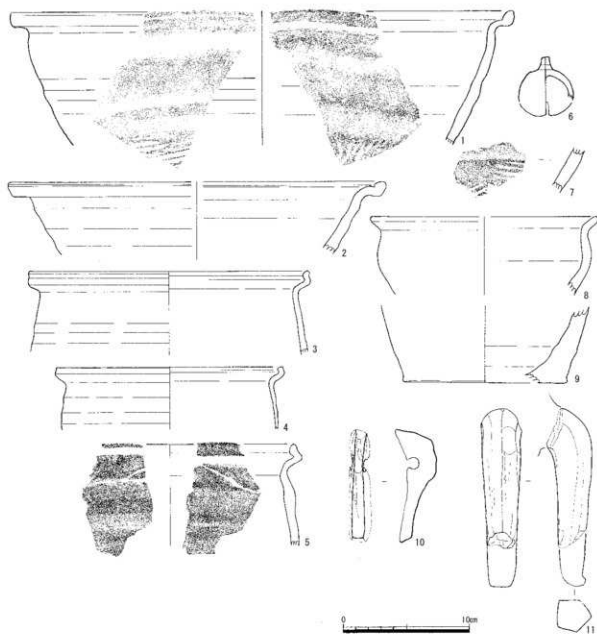
これらの須恵器には注目される点がいくつかあり、若干の補足をおこなっておきたい。太平鉢の1点(第45図1)と瓶の1点(第46図12)は、還元焼成が不十分のため、色調が須恵器に特有な灰色ではなく、茶褐色の色調となっている。特に後者には、中世陶器の壺などの肩部によくある降灰もあり、中世陶器と見間違えるほどである。しかし、太平鉢は口縁や高台の形状に加え、法量からも古代末のものである。また、瓶には耳が付き、双耳であることは明らかで、古代の須恵器であろう。先にも説明した、土師器の長胴甕で還元焼成されて、須恵質化したもの(第48図8)は窯業遺跡で出土することが多い。

土師器 土師器は種類も多く、供膳具である埴、煮沸具である甕・鍋のほか、須恵器の焼成不良品もあるが、坏と考えられるものはない。全形が判るのは埴Aの2点(第49図6・7)と、皿Aの1点(第49図8)である。その他に図示したものは、埴や皿などの底部もしくは高台部で、特徴的なものが多く、平底をユビオサエ、またはユビナデで全体を上げ底状とするもの(第49図18・22)は少ない。糸切りは11点(第49図17・19・21・23～27)あり、多くは埴Aと考えられる。やや厚手のもの(第49図15・19)は坏ではなく、鉢もしくは壺などの底部であろう。高台の付く底部も多く、脚の径が大きく、大型の鉢のものではないかと考えられるものもある(第49図28・29)。脚を貼り付ける前の底部に糸切りを残すもの(第49図9・16)は2点確認できた。高台が伸びて長脚となるもの(第49図9・40・41)は脚高高台で、柱状高台(第49図20)とともに、古代から中世の過渡期にかけて特有の器種である。鉢には口縁が単純に大きく開き、口径が30cm近くになるかと思われるもの(第49図2～4)と、胴部で屈曲して口縁端部がさらに外反するもの(第49図5、第50図7・8)とあるが、本県では類例が見当たらず、全形などは不明である。長胴甕はいずれも口縁が内側へ立ち上がるもの(第50図3～5)で、鍋も同じような口縁の形状である(第50図1・2)。羽釜の脚と考えられるもの(第50図11)が1点だけある。本来は須恵器として製作されたが、焼成不良で土師器に近い生焼け状態となったものに、宝珠が二重に重なる蓋のつまみ部分(第49図1)や、双耳瓶の耳(第50図10)などもある。

以上、これらの出土土器は、古代の窯業遺跡が削平され、本遺跡に搬入された客土に混入したものである可能性が高い。当調査区東側にその存在が推定される古代の窯跡に、上吉野窯跡(第4図7)と藤谷窯跡(第4図4)があるが、いずれも時期やその内容などの実態は不明である。



第49圖 土師器実測図(1) (縮尺1/3)



第50図 土師器実測図(2)(縮尺1/3)

第10表 土器観察表

図No.	出土地点	種類	器種	部位	残存率	数量・技法・文様など	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	胎土	備考	写真掲載
第4001	A5溝1	須恵器	杯蓋	口縁部	3/5	内) 斜転へろ切縁ナデ 内) ナデ	13.8		(1.9)	灰白色	①		図版第18
第4002	B1溝2	須恵器	杯A		1/2	内) 斜転へろ切縁ナデ 内) ナデ	(8.4)	(5.1)	2.15	灰白色	①②		
第4003	C2台台壺	須恵器	杯A	底面		内) 斜転へろ切縁ナデ		(6.2)	(2.3)	灰白色	③	焼成不良	
第4004	C3溝1	須恵器	杯A	底面	5/12	内) 斜転へろ切縁ナデ 内) ナデ		(5.3)	(2.2)	灰白色	③	胎土に黒燐含有	
第4005	A4台台壺	須恵器	杯A	底面	7/12	内) 斜転へろ切縁ナデ 内) ナデ		(5.2)	(2.1)	②			
第4006	C1台台壺	須恵器	杯A	底面		内) 斜転へろ切縁ナデ		(5.6)	(1.8)	黄灰色	②		
第4007	A4溝1	須恵器	杯A	口縁部	1/6	内) ナデ	13.0		(2.4)	灰白色	①		
第4008	D1溝1・2	須恵器	杯A?	口縁部	1/10	ナデ	12.8		(3.8)	灰白色	①		
第4009	C2溝1・ C4台台壺	須恵器	杯A	口縁部 底面	1/6	内) ナデ	13.2	7.9	3.9	内) 黄灰色 内) 黄灰色	①		図版第18
第40010	C2台台壺	須恵器	杯A		1/12	内) 斜転へろ切縁ナデ	(13.5)	(5.0)	3.2	内) 黄灰色 内) 灰白色	②		図版第18
第40011	C2台台壺	須恵器	杯A			内) 斜転へろ切		5.8	3.6	灰白色	①		
第40012	D1溝1	須恵器	杯A	口縁部 底面	1/12	内) ナデ	16.0		(4.0)	黄灰色	③		

第5章 湯谷砂田遺跡

図番	出土地点	種類	形状	部位	残存率	調査・技法・文相など	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	器底	胎土	備考	写真掲載	
040013	D2包含層	須恵器	甕	口縁部 残部	1/12	内) ナテ 内) ナテ	14.0前後		6.0前後	内) 灰黄褐色 内) 濃い黄褐色	①			
040014	A4・D3包含層	須恵器	杯形	口縁部	内)	割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ	(11.8)	(8.8)	4.35	内) 灰色 内) 灰白色	②		040013	
040015	A4包含層	須恵器	甕	底面	1/2	内) 割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ		(6.4)	(3.5)	灰白色	③			
040016	D1包含層	須恵器	甕	底面	1/4	内) ナテ 内) ナテ		(8.8)	(3.5)	灰白色	③			
040017	A3包含層	須恵器	杯形	底面	1/3	内) 割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ		(10.0)	(1.8)	灰白色	②③			
040018	C3包含層	須恵器	杯形 浅?	底面	1/2	内) 割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ		(6.6)	(2.5)	灰色	③			
040019	A4包含層	須恵器	甕	底面	3/6	内) ナテ 内) ナテ		(11.8)	(3.5)	灰黄褐色	①	焼成不良		
040020	A2包含層	須恵器	杯形	底面	1/6	内) 割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ	(19.4)	(15.0)	(2.2)	黄灰色	②③		040018	
040021	C2包含層	須恵器	杯形	底面	内)	割取ヘラ切痕ナテ 自然剥離片		(18.0)	(2.1)	内) 灰褐色 内) 灰白色	③			
040022	A4包含層	須恵器	甕	底面	1/2	内) 割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ		(6.9)	(2.4)	灰白色	①	焼成不良		
040023	A2包含層	須恵器	甕	底面	1/3	内) 割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ		(6.4)	(2.0)	灰色	②			
040024	A2包含層	須恵器	甕	底面	1/2	内) 割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ		(6.6)	(2.8)	灰色	③			
040025	A2包含層	須恵器	杯形 浅?	底面	1/4	内) 割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ		(5.0)	(2.1)	灰色	③			
040026	D1・C3包含層	須恵器	高付 甕	底面	内)	糸切痕ナテ 内) ナテ		6.8	(2.5)			焼成不良		
040027	B・D2包含層	須恵器	甕	底面	内)	糸切痕ナテ 内) ナテ		(6.4)	(2.2)	濃い黄褐色	①	焼成不良?	040018	
040028	B4層1	須恵器	甕	底面	1/2	内) 割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ		(5.6)	(3.0)	灰色	③	胎土に器底付		
040029	D2包含層	須恵器	甕	底面	内)	糸切痕ナテ 内) ナテ		(6.8)	(2.3)	黄褐色	③			
040030	A4包含層	須恵器	甕	底面	内)	糸切痕ナテ 内) ナテ		7.8	(2.8)	灰白色	③			
040031	C4層1	須恵器	甕	底面	1/12	内) 割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ	(13.2)	10.8	1.4	灰白色	①			
040032	D1層2	須恵器	甕	底面	1/3	内) 割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ		(9.6)	(2.0)	内) 灰白色 内) 灰褐色	①③			
040033	C2包含層	須恵器	甕	底面	内)	糸切痕ナテ 内) ナテ		(7.0)	(2.8)	黄褐色	③			
040034	A5包含層	須恵器	甕	底面	内)	糸切痕ナテ 内) ナテ		(7.2)	(2.5)	灰色	③		040018	
040035	C9包含層	須恵器	甕	底面	1/6	内)	割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ	(8.5)	(8.2)	2.4	内) 灰色 内) オリーブ茶色	③		040018
040036	C2包含層	須恵器	甕	底面	1/12	内)	割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ	8.8	8.0	3.5	③		040018	
040037	D1包含層	須恵器	甕	底面	1/30	内)	割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ	(13.1)	(11.4)	2.45	内) 黄褐色 内) 灰褐色 内) 黄褐色	③		040018
040038	D1包含層	須恵器	甕	底面	1/6	内)	割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ	(12.6)	(11.8)	1.4	内) 黄褐色 内) 黄褐色 内) 黄褐色	③		040018
040039	B4層1、C2・D1・C3包含層	須恵器	甕	底面	内)	割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ	(27.4)	(12.4)	(8.8)	内) 濃い黄褐色 内) 褐色	①		040018	
040040	C2・C3・D4包含層	須恵器	甕	口縁部 残部	1/4	内) ナテ 内) ナテ	25.0前後		8.0前後	灰白色	③		040018	
040041	A4包含層	須恵器	高付 甕	底面	内)	ナテ 内) ナテ	(25.6)		(6.0)	内) 黄褐色 内) 濃い黄褐色	③		040018	
040042	A4包含層	須恵器	甕	底面	内)	割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ	(11.8)	(4.8)		濃い黄褐色	③	焼成不良		
040043	C2包含層	須恵器	甕?	底面	内)	割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ	(18.1)	(3.9)		内) 灰色 内) 灰白色	③			
040044	D0層1、C1包含層	須恵器	甕	口縁部 残部	1/6	内) ナテ 内) ナテ		(13.3)		内) 灰色 内) 黄褐色	③		040018	
040045	C2・D1包含層	須恵器	高付 甕	口縁部 残部	内)	ナテ 内) ナテ	(21.4)		(13.4)	灰色	③		040018	
040046	E1層2	須恵器	甕	底面	3/5	内) 割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ		(5.4)	(2.8)	灰色	①③			
040047	A4層1	須恵器	黄褐色 甕	口縁部	5/12	内) ナテ 内) ナテ	(11.8)		(7.2)	灰色	①		胎土に器底付	
040048	A4包含層	須恵器	甕	口縁部	内)	ナテ 内) ナテ	(12.8)		(8.4)	灰白色	③			
040049	D0層1	須恵器	黄褐色 甕	口縁部	1/6	内) ナテ 内) ナテ	(20.2)		(9.3)	灰色	①			
040050	A1層上、C1包含層、D0層上	須恵器	甕	口縁部	内)	ナテ 内) ナテ	(19.8)		(11.4)	内) 黄褐色 内) 黄褐色	③			
040051	B4層1、B3・C4包含層	須恵器	黄褐色 甕	口縁部	内)	ナテ 内) ナテ	(18.6)		(11.4)	内) 黄褐色 内) 濃い黄褐色	①		040018	
040052	D1包含層	須恵器	黄褐色 甕	口縁部	1/6	内) ナテ 内) ナテ	(12.6)		(5.0)	内) 黄褐色 内) 灰色	①			
040053	E1層2	須恵器	黄褐色 甕	口縁部	1/3	内) ナテ 内) ナテ	(15.0)		(5.1)	灰色	③			
040054	A4包含層、A5層1	須恵器	黄褐色 甕	口縁部	1/10	内)	ナテ 内) ナテ	15.8	(4.9)	濃い黄褐色	①	焼成不良		
040055	A5・D4包含層、F1層2	須恵器	黄褐色 甕	口縁部	1/3	内) ナテ 内) ナテ	(17.5)		(5.7)	灰白色	③			
040056	B5包含層	須恵器	短深 甕	口縁部 残部	1/4	内)	自然剥離部分に付 内) ナテ	(10.0)		(5.4)	灰色	①		040018
040057	A5層1、C3包含層	須恵器	小甕	口縁部 残部	1/12	内)	割取ヘラ切痕ナテ 内) ナテ	9.5	(4.85)	内) 黄褐色 内) 灰白色	③		040018	

第3節 遺物

図説No.	出土地点	種類	形状	部位	保存率	調査・技法・文献など	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器底	胎土	備考	写真	
図46012	B4-D081, C4通 3, C4通台	須恵器	瓶	胴部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ 自然釉付着 Ⅲ) ナブ			(17.6)	Ⅱ) に近い黄褐色 Ⅲ) に近い褐色	②		図版第19	
図46013	B481, C3)レ ンナ, A6通台	須恵器	瓶	胴部 底部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ Ⅲ) ナブ			(22.2)	褐色	②			
図46014	E1通2, D11通台	須恵器	瓶	底部	Ⅱ	Ⅱ) 剥取ヘラ切痕ナブ Ⅲ) ナブ		9.0	(5.3)	灰色	②			
図46015	B481	須恵器	瓶?	底部	Ⅱ/Ⅲ	Ⅱ) 剥取ヘラ切痕ナブ Ⅲ) ナブ		8.0	(3.7)	灰色	②			
図4701	A17上, C1-E2通台	須恵器	瓶	胴部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ			(9.8)	明褐色	②	水揚げ	図版第19	
図4702	D081	須恵器	瓶	胴部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ Ⅲ) ナブ			(7.1)	灰色	①			
図4703	B1)レ ンナ, A2通台	須恵器	瓶	胴部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ			(8.6)	Ⅱ) 灰色 Ⅲ) 灰白色	②		図版第19	
図4704	B1通台	須恵器	瓶	胴部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ Ⅲ) ナブ			(7.5)	灰色	②		図版第19	
図4705	D1通台	須恵器	瓶	胴部	Ⅱ						②	自然釉付着	図版第19	
図4706	D1通台	須恵器	瓶	胴部	Ⅱ						②			
図4707	A4通台	須恵器	瓶	胴部	Ⅱ						②		焼成不良	
図4708	A581, E1通台	須恵器	瓶	胴部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ後ナブ Ⅲ) 当て具痕			(5.4)	灰白色	②			
図4709	A481, A2通台	須恵器	瓶	胴部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ			(12.0)	Ⅱ) 灰色 Ⅲ) 黄褐色	②		図版第19	
図4710	B481, C2通台	須恵器	?	胴部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ Ⅲ) 当て具痕				Ⅱ) 灰白色 Ⅲ) 黄褐色	②			
図4711	E2上1, D1通2, A2-B5-D1-E1 通台	須恵器	瓶	胴部 底部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ		(12.0)	(21.8)	Ⅱ) 暗灰色 Ⅲ) 灰色	②			
図4712	C4通台	須恵器	瓶	胴部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ ナブ Ⅲ) ナブ 当て具痕			(5.6)	灰色	②			
図4713	D2-E2通2	須恵器	瓶	胴部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ Ⅲ) 当て具痕				灰白色	②			
図4714	A3-E2通台	須恵器	瓶	胴部	Ⅱ	Ⅱ) 剥取ヘラ切痕Ⅱ) ナブ Ⅲ) ナブ		7.8	(5.6)	Ⅱ) 暗灰色 Ⅲ) 灰色	②	Ⅲ) 剥取・自然釉 付着		
図4715	D1通台	須恵器	瓶	底部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ 自然釉付着 Ⅲ) 剥取痕		16.6	(4.6)	灰色	②			
図4716	D1通台	須恵器	瓶	底部	Ⅱ	Ⅱ) 剥取ヘラ切痕ナブ Ⅲ) ナブ		15.2	(3.7)	灰色	②		図版第19	
図4717	A3通台	須恵器	瓶	底部	Ⅱ/Ⅲ	Ⅱ) ナブ		(11.8)	(4.1)	灰色	②			
図4718	D2通台	須恵器	瓶	胴部	Ⅱ	Ⅱ) 2本の流紋文・流紋文 Ⅲ) ナブ				Ⅱ) 黄褐色 Ⅲ) 灰色	②		図版第19	
図4719	D1通1, 削取上, D1通台	須恵器	瓦筒	胴部 底部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ		4.6	(9.4)	Ⅱ) 暗灰色 Ⅲ) 灰色	②		図版第19	
図4720	D1通台	須恵器	土師	胴部	Ⅱ					黄褐色	②	胎土に器底含む	図版第19	
図4801	A481, D1通台	須恵器	壺	1) 胴部 2) 底部	1/2	Ⅱ) 1) 胴部-ナブ 胴部-ナブナブ Ⅲ) 1) 胴部-ナブ 胴部-当て具痕	(34.2)		(9.8)	灰色	②③			
図4802	D1通台	須恵器	壺	1) 胴部	1/6	Ⅱ) ナブ	20.0前後		(6.1)	灰色	②			
図4803	A481, A4通台	須恵器	壺	1) 胴部 2) 底部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ Ⅲ) ナブ			(27.8)	(7.7)	に近い褐色	③	水揚げ	図版第19
図4804	B4-D081	須恵器	壺	1) 胴部 2) 底部	1/2	Ⅱ) 1) 胴部-ナブ 胴部-ナブナブ	34.0		(6.4)	灰色	②			
図4805	D1通1, B4通台	須恵器	壺	1) 胴部	1/6	Ⅱ) ナブ Ⅲ) ナブ			(27.8)	(2.3)	灰色	②		
図4806	C281	須恵器	壺	1) 胴部	1/6	Ⅱ) ナブ Ⅲ) ナブ			(23.9)	(3.7)	灰白色	②		
図4807	A・B481	須恵器	壺	1) 胴部 2) 底部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ Ⅲ) 胴部-当て具痕	(8.5)		(4.7)	灰色	②	Ⅲ) 自然釉付着		
図4808	E1通2	須恵器	壺	1) 胴部 2) 底部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ Ⅲ) ナブ	20.0前後		14.0前後	灰白色	②			
図4809	C281	須恵器	壺	1) 胴部 2) 底部	1/6	Ⅱ) 1) 胴部-ナブ 胴部-ナブナブ Ⅲ) 1) 胴部-ナブ 胴部-当て具痕	(22.0)		(6.3)	灰白色	②		図版第19	
図49010	B3-B4-E281), A4-E2-B4- C4-D1-E2通 台	須恵器	壺		2/5	Ⅱ) ナブ	(14.7)	(11.4)	24.3	灰色	②	胴部にヘラ記号	図版第19	
図4901	E17上	土師器	土師	底部					(4.9)	に近い褐色		焼成不良?	図版第20	
図4902	A0-17上	土師器	土師	1) 胴部	Ⅱ				(5.0)	に近い黄褐色	②			
図4903	D2通台	土師器	土師	1) 胴部	1/10	摩滅のため調整不明	(29.8)		(5.1)	に近い褐色	②		図版第20	
図4904	B481	土師器	土師	1) 胴部	1/10	摩滅のため調整不明	(29.8)		(5.5)	浅黄褐色	②		図版第20	
図4905	C3)レ ンナ	土師器	土師	1) 胴部	1/6	摩滅のため調整不明	(23.9)		(7.0)	灰白色	②	段の1層?	図版第20	
図4906	C3通台	土師器	土師	底部	3/2	Ⅱ) ナブ	11.5	6.0	2.7	浅黄褐色	①②			
図4907	C3)レ ンナ	土師器	土師	底部	3/2	Ⅱ) 剥取ヘラ切痕ナブ Ⅲ) 摩滅	11.5	6.0	3.4	に近い黄褐色	①②			
図4908	C281	土師器	土師	底部	4/5	Ⅲ) 剥取ともナブ	(10.0)	6.8	(1.9)	に近い黄褐色	②		図版第20	
図4909	B3通台	土師器	土師	底部	Ⅱ				(12.0)	(6.0)	に近い褐色	②	調整?	
図4910	C4通台	土師器	土師	底部	3/5	Ⅱ) 剥取ナブ			5.8	(1.5)	灰白色	②		
図4911	C3)レ ンナ	土師器	土師	底部	Ⅱ	Ⅱ) ナブ			5.8	(1.1)	灰白色	②		

第5章 湯谷砂田遺跡

調査No.	出土地点	種類	形状	部位	残存率	調整・技法・文様など	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	表層	胎土	備考	写真掲載
040012	B3台台	土師器	高部	高部			(6.0)	(0.7)		外) 黒赤褐色 内) 黄褐色	②	バテ蓋付?	
040013	B4溝1	土師器	丸	高部	外) 黒いナメ ナメ 内) ナメ		(6.2)	(2.3)		外) に近い黄褐色 内) 黒色	②	黒色土器?	
040014	C3溝	土師器	杯底	高部	外) 赤黒 ナメ		(7.0)	(1.8)		外) に近い褐色 内) に近い黄褐色	②	底部外面赤黒もしくは化境粘土	
040015	溝1	土師器	高部	高部	外) 赤黒		5.0	(1.4)		外) に近い褐色 内) に近い黄褐色	②		
040016	C3台台	土師器	高部	高部	外) ナメ		7.4	(2.4)		に近い褐色	②		
040017	B4台台	土師器	高部	高部	外) 赤黒		5.6	(0.8)		褐色	②	バテ蓋付	
040018	A4溝1	土師器	口縁部 体部	口縁部			7.8	(1.5)		外) に近い黄褐色 内) 黒色	②	黒色土器	
040019	B3台台	土師器	高部	高部	外) 赤黒		(7.0)	(2.7)		灰白色	②		
040020	溝1	土師器	高部	高部	外) 赤黒 ナメ		4.3	(3.2)		褐色	②	付着高付	
040021	溝1	土師器	高部	高部	外) 赤黒 ナメ		4.6	(0.9)		黄褐色	②		
040022	C3台台	土師器	口縁部	口縁部			6.6	(1.1)		外) 黒褐色 内) 黒色	②	黒色土器	
040023	溝1	土師器	高部	高部	外) 赤黒 ナメ 内) ナメ		5.8	(1.0)		に近い黄褐色	②		
040024	B4溝1	土師器	高部	高部	外) 赤黒 ナメ 内) 黒いナメ		6.2	(1.8)		に近い黄褐色	②		
040025	溝1	土師器	高部	高部	外) 赤黒 ナメ		5.0	(1.4)		褐色	②		
040026	C2台台	土師器	高部	高部	外) 赤黒 ナメ		5.8	(1.6)		黄褐色	②		
040027	D2台台	土師器	高部	高部	外) 赤黒		6.0	(1.9)		に近い褐色	②		
040028	A4溝1	土師器	高部	高部	外) ナメ 内) 黒いナメ		(12.8)	(3.5)		外) 黄褐色 内) に近い褐色	③		
040029	D2溝1	土師器	高部	2/5 ナメ			(12.1)	(3.3)		に近い黄褐色	③		
040030	C2台台	土師器	高部	高部	外) ナメ		7.4	(3.0)		に近い黄褐色	③	内面に付着	
040031	A1系土	土師器	高部	高部	摩滅のため調整不明		7.8	(2.25)		外) 灰白色 内) 黒色	①	内) 黒色	
040032	C3トレンチ	土師器	高部	11/12	摩滅のため調整不明		7.2	(2.0)		外) に近い褐色 内) 黄褐色	②	胎土に赤黒含む	040030
040033	C1系土	土師器	高部	高部	外) ナメ 内) 黒いナメ		7.6	(2.5)		に近い黄褐色	②		
040034	A4台台	土師器	高部	高部	摩滅のため調整不明		7.5	(2.9)		灰白色	②		
040035	D2溝2	土師器	高部	高部	内外面ともにナメ 赤黒粘付高付		6.2	(2.2)		外) に近い褐色 内) 黄褐色	③④		040030
040036	C4台台	土師器	高部	高部	外) 赤黒ナメ 内) 黒いナメ		(8.0)	(2.9)		に近い黄褐色	③		
040037	C1系土	土師器	高部	高部	外) ナメ		4.8	(3.0)		黄褐色	③		
040038	D1溝2	土師器	高部	高部	摩滅のため調整不明		5.8	(1.8)		黄褐色	③		
040039	C1台台	土師器	高部	高部	外) ナメ 内) ナメ		6.0	(2.0)		に近い黄褐色	③		
040040	B4溝1	土師器	高部	高部	外) ナメ 内) ナメ		8.8	(4.2)		灰白色	③		
040041	溝3	土師器	高部	高部	外) ナメ		(8.4)	(4.0)		に近い黄褐色	③		
040042	C1台台	土師器	高部	1/4	摩滅のため調整不明		(8.4)	(2.6)		褐色	③		
040043	C3トレンチ	土師器	高部	高部	摩滅のため調整不明		8.8	(2.0)		黄褐色	③		
040044	B1系土	土師器	高部	3/5	外) 摩滅 内) ナメ		10.4	(2.8)		黄褐色	③④		
040045	C2溝1	土師器	溝底?	高部	外) ナメ		(7.0)	(2.3)		外) に近い褐色 内) 黄褐色	③		
040046	A4溝1	土師器	杯底	高部	外) ナメ 内) ナメ		6.1	(1.6)		黄褐色	③	内面に付着	040030
040047	C4台台	土師器	高部	高部	外) 赤黒ナメ 内) ナメ		5.5	(1.7)		褐色	③		040030
040048	A2系土	土師器	高部	高部	外) 摩滅 内) ナメ		6.0	(2.3)		に近い黄褐色	③		
040049	E1台台	土師器	高部	高部	摩滅のため調整不明		7.6	(2.2)		黄褐色	③		
050011	B4トレンチ	土師器	溝	口縁部 体部	外) 下部にタタキ 内) 下部に当て高	(30.8)		(10.3)		灰白色	①		040030
050012	B4トレンチ	土師器	溝	口縁部	1/12	外) ナメ 内) ナメ	(29.4)		(3.7)	に近い黄褐色	②		
050013	A4台台	土師器	溝	口縁部	1/10	摩滅のため調整不明	(22.0)		(6.6)	に近い黄褐色	②		040030
050014	F1系土	土師器	溝?	口縁部	内外面ともにナメ	(17.7)		(4.9)		外) 黄褐色 内) 灰白色	②		
050015	B1系土	土師器	溝	口縁部	内外面ともにナメ			(8.0)		に近い褐色	②	胎土にガラス質含む	
050016	B3台台	土師器	土師	2/5	外) ナメ 内) ナメ		(3.4)		(3.4)	に近い黄褐色	②		040030
050017	B4台台	土師器	溝底?	体部	外) ナメ タタキ			(3.5)		外) 褐色 内) に近い褐色	②		
050018	D1溝1	土師器	溝	口縁部	1/10	摩滅のため調整不明	(18.0)		(6.2)	灰白色	②		
050019	C1台台	土師器	高部	高部	外) ナメ ナメ 内) ナメ		(12.6)		(6.2)	外) 灰白色 内) に近い褐色	②		
050010	A5台台	土師器	瓶	把手				(8.8)		灰白色	①		
050011	A5台台	土師器	瓶	頸部	1/3	ナメ 残ナメ		(11.1)		灰白色	②		040030

残存率は部材に対する割合とする。

口径、底径の測定値を()、器高の残存高を()で記述する。

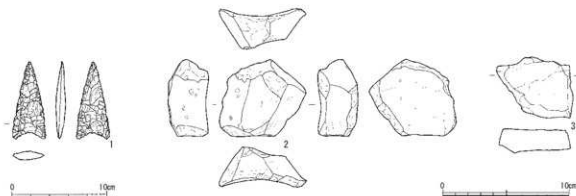
胎土は①黒褐色 (底径1.0cm以下)、②黄褐色を多量に含む、③赤黒 (底径1.1-2.0cm) を含む、④小石 (底径2.0cm以上) を含む、で分けられている。

2 石器・石製品

出土した石器・石製品は、総数で5点を数える。うち3点を図化し、それ以外は観察表（第11表）に掲載した。すべて包含層または客土からの出土品である。

石鏃（第51図1） 流紋岩製の凹基無茎鏃である。整った二等辺三角形を呈し、幅に比べ長身である。横断面は凸レンズ状を呈する。表裏面とも調整剥離が入念に施され、縁辺は鋭い。摩滅は少なく、剥離状況が明瞭に観察できる。縄文時代の所産と見られるが、本遺跡出土の土器と時期がかけ離れるため、他所から流れ込んだものと推測される。

砥石（第51図2・3） ともに凝灰岩製。2は不整七面体を呈する。左上端面以外を使用しており、砥面はいずれも内湾し、よく磨れている。仕上砥に近い中砥と判断される。3は板状を呈し、周囲を欠く。表面のみ使用し、縦走る擦痕を若干残す。あまり使用されておらず、砥面に細かい凹凸が見られる。中砥と判断される。



第51図 石鏃・砥石実測図（縮尺1/3、1のみ縮尺1/2）

第11表 石鏃・砥石観察表

遺物No	図様	西上地区	西上遺構	遺存状態	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考	押印No
1	石鏃	B3	包含層 2	完形	40.8	17.3	5.0	15	流紋岩	無茎凹基三角形	第50図 1
2	砥石	C1	包含層 2	一部欠	70.8	64.1	26.8	(119)	凝灰岩	中砥	第50図 2
3	砥石	E2	客土	破損	(46.3)	(58.2)	(19.0)	(68)	凝灰岩	中砥	第50図 3
4	砥石	C1	包含層 1	破損	(37.5)	(27.0)	(18.0)	(27)	凝灰岩	中砥	—
5	砥石	D2	包含層 1	欠片欠	(31.5)	(24.5)	(11.5)	(12)	凝灰岩	中砥	—

第4節 まとめ

今回の調査成果から、本遺跡は基本的に古代の集落跡と判断される。以下、遺構・遺物の内容を検証し、遺跡の性格を考察する。

1 遺構

溝1が主要かつほぼ唯一の遺構であり、住居や建物などの居住に関わる遺構は全く検出されなかった。その溝1も、旧尾根裾の外周部に形成された自然流路に若干手を加えた程度のもと考えられ、遺構自体にもさしたる特徴は見出せない。そもそも、当調査区は段丘地形の狭隘な上位緩斜面上に立地し、およそ居住に適した地形とは言いがたいので、この結果も妥当なものではある。

立地や遺構の内容のみで判断するならば、当調査区は単なる集落の縁辺部と結論付けられるが、溝1覆土から遺物が大量に検出された事実は、遺構そのもの以上に重要な成果と言える。すなわち、遺物を廃棄したと見られる集落本体が溝1を遡った南方の何処かに展開していたこと、遺物の量に相応する規模を有していたことなどが推察されるからである。

2 遺物

土器は9世紀後半代から10世紀前半代に属する須恵器および土師器が主体だが、ともに破片資料が大半で、器形と焼成が交錯する例（土師器の器形に須恵器の焼成、またはその逆）が多々見られたことから、調査区周辺に須恵器および土師器の窯跡が近接して存在し、それらを削平した客土とともに当地に混入した状況が想定される。したがって、厳密には当遺跡の所属時期を示す遺物とは言えないが、遺構遺物と明確な時期差が見出せないことや、その遺構遺物自体も当地に流入してきたと考えられることなどから、大筋として当遺跡はこれら出土土器と同様の時期に属するものと見なしておく。

その溝1覆土遺物について、瓦塔の相輪（第47図19）や土鈴（第47図20）など、仏教的要素を有するものが見られることは、寺院など仏教関連施設の実在を示す貴重な物証として、特筆に値する。

3 遺跡

遺構・遺物の内容から判断して、当調査区は寺院を中心に展開する集落の縁辺部と考えられる。さらに、地理的条件を踏まえれば、集落の本拠地は当調査区南方に展開する上吉野集落、すなわち旧印内集落一帯にほぼ比定できると推測される。これは前章で導き出した結論とも見事に符合しており、これまで文献史料でしか確認し得なかった印内とその寺院について、明確な時期と裏付けが与えられた意義はきわめて大きいと言えよう。

第6章 吉野ヶ岳と山岳信仰

今回の上古野法善田遺跡ならびに湯谷砂田遺跡調査成果から、9世紀代の上古野集落周辺に寺院関連施設が実在し、宗教活動を展開していたことが明らかとなった。上古野集落は吉野ヶ岳の山岳信仰の中心地と目され、集落の旧名「印内」の由来となった僧坊もその影響によって発生・成立したと推測されることから、今回の成果は吉野ヶ岳における山岳信仰の動態を示すものとも言える。

また、上古野法善田遺跡のまとめ（第4章第4節）でも記したように、9世紀代とはまだ局地的であった白山信仰が徐々に中央の宗教勢力にも浸透し始め、全国的な普遍化・大衆化への胎動が始まる時期でもある。白山の膝元である越前の吉野ヶ岳一帯で、まさにその時期における山岳信仰の動態が見出せることも、また重要な成果と言うべきであろう。

吉野ヶ岳はその名のとおりに、吉野地区を象徴し、泰澄伝説と相まって古くから信仰の対象とされてきた山である。その信仰の源泉は、泰澄伝説と越前五山に象徴される白山信仰に求められる。泰澄が幼少より生涯信仰し、白山の主神しらやまのみのおおみかみ白山比咩大神しらやまのひめがみの本地仏^①ともされる十一面観音が祀られている事実が、吉野ヶ岳と白山信仰との関連を何よりも雄弁に物語っている。

一方、文献史料を見ると、「吉野の嶽 藏王権現の宮あり 三芳野の吉野の山をなぞらへしにや」（『掃部記』）、「吉野山 泰澄大師和州吉野山藏王権現ヲ勤請ノ霊山ナリ」（『越前国名勝志』）など、この山の名が奈良吉野に由来すると記されている。奈良吉野は、古くは記紀の時代から人々の崇敬を受けてきた地域で、特に大峯^②はその天険な地勢から、山岳修験の根本道場として金峯山寺^③や大峯山寺^④を中心に発達し、現在に至るまでも人々の信仰を広く集め続ける修験道の聖地である。

確かに、山頂の「藏王堂」とは文字どおり吉野修験道の本尊たる藏王権現を祀る堂に他ならない。また、山頂への道は現在使われている上古野からの道と、かつて使われていた湯谷^⑤からの道の二つがある（第4図）が、この二つの道は山頂を経由しつつ、湯谷―上古野間を縦走する経路を辿っており、大峯山中を縦断する大峯奥駈道^⑥を模したかのような印象も受ける^⑦。ほかに、印内の枝村であった鳥^⑧（現、松岡鳥集落）に伝わる、後醍醐天皇の皇子尊良親王終焉の伝承^⑨などについても、信憑性はさて置き、吉野に対する崇敬や憧憬のあらわれと解釈できよう。

このように、吉野ヶ岳には白山信仰と大峯信仰が並立しており、白山修験道の修行地としては特異な事例である^⑩。大峯信仰は吉野修験道を知る修行者が導入、定着させたと考えられるが、当地で白山信仰と並立するに至った経緯については、残念ながら史料が非常に乏しく、断片的にしか窺い知れない。

まず、開山の時期については、堂の縁起によれば、泰澄が養老二年（718）に十一面観音と藏王権現を祀ったとされる。無論、伝承を鵜呑みにはできないが、藏王堂周辺で採集された須恵器片の比定時期と、上古野法善田遺跡ならびに湯谷砂田遺跡の主体時期は同じ9世紀代であり、吉野ヶ岳山中・山麓一帯における山岳修験活動は、平安初期までにはかなり本格的に機能していたものと推測される。

下って、湯谷神明神社の仏像が平安末期～鎌倉初期の作とされることから、中世初期までには室堂などを含めた修行場の形態がほぼ確立されていたと推測される。さらに正中二年（1325）十一月二十五日付承鎮法親王附狀（『三千院文書』）には「越前国吉野保^⑪」とあり、鎌倉末期までには吉野の地名とともに、大峯信仰が定着していたと考えられる^⑫。

上吉野の旧名である「印内」が文献に見える¹⁰⁾のは、¹¹⁾慶長十五年(1610)十月二十六日付徳善寺惣門徒中言上書(「昌藏寺文書」)が最初であるが、『越前国名蹟考』の記述から推測して、僧坊は天正年間より相当以前に成立しており、地名も僧坊同様に定着していたと見なすのが妥当であろう。

明治期に村名は印内から上吉野と改称され、その地名も伝承の類に属してしまっただが、吉野ヶ岳の信仰は絶えることなく受け継がれ、現在に至っている。なぜ当地なのか、という疑問は依然として残るが、白山信仰にせよ大峯信仰にせよ、古の人々がかの地に対して深い崇敬と憧憬の念を抱き、その補完をとともに吉野ヶ岳に求めた結果が、現在の吉野地区や吉野ヶ岳の有り様であるように思える。

註

- 1 神仏習合(垂迹)思想により、日本古来の神と同一化された仏尊。
- 2 奈良県吉野から和歌山県熊野にかけての、紀伊半島中央部に連なる山岳地帯の総称。
- 3 現、金峯山修験本宗総本山。奈良県吉野郡吉野村吉野山に所在する。本来は大峯山寺も含めた寺院の総称で、白鳳年間(7世紀末頃)に役小角によって開かれたと伝えられる。本堂は「山下の藏王堂」と呼ばれる。
- 4 金峯山寺の南約28kmにある、奈良県吉野郡天川村山上ヶ岳(1,719m)山頂に所在する。本堂は「山下の藏王堂」に対して、「山上の藏王堂」と呼ばれる。
- 5 湯谷という集落名は昭和30年(1955)に改称したもので、旧名は「猪谷」である。猪谷田畑遺跡が湯谷地籍に属するもの、旧名の名残である。なお、江戸初期には印内・猪谷・鳥宮重をまとめて印内猪谷村と称していたが、後に分村している。
- 6 吉野(金峯山寺・大峯山寺)と熊野(熊野本宮大社)の二霊場を結ぶ修行道。熊野から吉野へ向かう行程を順峯、吉野から熊野へ向かう行程を逆峯とそれぞれ呼び、熊野修験の修行者達は順峯を、吉野修験の修行者達は逆峯を主に辿ったとされる。ちなみに、熊野修験は本山派と呼ばれる天台宗系教団であり、吉野修験は当山派と呼ばれる真言宗系教団である。
- 7 「白山信仰の行者達は、主として猪谷から板室(堂室)へ、それより山の稜線に出て、山頂に登拝し、また大峯信仰の行者達は、山麓の院内(印内)と云われていた上吉野の僧房より、九折の道をたどって山頂に登拝し、共にこの山を練行の道場としていた」(野村2002 27頁)。この「白山」を「熊野」に置き換えると、そのまま大峯における順峯・逆峯の構図と符合する。なお、白山信仰は(藤山市平泉寺町)が平安時代末頃に比叡山延暦寺の末寺となることから、天台宗の全国分布に伴って全国に流布していくが、熊野修験も同様に天台宗系教団であることは非常に興味深い。
- 8 第3章註1参照。
- 9 南北朝期の作と見られる宝篋印塔1基が実在し、尊良親王の墓と伝えられる。『太平記』では、親王は延元二年(1337)に越前国敦賀の金ヶ崎城にあって、足利勢に攻められて自害したとされるが、吉野地区の伝承では、親王は金ヶ崎城を逃れ、当地に隠棲しつつ、時機を待つも果たせず、この世を去ったと伝えられる。
- 10 吉野ヶ岳のほかにも、春澄に縁の深い越知山の修験霊場である大谷寺(丹生郡越前町)に、平安時代の作と見られる一本造の藏王権現立像が伝えられていることが近年明らかになった。また、「平泉寺境内絵図」にも藏王権現の堂舎が確認されるという(岩井2007)。ただ、いずれの場合も主体となるのはあくまで白山信仰であり、吉野ヶ岳のように両者が完全に並立している状況ではない。
- 11 天台宗円融房。吉野地区の谷間一帯に存在したとされる荘園で、成立期は鎌倉期以前とも言われる。円融房とは現在の三院門跡(京都市左京区大原)で、院門跡または整本門跡とも呼ばれる。
- 12 註10にあるように、越知山では平安期に大峯信仰が移入していたと見られることから、吉野ヶ岳においても同様の可能性が指摘できる。
- 13 確定した年代ではないが、慶長十一年(1606)頃の越前国絵図にも印内猪谷村として見える。いずれにせよ、確実に遡れるのは江戸期初頭までである。

参考文献

- 小栗田淳 監修 1981 『福井県の地名』 日本歴史地名体系第18巻 平凡社
 河原純之・高田正彦・華田嘉彦・松浦義明 責任編集 1989 『角川日本地名大辞典 18 福井県』 角川書店
 野村英一 1978 『松岡町史 上巻』
 野村英一 2002 『II-5. 越前五山の尊像』 『地方作仏教尊像の研究 若狹・越前の秘仏』 25-38頁
 前岡実知雄・松田真一 編 2004 『吉野 仙境の歴史』 文英堂
 岩井孝樹 2007 『春澄と白山越前修験道』 『佛教藝術』 294号 毎日新聞社 64-91頁

写 真 图 版



(1) 調査区遠景 (東より)



(2) 調査区全景 (北より)



(1) 井戸1 (南東より)



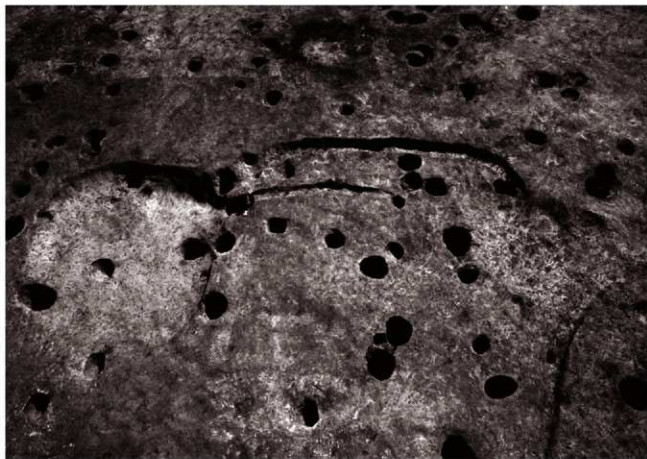
(2) 土坑1 (北西より)



(3) 堅穴1 (北東より)

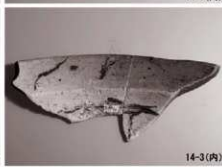
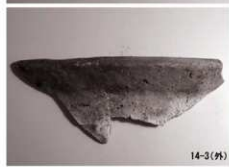


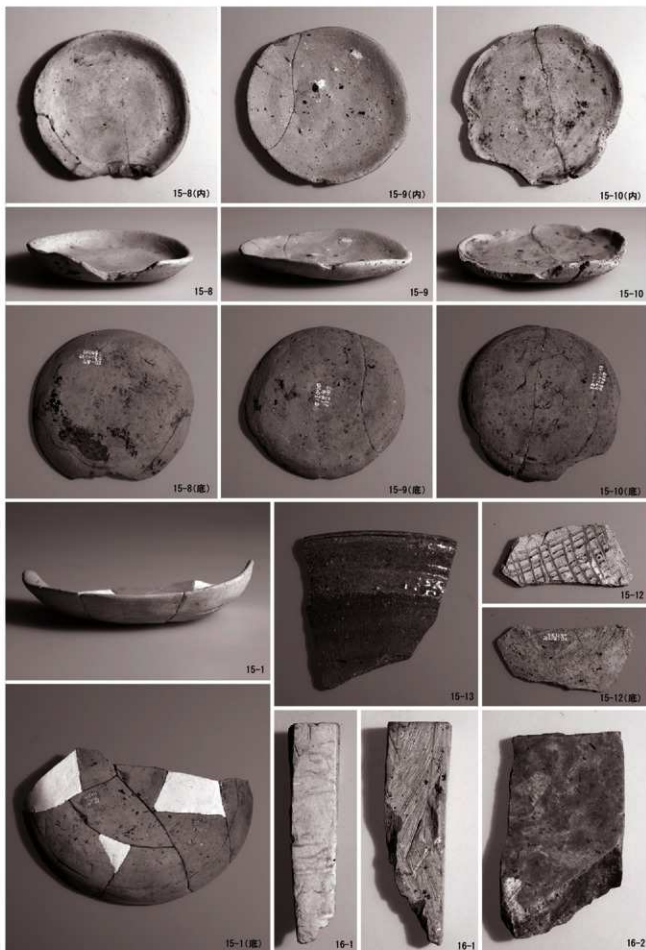
(1) 土坑10・溝8 (東より)



(2) 土坑11・13・溝4・5・7 (北より)

図版第四
猪谷田畑遺跡
遺物



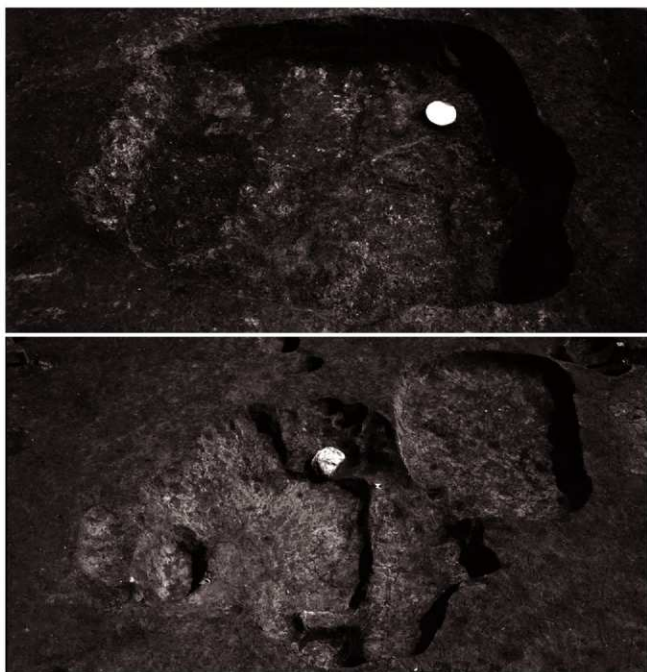




(1) 調査区遠景 (南東より)



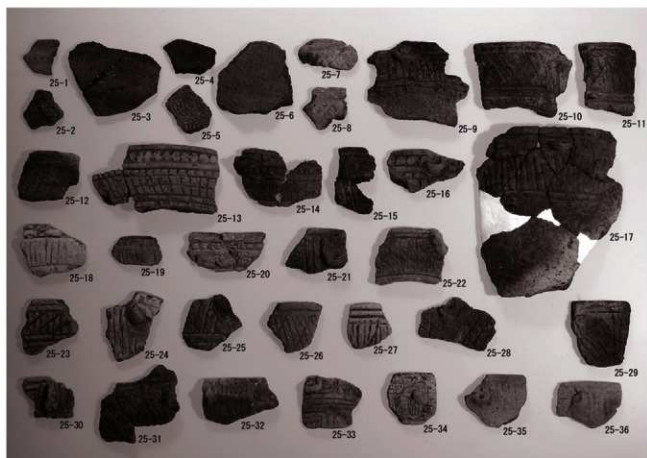
(2) 調査区①・②・③全景 (南より) 左上: 調査区① 右: 調査区② 左下: 調査区③



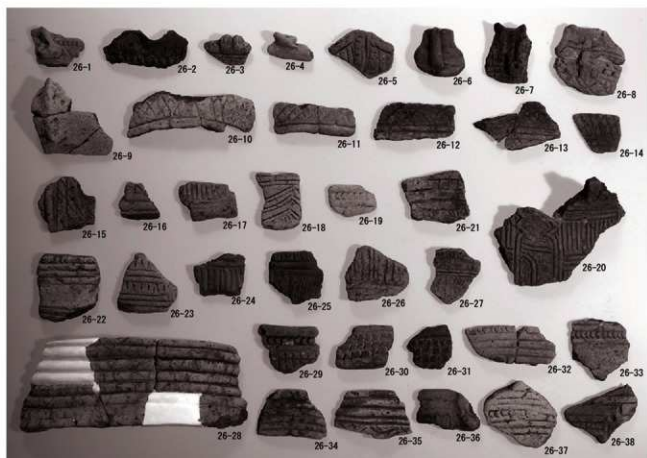
(1) 土坑1・6（北より） 上：土坑1内部焼土検出状況 下：土坑1・6完掘状況



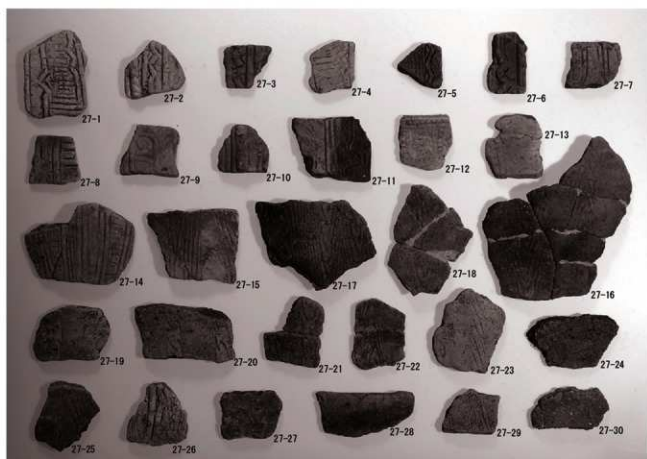
(2) 土器集中出土状況（北より） 左：北側集中出土 右：南側集中出土



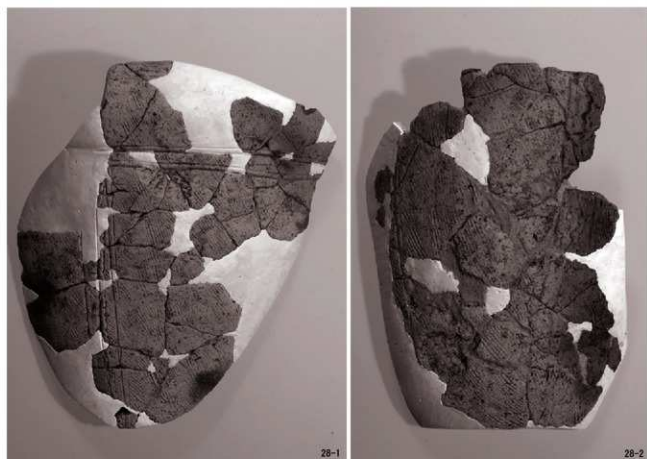
(1) 縄文土器



(2) 縄文土器



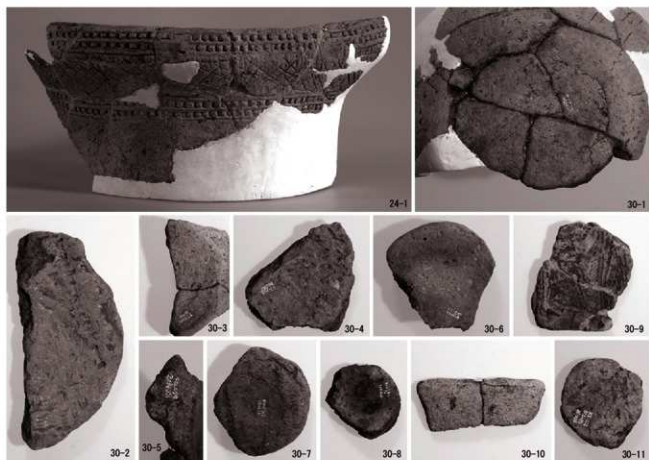
(1) 縄文土器



(2) 縄文土器



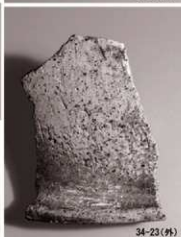
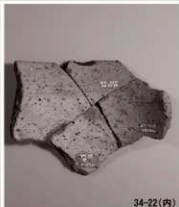
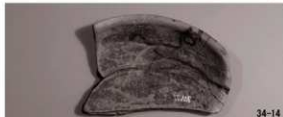
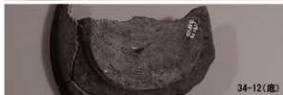
(1) 縄文土器

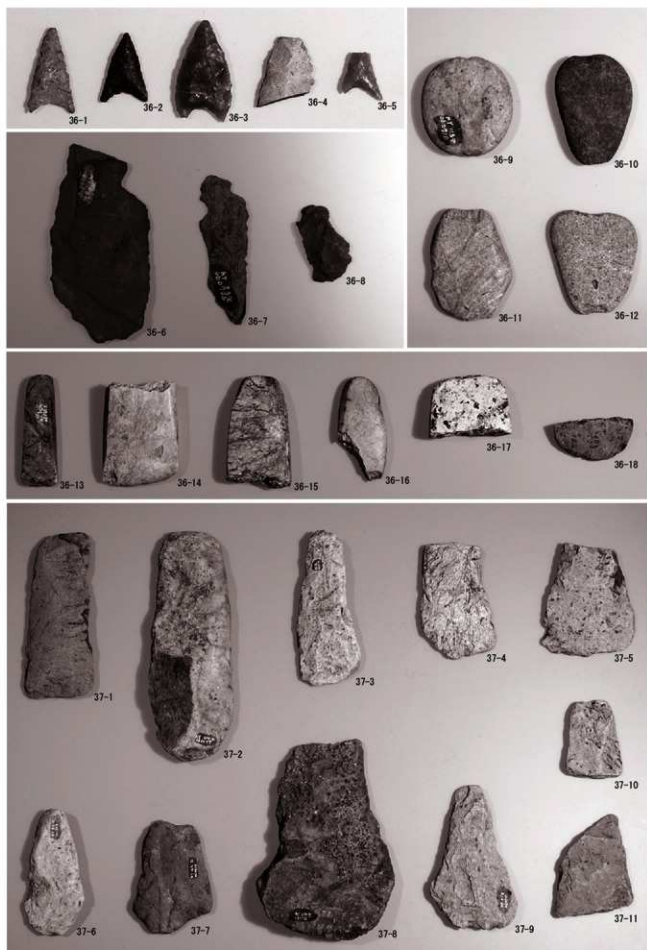


(2) 縄文土器

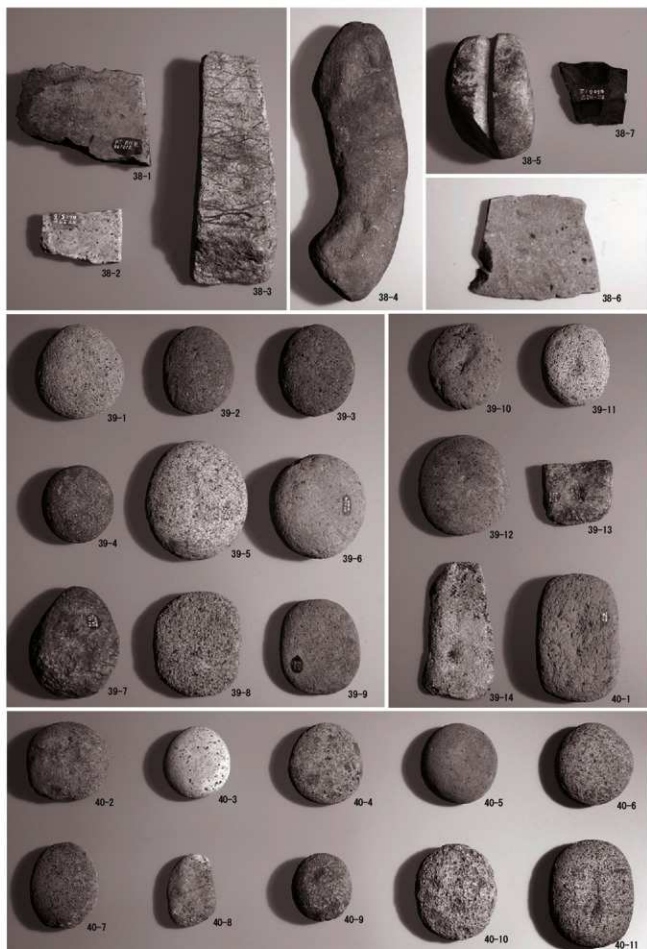








上段左上：石鏃、同左下：石匙、同右：石錘 中段：磨製石斧 下段：打製石斧



上段左：砥石、同中央・右：不明石器 中・下段：磨石類



(1) 調査区全景 (南より)



(2) 調査区全景 (東より)

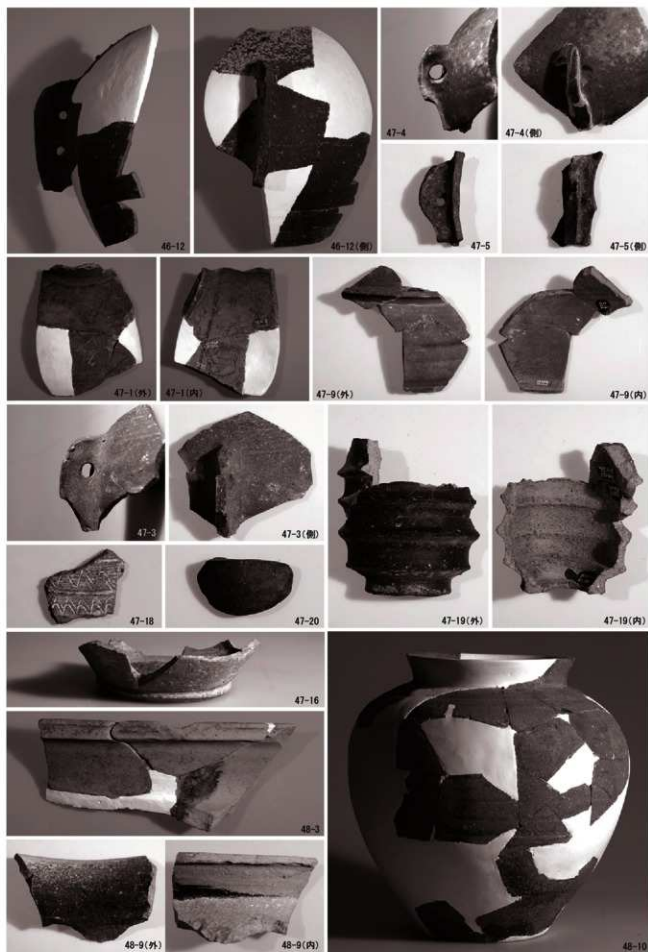


(1) 溝1・3 (北西より)



(2) 溝1・3 (南東より)





報告書抄録

ふりがな	いだにたばたいせき かみよしのほうぜんだいせき ゆだにすなだいせき							
書名	猪谷田畑遺跡 上吉野法善田遺跡 湯谷砂田遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第114集							
編著者名	中森敏晴 赤澤徳明 白川綾 水谷圭吾							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
猪谷田畑遺跡	吉田郡永平寺町 松岡湯谷	18322	14028	36°3'55"	136°17'55"	20051108～ 20060327	1,563㎡	松岡吉野 地区
上吉野法善田 遺跡	吉田郡永平寺町 松岡上吉野		14032	36°3'29"	136°17'54"	20060424～ 20070330	3,640㎡	県営経営 体育成基
湯谷砂田遺跡	吉田郡永平寺町 松岡湯谷		14030	36°3'41"	136°17'56"	20070412～ 20070627	512㎡	盤整備事 業
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
猪谷田畑遺跡	集落	中世 (13世紀代)	掘立柱建物 土坑・溝 井戸		土師器(かわらけ、甕、鍋、 羽釜など) 中世陶器		土坑と溝の複合遺構を 2基検出。	
上吉野法善田 遺跡	集落	古代 (9世紀代)	掘立柱建物 ビツ列 土坑		縄文土器・土師器・須恵器 石器(石鏃・石匙・打製石 斧など)		須恵器には墨書土器や 転用硯が含まれる。	
湯谷砂田遺跡	集落	古代 (9世紀後半 代～10世紀前 半代)	溝(水路) 土坑		土師器 須恵器 越前焼		遺物の大半は、客土か らの混入と推測され る。	
要約	<p>3遺跡とも松岡吉野地区の谷の中に所在する。同地区は吉野ヶ岳を中心とした山岳修行の場として古くから有名で、中世以前には寺院も存在したとされ、3遺跡との関連性が注目される。</p> <p>猪谷田畑遺跡：基本的に居住域と推測されるが、何らかの作業場が設置されていた可能性がある。</p> <p>上吉野法善田遺跡：墨書土器や転用硯など、かつて存在したとされる寺院の影響が推定される。</p> <p>湯谷砂田遺跡：大量の流入遺物から、近隣に相応規模の集落本体が展開していた可能性は高い。</p>							

福井県埋蔵文化財調査報告 第114集

猪谷田畑遺跡
上吉野法善田遺跡
湯谷砂田遺跡

—松岡吉野地区 県営経営体育成基盤整備事業に伴う調査—

平成22年3月15日 印刷

平成22年3月31日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 白崎印刷株式会社

〒910-0843 福井市西開発3-715
